



\* 0 0 0 0 7 1 2 0 0 0 \*

0000712-000

302.22-G65s5

青竜刀

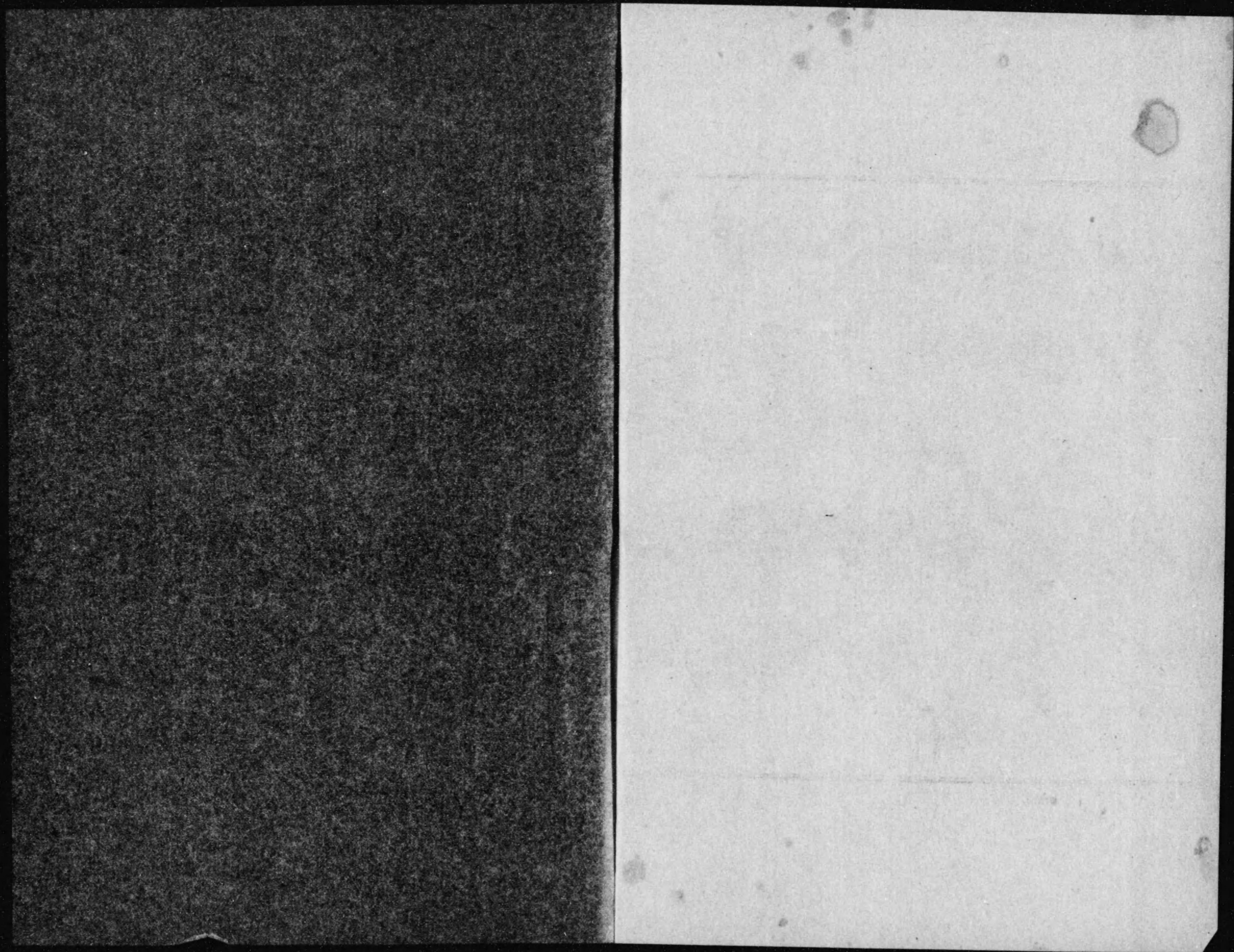
後藤朝太郎・著

万里閣書房

1929 6版

AAB





後藤朝太郎著

支那  
秘談  
青龍  
刀

東京 萬里閣書房

302.22  
G6505



512638

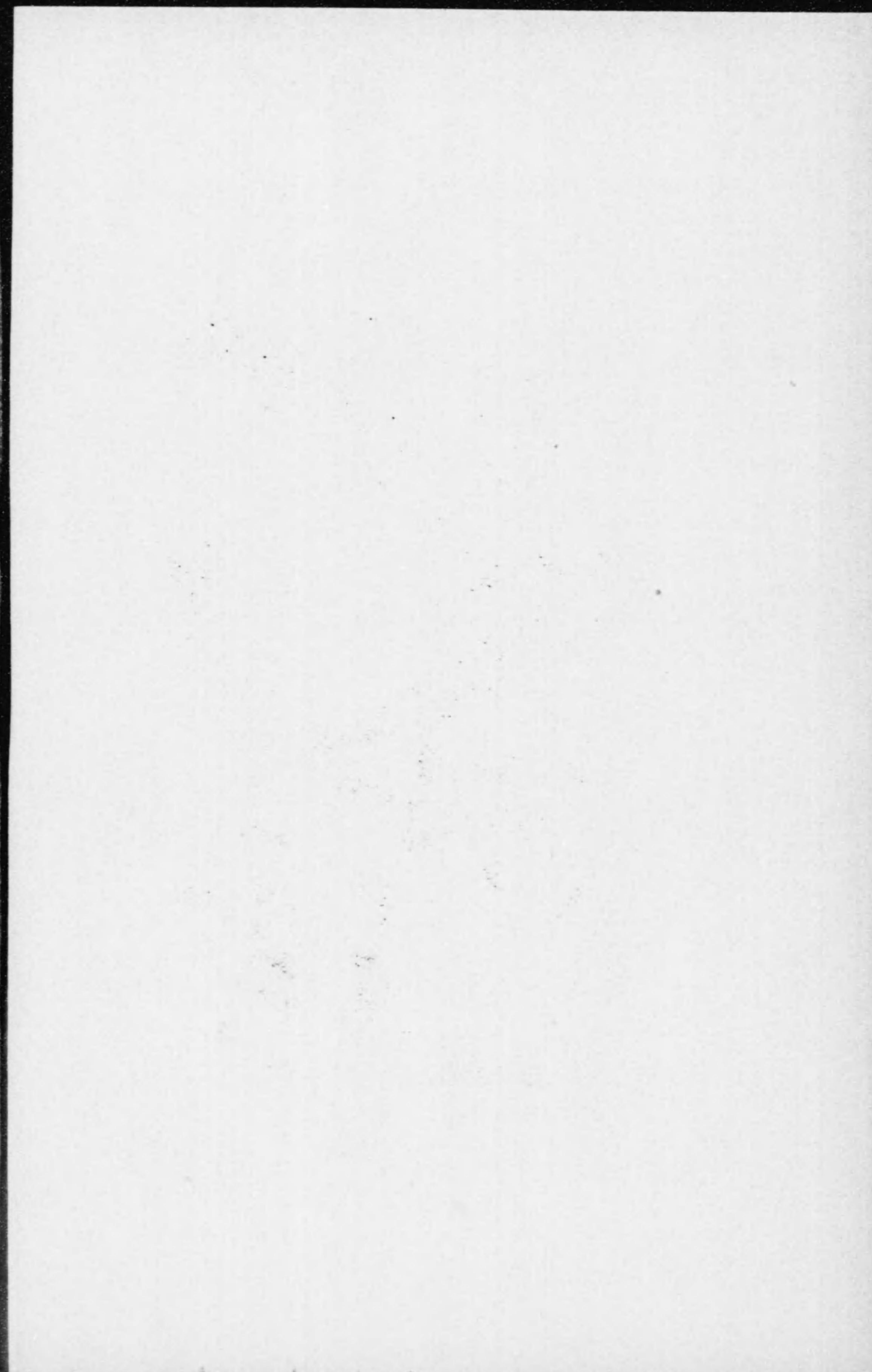
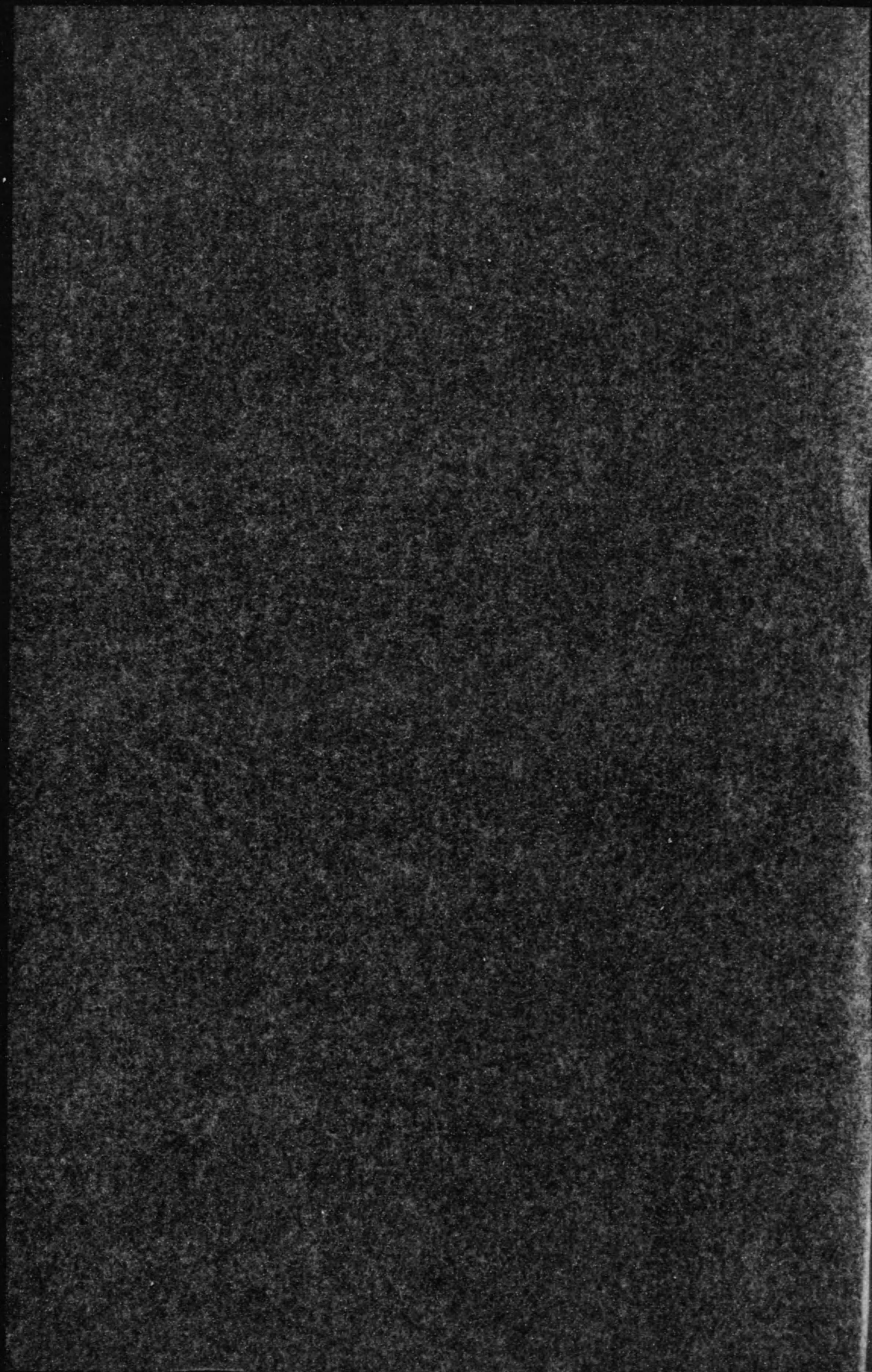
302.22  
G65A5



512638



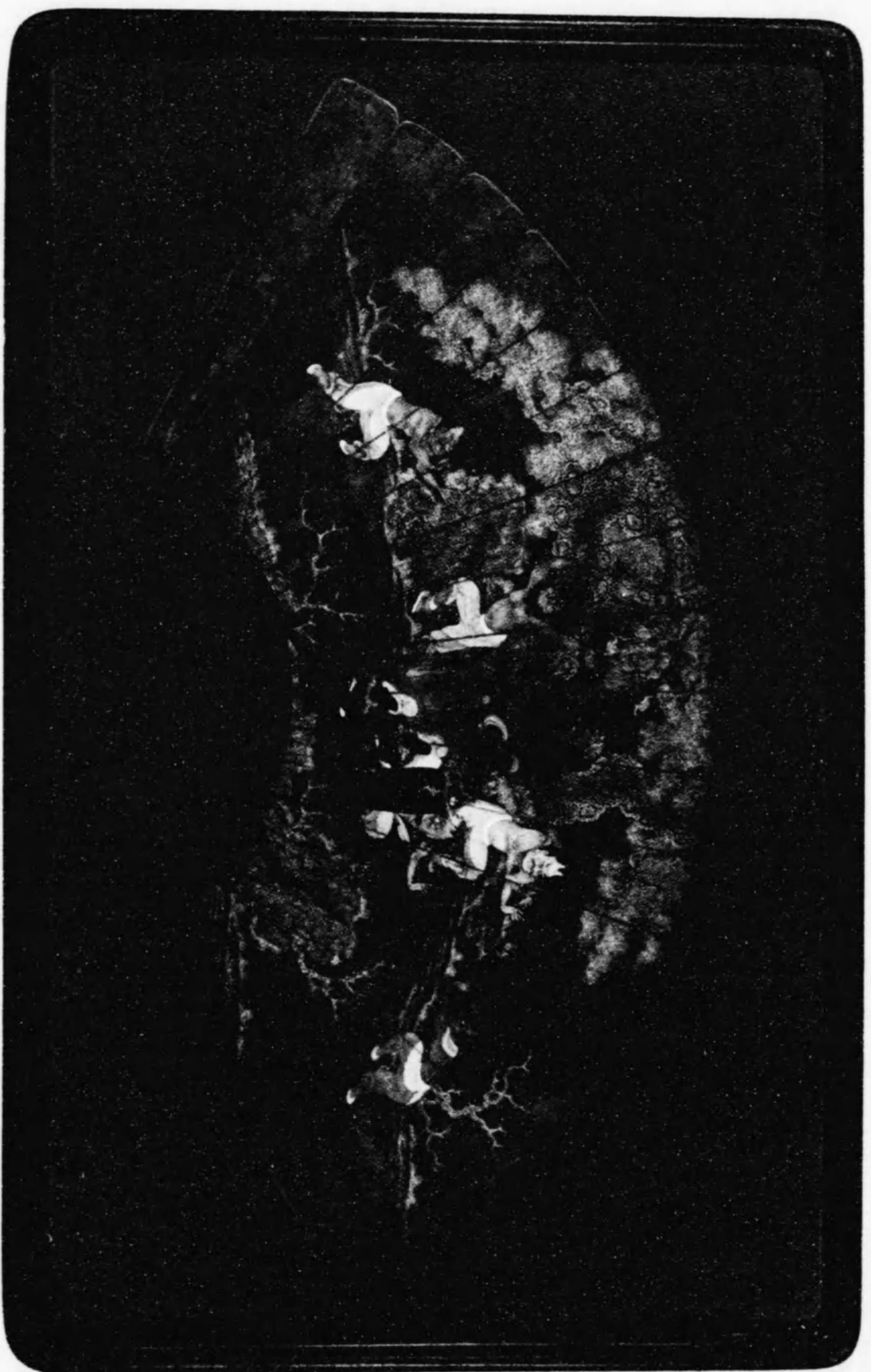
刀龍青の用身護其と飛張る護を羽關



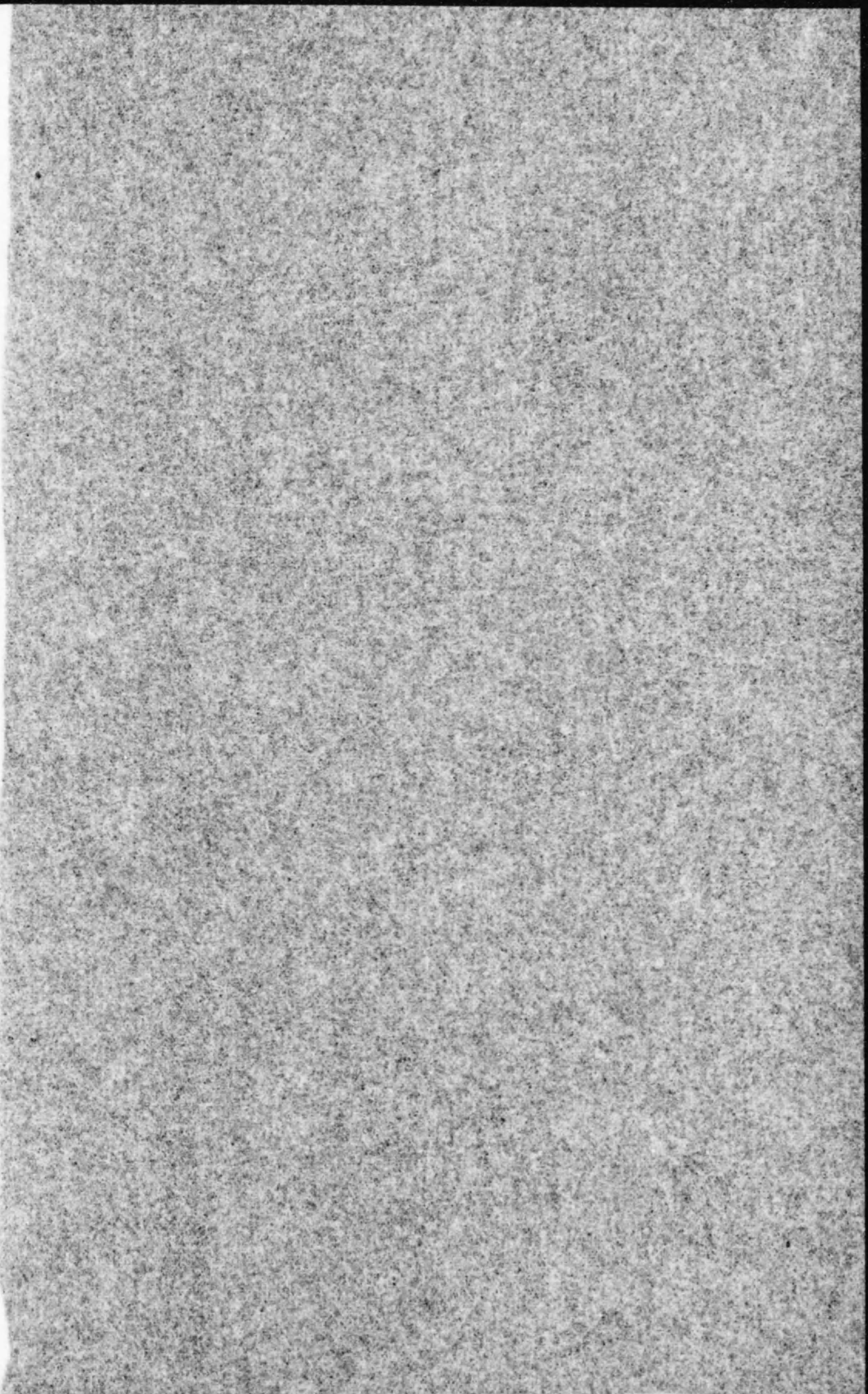


圖のるへ押し捕を或福てし役使を神鬼が道鎮る見に問俗那支





圓のるへ押し揃を祓福てし役使を神壇が燈籠る見に問俗那支

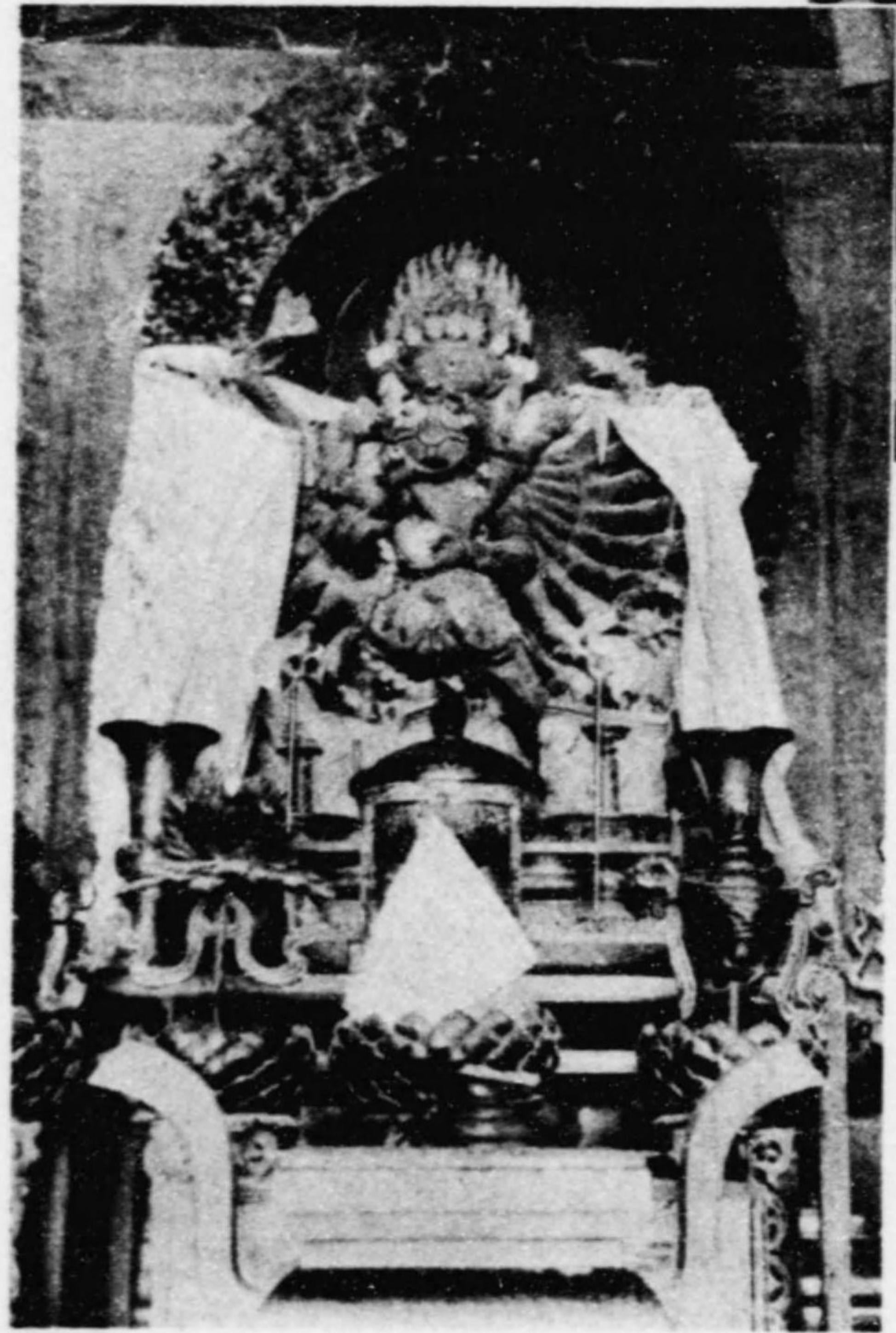




北郊外碧雲寺に雄姿を現はせる仁王威赫振り



(上)山東省濟南城外千佛山に見る仁王の武装振り



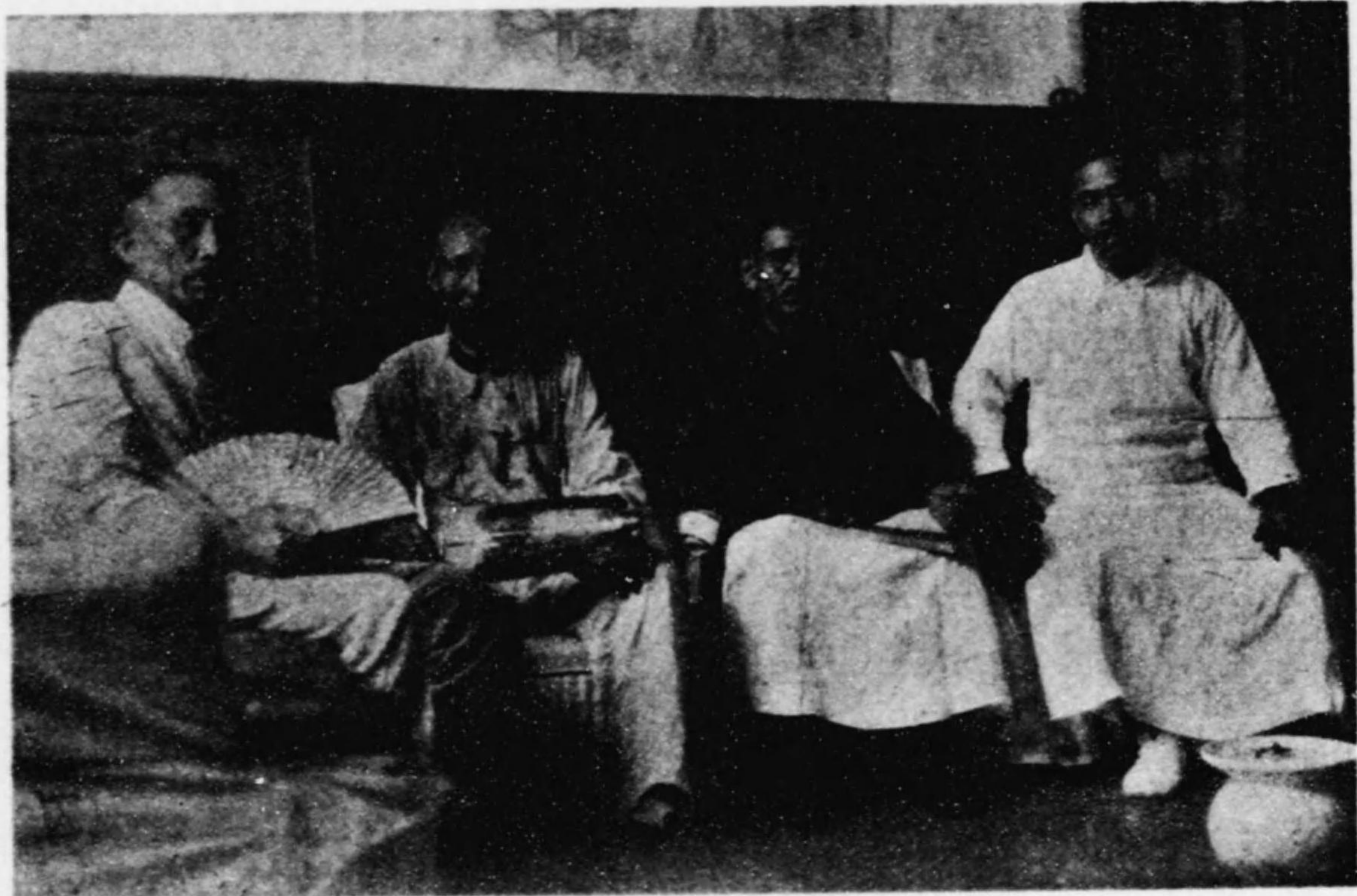
(下)北京城内拉摩寺に見る陰陽佛の本尊



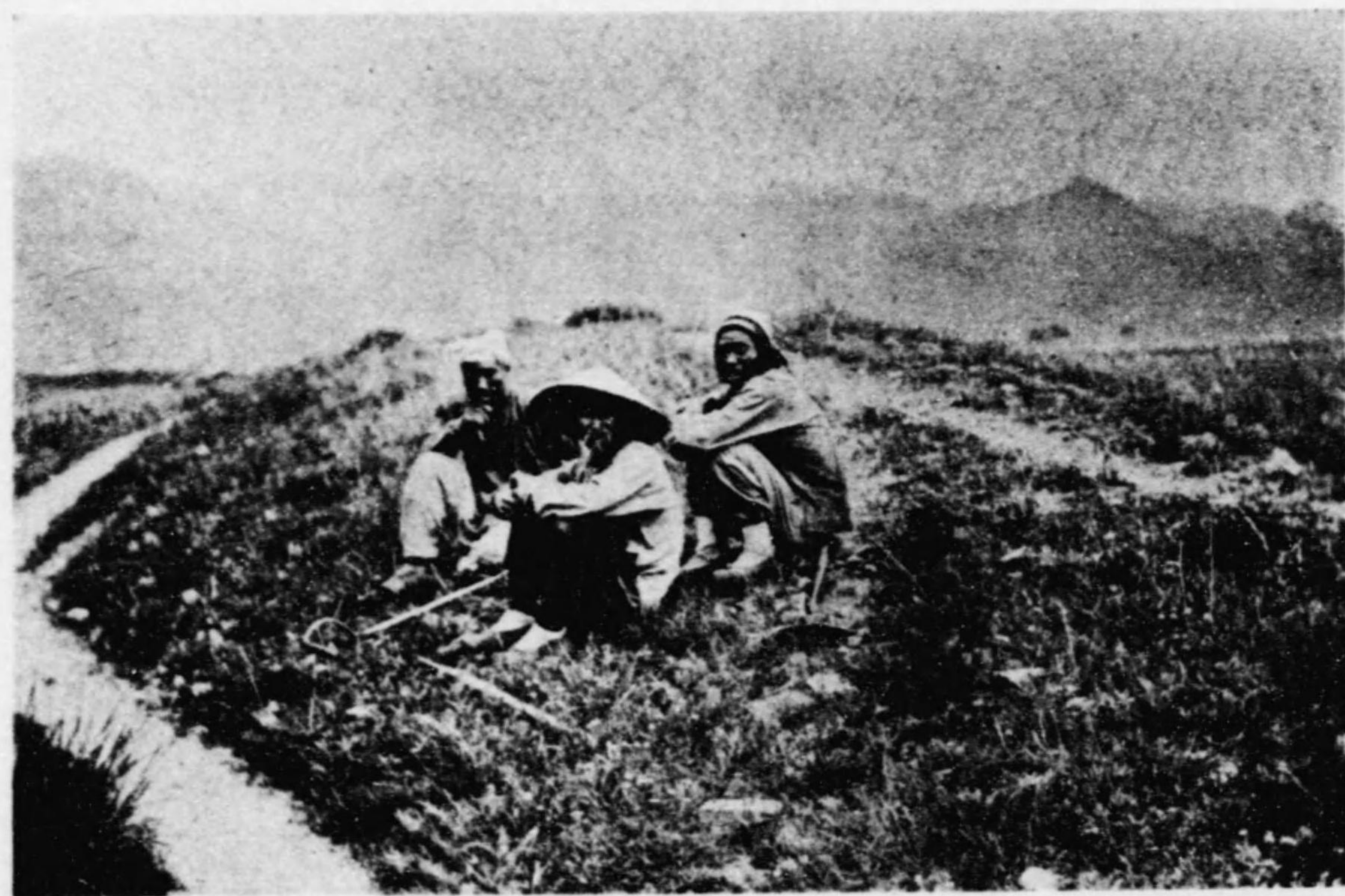
め爲る護を産財命生の人外に並人國民るけ於に地界租海上  
景光の網條鐵るたれらけ設に時戦



陸國民るせ屯に外界租海上前以るざれば拂取だ未の網條鐵  
備準動出の軍規正軍



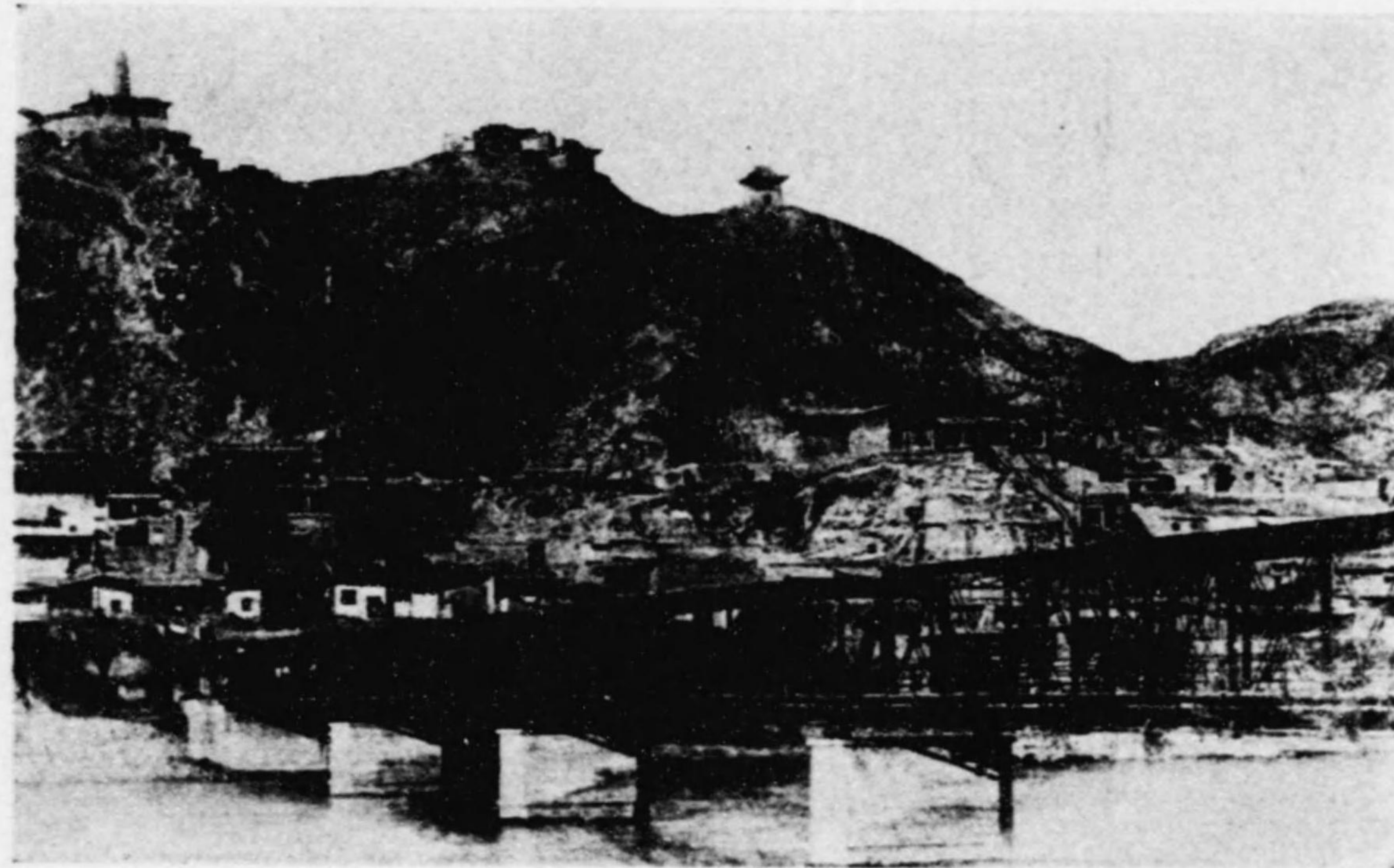
(端の右てつ向) 姿服平の者著るへ訪を部令司總内城京南



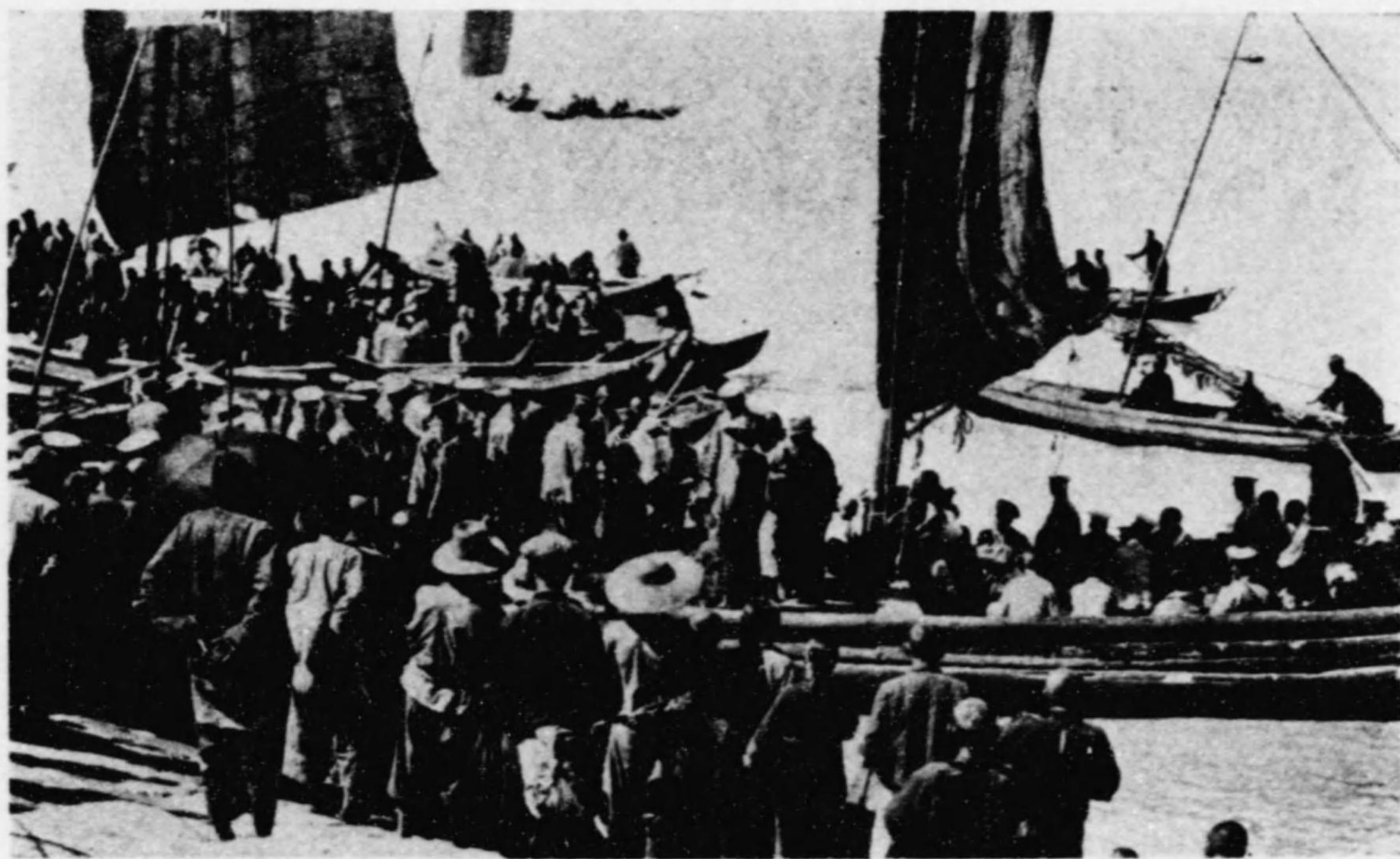
るらへ違間見と賊馬に時り振息休の夫農ぐ稼に手山外郊の那支北



郷水の流上江長るせ觀大な市全北江と門天朝慶重省川四（上）  
船國外りよ丸陽雲）姿英の船輪ふ向に縣萬てし江遡を峽三の川四（中）  
（す寫を  
景光の帆歸船民く行くなも配心等何を流下の江長き多沒出の賊海（下）

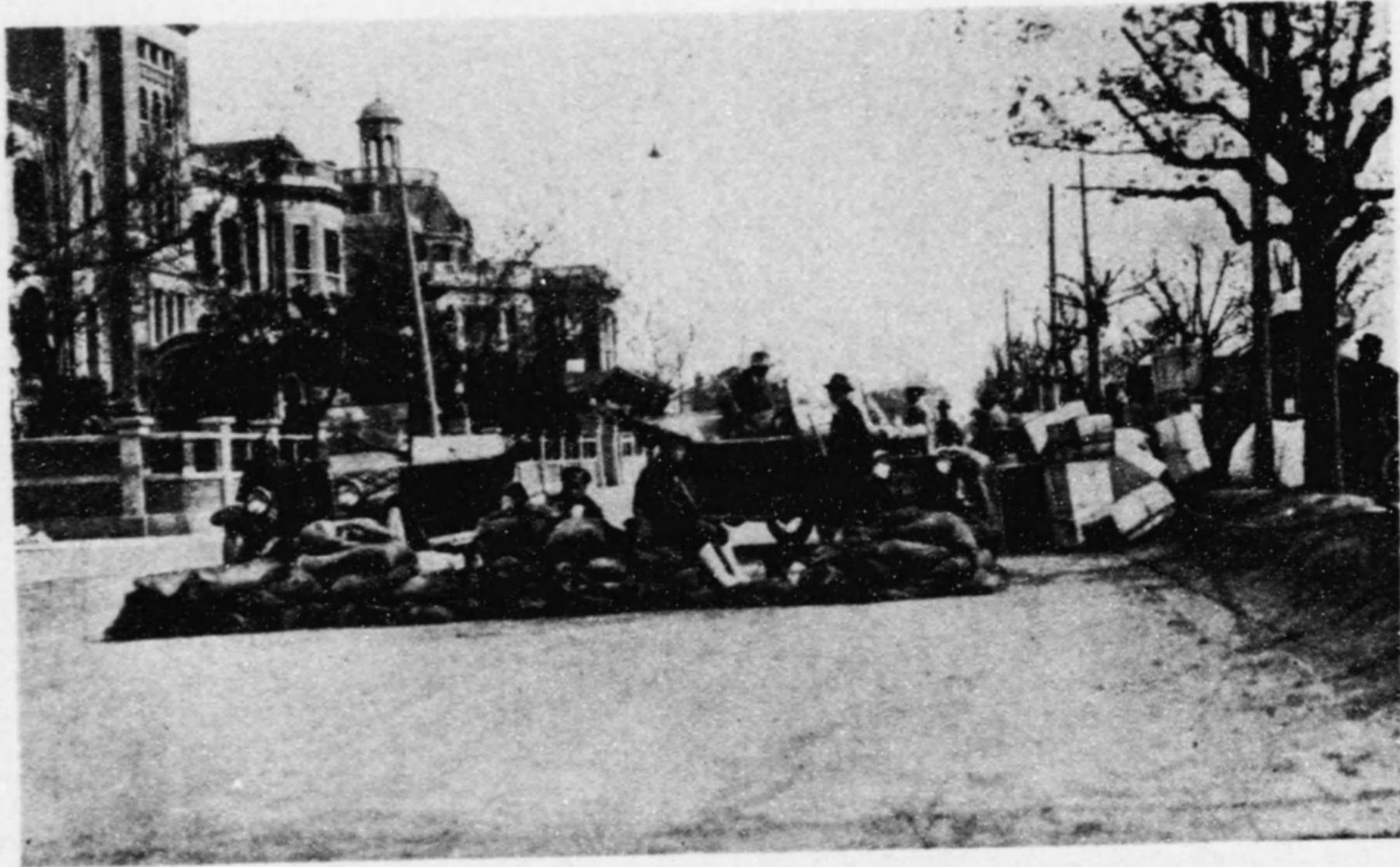


景光の宇廟上山と橋鐵の河黃る見に州蘭省肅甘地奥の那支

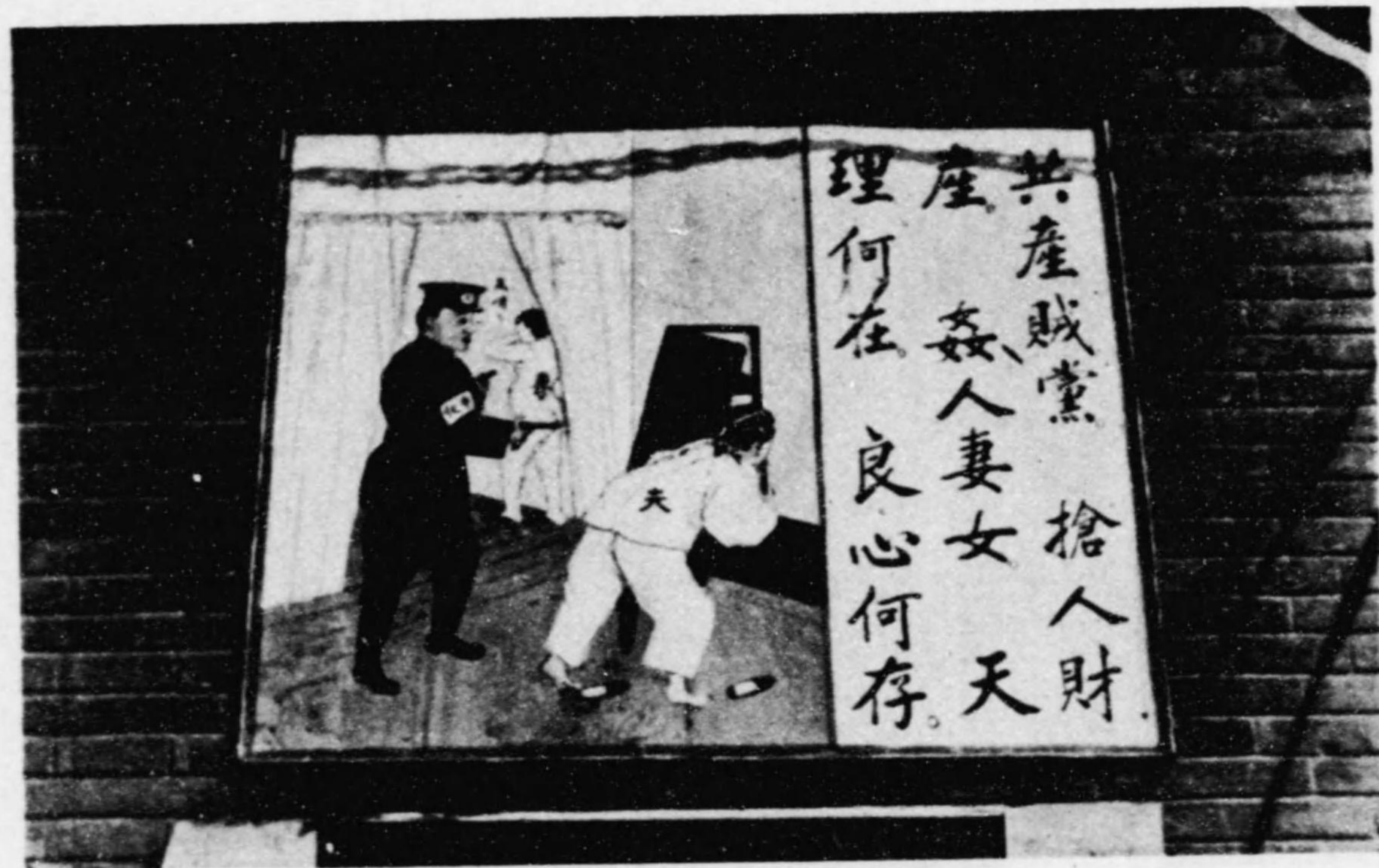


集群の岸江る送見を却退江渡の軍芳傳孫時當城入京南の軍石介蔣





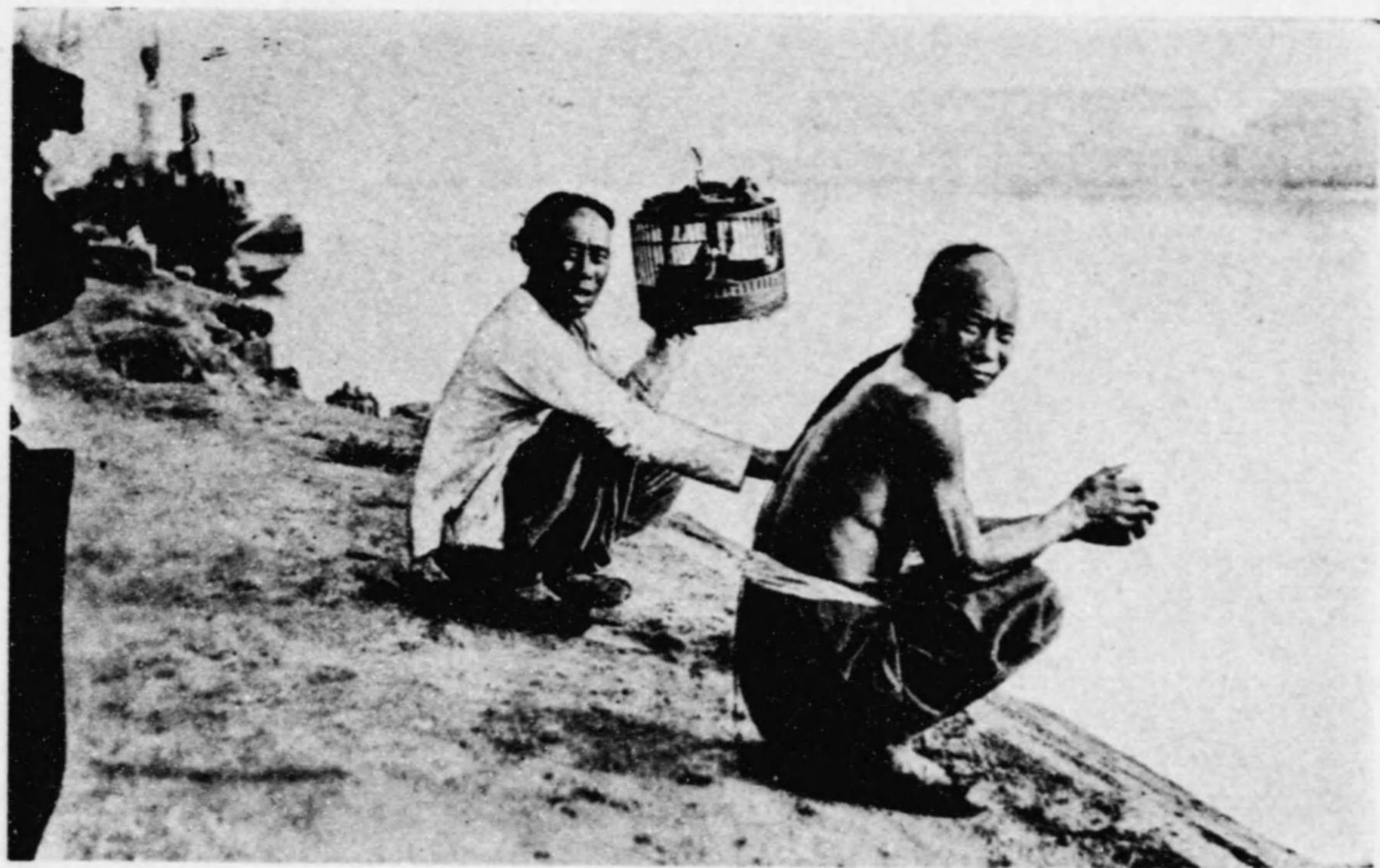
景光の民難避の時當るた見を運悲の奪掠が界租本日口漢年六十國民



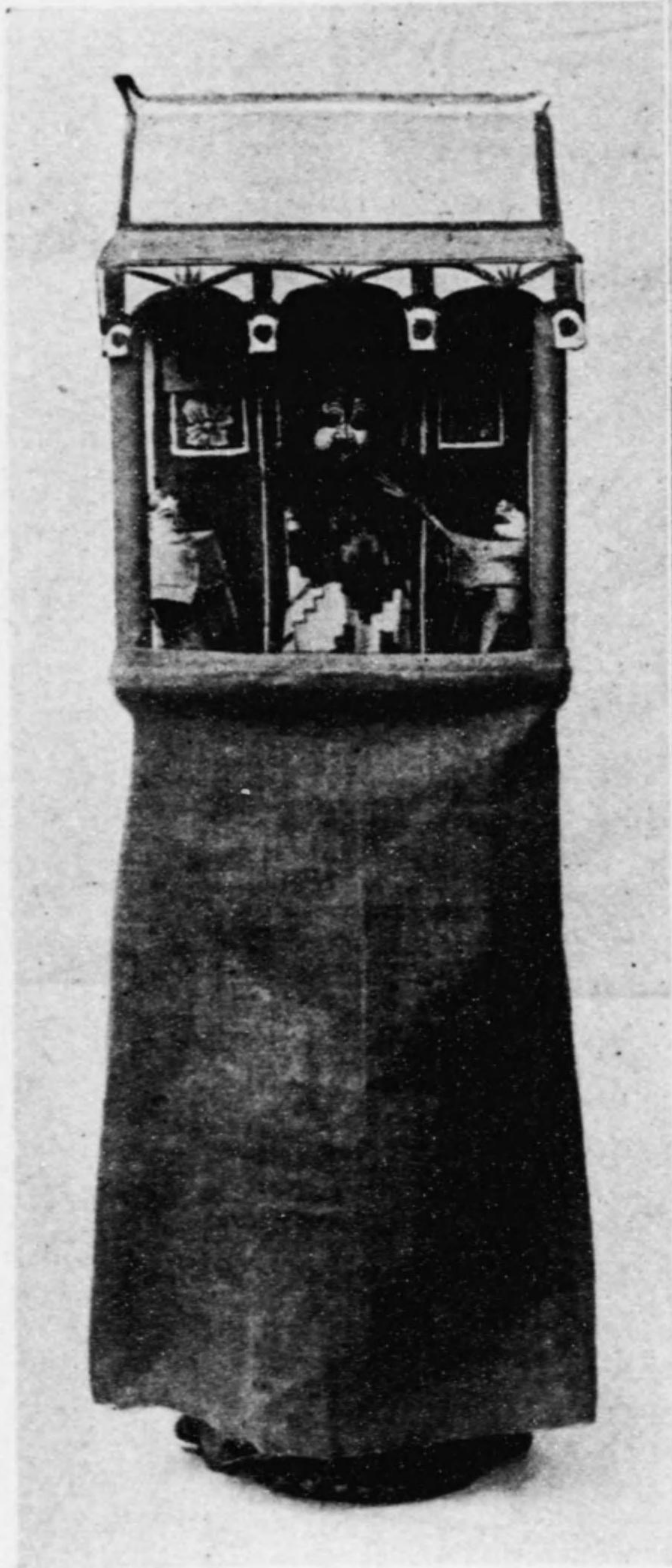
例一のラビ傳宣るれ貼に壁の町那支が憲官那支るめ惱に黨産共



江蘇省蘇州城外農村に見る灌漑用の龍骨小舎と牧童の優姿



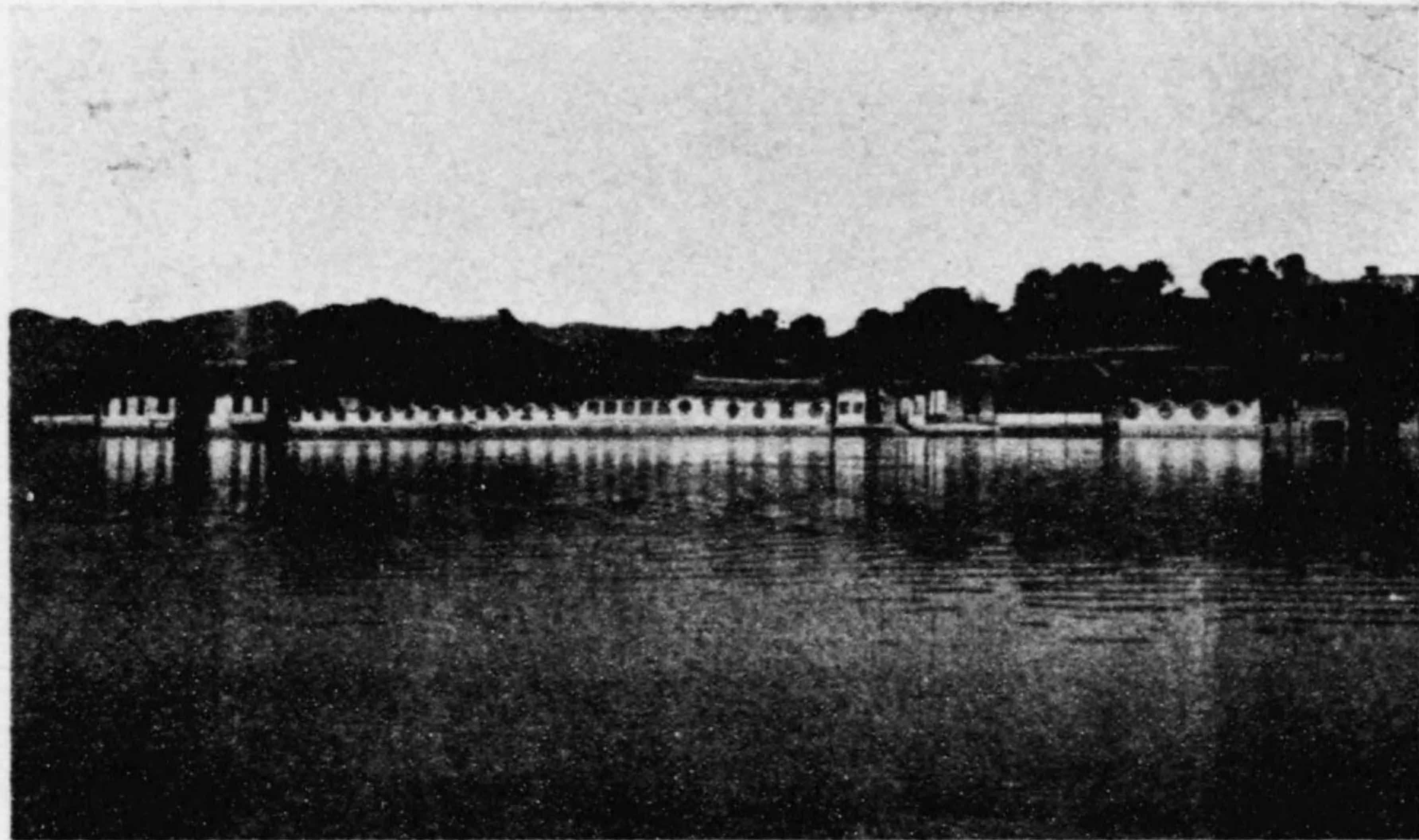
北支那白河河畔に見る苦力連の小島愛王侯の樂みを見越せるに似たり



大道傀儡の外装。内に閻魔の聲して原被兩造の裁きをなし難立つるものを匿せるもの(玩具)



チャントウアン將頭案。一名木人頭戯とも稱せらるゝ大道あやつり(傀儡)の樂屋うち(玩具)



郷水の莊別同哈ソドアハ豪富の一隨海上る見に山孤湖西州杭省江浙



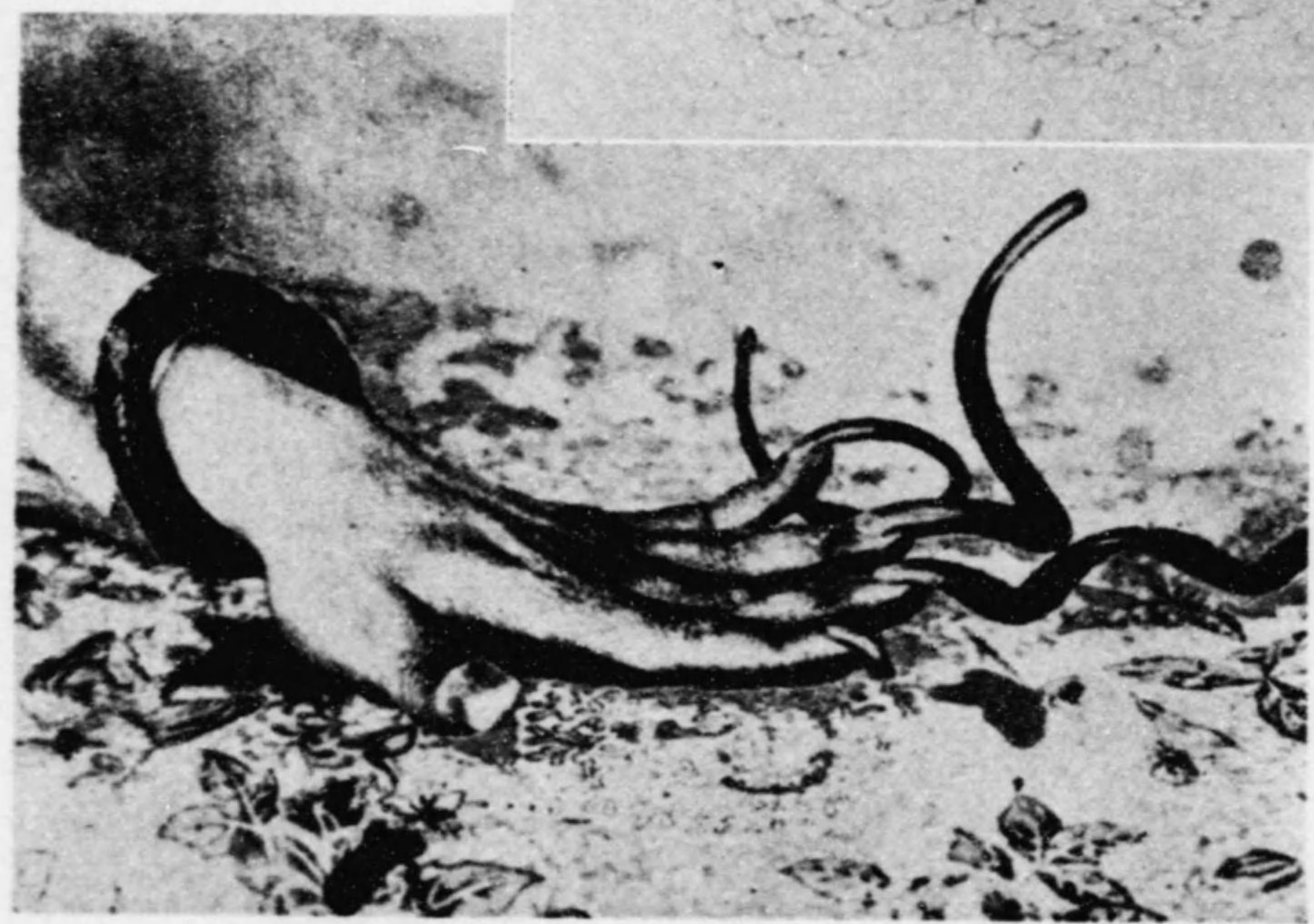
趣幽の亭園と池蓮の蔭緑園留く幸な心の士游に外城州蘇省蘇江

今は時代の逆轉と世をかこつ當年の満洲八旗の貴婦人振り。女性に反映する時代の歴史を物語れるものか



最新上海の流行界を代表するモガの清秀振り。時々演壇に立ち滔々懸河の辯を弄する女史

腰に十萬貫を纏ひ鶴に騎つて揚州に遊ぶとの富  
豪の標語を如實に物語れる吉祥の畫圖



心苦に爪長年永てとす非に人大はる執を務事く如の吏の筆刀  
手左の慢自の豪富那支しせ

## 青龍刀の序

青龍刀！青龍刀（支那晉チンルンタオ）と云へる言葉の音を聞くだけでも今日、青天白日旗翻る中華民國の青年人士には武劇の面白い幕が聯想せられるであらう。必ずしもその土匪馬賊に對する官憲の刑具として使用せられて居る場合ばかりでなく時には之が歴史博物館の考古資料として寶藏せられてゐることもあるのである。しかしその如何なる場合に持ち出さるゝにした所で青龍刀の出て來る場面と云へばいつも悲壯を極めたよくよくの場合の暗黒面に限られてゐる。見方によつては支那社會の有らゆる暗黒面と云ふものは此の青龍刀の物語によつて暗い方面の朝野の舞臺の内容を密かにすることが出來るとも云へる。されば中華民國のことはその社會の表面に現はれてゐる文化が如何に進展、發達を示してゐても必ずやその裏面に隠れ

た所の社會相を深刻に考察せんければならぬのである。さうする場合には矢張り此の青龍刀の閃めきに照らして之を見極めることが最も興味あり適切な考察法であると信ずるのである。

然かし中華民國の青年學生とか紳士淑女乃至は一般良民を以つて自負してゐる者どもは支那社會のジゴマ的ダークサイドのことは之を口にするとさへも喜ばない。青龍刀によつて物語らるゝ社會事實などと云ふものは常に士君子のあづかり知らざる方面のことであつて之が智識を有するは却つて君子の資格を穢すわけになるくらゐのものである。君子は家庭に於てもその庖厨でさへも遠ざくることを教へてゐる位であるから青龍刀の話などおくびにも出されないことになつてゐるのだらうと察する。實を云ふと著者自らもその君子たらんことを別段勉めてゐる譯ではないが従來支那文化、支那墨戲並びに支那趣味風俗と云つた比較的文事に近い方面のことをのみ専

ら研究踏査し所謂士君子の口にもしない怪賊亂臣のこととか暗黒面に隠れた青龍刀のこととか云つた蠻風めいたことには一切觸れぬことにしてゐたのである。しかし囚はれないやうにしてその常に支那に遊んでゐる間はあらゆる方面のことに興味を持ち、その間多少の見聞體驗を致したこともないではない。けれどもそれは研究だけに止め、青龍刀の影に潜んでゐる無限の残忍性の發露と云ふやうなものは勉めて紹介しないやうに手加減をしてゐたのである。著者がこれ迄本書を刊行するに至るまでに出した各種の冊子は總べて皆周知の如く文化の方面、文雅な風俗趣味と云つた春風駘蕩の情緒を紹介したもので又自分自らもその情趣のうち浸つてゐた。その爲め世の讀書子側からは常にさも自分が支那社會の呑ん氣な一方面的ことのみ執せるが如き誤解をも受けてゐた。固より幾年経つても楯の半面だけを見せてゐるのでは全體としての支那の國情なり支那人の人情なりと云ふ



ものは本當に判らずに済んでしまふ。

支那民族生活の半面には風雲暗膽悲痛慘絶秋水青龍刀を用ひるの必要をどうしても餘儀なくせしめらるゝ場面が現はれて来る。いつもその春風歡樂のみを事としてはゐられなくなる幕がきつと起つて来る。しかしかう云つた青天霹靂急轉直下の場面を背景とした深刻味のある物凄く社會相を洞察することは正直なところ自分の性分に合はないのである。又さう云つた方面の支那人の殘忍性や破壊性を微に入り細に入り考察して之を公にすることは著者の聊か躊躇する所でもあり又民國に於ける友人知己に對してもその非をあばきその短所弱點とも云ふべき民族性の内幕祕事を暴露することとはどうかと思ひ悩んでゐるところでもある。しかし本書の行きかたは悪魔なり馬賊なり海賊なりに就いてすべて總括的の筆を執る方針を立て、決して個人のことと亘つてその身上を記述することは注意して避けたのである。

若し民國の青年學生諸子にしてなぜ故我が民國のダークサイドをかくも活字にまでして公にしたかなどと詰問さるゝかたがあつたとすれば自分は率直に何時でも次のやうに答へるであらう。

「自分はどこ迄も民國の今日と過去將來に人一倍の同情を有し時には國境を超越してまでも老朋友たらんことを熱望してゐる一人である。しかし民國十七年七月には世人も知るが如く北軍の暴戾、皇陵發掘の不祥事が突發し乾隆帝に西太后その他妃嬪の東陵靈域は悉く兵隊の爲めに發かれ穢がされた。清皇陵被盜損害額は沽價二億萬元以上であると云ふことが鄭孝胥翁の名によつて公けに發表されてゐる。そしてその發掘の重寶金銀珠玉は既に米國へ流出したとか或は實はまだ張宗昌の手に在るのだとか噂されたりなどしてゐる。その犯人孫殿英軍長の蠻行の動機が何にあつたにせよ、その最も清淨の聖地としておいて差支のない皇陵の靈域に亂入し墓を掘り棺を開

き、金銀珠玉を奪ひ取つた上に皇帝、妃嬪の屍骸を赤裸のまま、棺側に遺棄するの事實を見せたのであつた。これは如何に亂世に於ける亂軍の所爲だとは申せ、この許すべからざる蠻行に對しては同じ東亞に生を享くるもの、誰れか天を仰いで浩歎せざるものがあらうぞ。思ふに民國を毒するものは民國自身の匪軍、匪行そのものであつて四億萬の良民と共に慨歎悲歌せざるを得ない事柄なのである。

しかし本書にはかうしたあまりにひどい人道上の蠻行に對しては成るべく手加減をした。そして自分の考へで差支ないと信ずる程度の處で止めた。尙寫眞なども民國當局が最近共產黨の懲治を目的にいたづらをした殘殺の場面の光景その他珍中の珍なるものが數多蒐集されてあつたのだが、すべて此れ等も本書刊行の影響と思想界の現状とに省み一切掲げぬことゝしたくあらうである。思ふに南京國民政府の基礎を鞏固に國內の怪賊亂臣を討伐し

南海海賊の剿絶を期するなど内政秩序確立の上には尙幾多の難事業のある事を察するものである。ところが由來日本朝野の士は支那と云へば單に外交上の點にのみ眼を集注し支那社會の内部各般の消息にまで及んで之を明かにすることは怠り勝ちである。自分は固よりその器ではないが平素滅多に口にも筆にもすることを避けてゐた取つて置き、材料をこゝに或る範圍内で取りまとめ支那民族生活の暗黒面の一斑を篤志の研究者に提供して見たいと考へるに至つたまでである。」

實際日本では支那と云へば動亂の支那に排日の支那と支那の相場を極めて狭く見てゐる。支那はその歡樂の方面に無限の深みを有し、社交、國交の上に測り知るべからざる底力を有してゐることはあの通りであるが、それと同じやうに又その表面に見えてゐない裏面の暗黒方面にはどれ丈の幅と深さとを有してゐるのであるか判らない。支那人自身もそこになると矢張り判

つてゐない。だが何事もすべて宛かも長江の増水期に江水の増して来るやうな調子に自然と大仕掛けに柔らかにいつとはなく目立たずに兩岸に氾濫してやつて来る。江湖の水の増しかたは實地に支那に遊んで見て來なくては實感は出ないが實に大規模のものである。今、青龍刀物語も之を書きあげて見ると此の幅と深さを無限に有する大規模の暗黒面が果して要領よく讀者に傳へられ得るか否かと疑はしくなつた。又讀者自身の有する日本人としての淡泊な性質は本當に深刻な支那社會の暗黒面を全部理解するには桁がちと小さ過ぎるやうな感じもするのである。食物の關係だけから見ても日本民族の持ち合はせてゐる桁では本當の深い處の急所要領と云ふものを掴かめないで済むのではないかと云ふ氣持ちがしてならぬ。その點では著者自身の言葉や筆の及ばないことも固よりであるが讀者自身の國民性の方もまだ、非常な距離のあることを斷言して彈らぬのである。しかしそ

の距離のあるところに日本人の日本人たる所が存してゐるのであるから強ひて之を支那式の幅と深さを有する暗黒面にまでレヴェルを持つて行くことは要らぬことかも知れぬ。けれども日本人はお隣の支那民族性を輕視せずそのあらゆる方面を知り之をよく徹底的に理解することに最善の努力を致さなくてはならぬのである。

本書はかくの如き見解の下に理屈を超越して専ら支那民族生活の内容を明かにする資料にも附したいと云ふ考へから從來と全然變つた隠れた社會の裏面相を描寫的に紹介したものである。江湖の讀書子にして若し本書によつて支那社會相の一角を瞥見せられたかたは希くば他の文化的方面から見た拙著の變つた觀方をも併せ比べられ楯の兩面から民國社會の眞相を研究せられんことを希望するのである。しかし百聞は一見に若かず、ゆつくりと實地の支那大陸に遊び親しく支那の社會相に即してその表裏に踏込み

その實感を體得してもらふこと、これが何より要領を得る第一の捷徑たることは云ふまでもないことである。

昭和三年十一月二十六日東京會館に於ける唐宋元明古名畫  
將來の民國名流の招待會より歸りて

小石川小日向臺の小廬

後藤朝太郎

しるす

# 青龍刀目次

一 惡魔……………一

一 惡魔を嘗め盡す支那の大衆……………三

二 前途遼遠な惡魔退治……………八

二 馬賊生活……………一五

三 絲林馬賊の日常生活……………一七

四 山東臨城馬賊の夜汽車襲撃……………二三

五 馬賊可愛いや……………二六

六 北滿の馬賊……………三三

七 河南土豪の建築を見る……………六

八 土豪邸内に秘せられたる穹倉石室……………四

九 馬賊の職業化……………四

一〇 馬賊の成功者……………五

一一 北滿に活躍する日本女馬賊……………五

三 土匪物語……………五

一二 土匪馬賊を利用せる官憲……………六

一三 土匪頭目を重用せる山寨の豪家……………六

一四 土匪山郷の千紫萬紅……………六

一五 四川峽中江上の夢を破る土匪の銃聲……………七

一六 四川涪州の露と消えし亡友細川船長……………七

一七 人質の苦楚を嘗め盡したる高橋一等運轉士の來訪……………七

一八 臺灣土匪の思ひ出……………九

一九 馬賊の末路……………一〇

四 支那兵と巡警……………一〇

二〇 便衣隊……………一〇

二一 支那傭兵の身許調べ……………一三

二二 悠々たる支那兵の風懷……………一七

二三 巡查は天下の飾り物……………一三

二四 泥棒市を見る……………一三

二五 顛覆せる江上の民船……………一七

二六 兵隊より馬賊へ……………一三

二七 紅 槍 會……………一八

五 掠奪秘事……………一五

二八 給料は掠奪で埋合すべし……………一五

二九 督軍の入城と市中花嫁の警戒振り……………一五

三〇 退城騒ぎに乗ずる支那兵……………一六

三一 城門の懸賞ポスターに咬らるゝ敵將の首二十萬元……………一六

三二 自僭督軍の首實檢……………一七

三三 物々しき總司令部……………一七

三四 共產黨便衣隊の奇計……………一七

三五 掠奪と重税の餘弊……………一八

六 陰謀秘話……………一八

三六 支那芝居に見る大奥の暗黒面……………一八

三七 四川重慶の夜船に見る共產黨首揚闇公の女装振り……………一九

三八 張作霖北京城門脱出の幕……………一九

三九 郭松齡寢返りの幕……………一九

四〇 支那燕席に油断のならぬ毒饅頭……………二〇

四一 首 無 し 記 者……………二〇

四二 參謀連中の計畫的叛逆……………二〇

四三 奉天列車爆破の秘事……………二〇

七 女を中心の犯罪……………二五

四四 掠奪騒ぎに乗ぜられる女の災難……………二七

四五 貞操觀念の麻痺……………二〇

四六	女 人 の 市	二二八
四七	置き去りにされる日本の女	二三六
四八	福州南臺江畔の覗き繪	二四三
四九	袁 世 凱 秘 話	二五〇
五〇	花嫁と姑の葛藤の一場面	二五五
五一	共産黨に加擔せる婦人の酷刑	二六〇

八 探 偵 夜 話

五二	柳暗花明の巷に毒酒阿片	二六九
五三	鳩 毒	二七五
五四	汕頭青年の投身	二九〇
五五	峽中阿片流し	二九五

五六	湖南葉德輝翁の死	二九一
五七	宣 傳 の 成 功	二九六
五八	狸 の 外 交	三〇一
五九	紙 幣 の 質 造	三〇六

九 犯 罪 閑 話

六〇	賣國奴呼ばはりの名案	三三三
六一	阿片獎勵の魂膽	三三五
六二	阿片密輸入の公行	三三八
六三	支那棺桶秘話	三三三
六四	巨頭亡命秘話	三三六
六五	脱税鹽船の大輸送	三四〇

六六 上海 秘密 結社……………三三  
六七 革命は大罪を構成せず……………三七

一〇 文字上に見る支那太古の處刑風俗……………三二

六八 辟の字に見る罪人……………三二  
六九 辛の字に見る處刑臺……………三三  
七〇 囚の字に見る首枷……………三三  
七一 盟の字に見る罪人の慰藉……………三三  
七二 縣の字に見る重罪犯人……………三三  
七三 獄の字に見る宣告振り……………三三  
七四 善の字に見る神羊……………三三  
七五 罰刑の兩字に見る刑刀……………三三

七六 盟の字に見る血器……………三七  
七七 劉の字に見る家業……………三五

二 今 俗 異 聞……………三五

七八 堂奥に入りたる泣き方……………三五  
七九 偽 せ 乞 食……………三八  
八〇 賭 博 三 昧……………三七  
八一 祕 事 嚴 守……………三七  
八二 手 品 の 機 智……………三五  
八三 喇嘛寺に見る鬻骸杯……………三七  
八四 六 神 丸 の 生 肝……………三七  
八五 君子は庖厨を遠ざく……………三〇



二三 閻魔鏡

- 八六 秦の始皇帝の英断を想ふ……………三八五
- 八七 黒幕の讀書人……………三八九
- 八八 復辟の夢……………三九一
- 八九 宦官の末路……………三九四
- 九〇 家付忠僕の共犯……………三九七
- 九一 廬山の驕子……………四〇〇
- 九二 恐るゝに及ばぬ内地の行脚……………四〇二
- 九三 江南鐵橋の行衛……………四〇五

一三 海賊奇談

- 九四 長江夜泊、巨星の心胸……………四一一
- 九五 瓜分せられたる長江海賊船哀話……………四一四
- 九六 海賊の出沒繁き島影……………四一六
- 九七 航海中の船客海賊團と化す……………四二〇
- 九八 航路に待構ふる廣東船……………四二二
- 九九 廣東汽船に見る鐵柵……………四二四
- 一〇〇 和冠餘談……………四二七
- 一〇一 大湖を遊戈せる海賊發動汽船……………四三〇

一四 青龍刀

- 一〇二 青龍刀の職業……………四三七
- 一〇三 青龍刀の藝術化……………四三九

時局に對する卷末の感……………四〇

- 一〇四 青龍刀を聯想する青龍橋の地名……………四二
- 一〇五 體刑の廢すべからざる支那の社會相……………四三
- 一〇六 南支海南島に見る酷刑……………四四
- 一〇七 死 刑 場 の 景 色……………四五
- 一〇八 青龍刀を鬻ぐ玩具店の賑ひ……………四六
- 一〇九 北京歴史博物館に見る大青龍刀の血痕……………四七

青龍刀卷頭口繪

- 一 原色刷第一 關羽を護る張飛と其の護身用の青龍刀
- 二 原色刷第二 支那俗間に見る鍾馗が鬼神を役して福祿を捕り押へるの圖
- 三 北京郊外碧雲寺に雄姿を現はせる仁王の威嚇振り
- 四 (上) 山東省濟南城外千佛山に見る仁王の武裝振り
- 四 (下) 北京城内喇嘛寺に見る陰陽佛の本尊
- 五 (上) 上海租界に於ける民國人並に外人の生命財産を護る爲め戰時に設けられたる鐵條網の光景
- 五 (下) 鐵條網の未だ取拂はれざる以前上海租界に屯せる民國陸軍正規軍の出動準備

- 六 (上) 南京城内總司令部を訪へる著者の正服姿
- 六 (下) 北支那の郊外山手に稼ぐ農夫の休息振り、時に馬賊と見違へらるゝことあり
- 七 (上) 四川省重慶朝天門とチャンペイ江北全市を大觀せる長江上流の水郷
- 七 (中) 四川の三峡を遡江して萬縣に向ふ輪船の英姿
- 七 (下) 海賊の出沒多き長江の下流を何等心配もなく民船歸帆の光景
- 八 (上) 支那の奥地甘肅省州に見る黄河鐵橋と山上廟宇の光景
- 八 (下) 蔣介石軍の南京入城當時孫傳芳軍の渡江退却を見送る江岸の群集
- 九 (上) 民國十六年漢口日本租界が掠奪の悲運を見たる當時の避難民の光景
- 九 (下) 共產黨に惱める支那官憲が支那町の壁に貼れる宣傳ビラの一例
- 十 (上) 江蘇省蘇州城外農村に見る灌漑用の龍骨小舎と牧童の優姿
- 十 (下) 北支那白河河畔に見る苦力連の小鳥愛。王侯の樂みを超越せるに似たり

- 十一 (上)(下) 將頭案一名木人頭戲とも稱せらるゝ大道あやつりの樂屋うちと大道僧侶の外装

十二 (上) 浙江省杭州四湖孤山に見る上海隨一の富豪ヘアドン哈同別莊の水郷

十二 (下) 江蘇省蘇州城外に遊士の心を牽く留園綠蔭の蓮池と園亭の幽趣

十三 (上) 最新上海の流行界を代表するモガの清裝振り、時々演壇に立ち滔々懸河の辯を弄する女史

十三 (下) 今は時代の逆轉と世をかこつ當年の滿洲八旗の貴婦人振り、女性に反映する時代の歴史を物語れるか

十四 (上) 腰に十萬貫を纏ひ鶴に騎つて揚州に遊ぶとの富豪の標語を如實に物語れる吉祥の畫圖

十四 (下) 刀筆の吏の如く事務を執るは大人に非ずとて永年長爪に苦心せし支那富豪の自慢の左手

## 青龍刀卷頭口繪説明

### 一 色刷第一 關羽を護る張飛と其の護身用の青龍刀

青龍刀を護身用の武器として關羽並びに劉備の身邊を警備せる張飛の圖はかれら三人して漢の天下を取ることの出來た吉祥の圖として廣く知られてゐる。中にも關羽は古來關帝として武廟の守り本尊と仰がるゝ位に總べて作戰計畫の巧妙な神様と視られ又計數招福の財神としても視られ尙民間では最も有力な又最も通俗的な神として萬家その神位を祭るに至つた。圖は國民革命發祥の地たる廣東城内にて著者が最近蒐集し來たれる俗間信仰の神像の中より特に嚴選して之を縮寫したるもの。尙張飛の手にせる青龍刀の刀身に就いては特に注意せられたい。

### 二 原色刷第二 支那俗間に見る 魎が鬼神を使役して禍祿を捕

リ押入るの圖

鍾馗が青鬼、白鬼、赤鬼等の鬼神を役せる招福の圖はこれ清初康熙乾隆時代に於ける畫伯の手に成れるもの、無落款にしてその筆者を窺かにしないのであるが、老樹の下に緋の寛衣を纏へる大の鍾馗が普通惡鬼を噛み殺すと云ふ傳統的の型を破りその寶壺より飛び散らんとする蝙蝠をば態々群鬼を役して取押へしめんと努力するの圖である。原圖鍾馗の扇面は著者が北京客中蒐集せしもの一つである。

三 北京郊外碧雲寺に雄姿を現はせる仁王の威嚇振り

北京改稱ペイピン(北平)城外の仁王の佛像は今尙孫中山先生の遺骸の安置せられたるピイユンス碧雲寺白塔の下に在る仁王の靈像にしてその相貌、近代式の特徴を表現せるところあるもその全體としての構作、細部に入りての技工に色彩美の壯麗などよく背景の建築美と相調和し將に廢頽に傾かんとする碧雲寺境内に於いて異彩を放つて居るのである。孫中山先生の靈柩が南京城外の中山陵に遷さるゝ迄は、かうした仁王たちによつて山門が嚴守せられてゐる譯である。

四(上) 山東省濟南城外千佛山に見る仁王の武裝振り

山東濟南は古の齊の故地だけありて関子騫の墓、舜の歷山の傳説地、隋大業年間の磨崖碑など古を物語る遺蹟遺物は殊に多い。圖は千佛山上に在りて一望千里の齊魯の故地を睥睨せる仁王の武裝振りであつて、その場所が馬賊の出沒常なき土地柄だけに偶然とは云へ誠にふさはしく眺めらるゝのである。しかし、かうした千佛山の佛像も實地を行つて見たものゝ目には左までその藝術美を感じしめないぐらゐる土民が之に惡戯して打ち毀しをやつてゐるのである。

四(下) 北京城内喇嘛寺に見る陰陽佛の本尊

清朝二百年宮廷特別の庇護によつて布教の盛大振りを見せてゐた喇嘛佛教は北京雍和宮に今尙評判の陰陽佛を安置し香華を奠じ、鬮機杯に酒を盛り恭しく之を祭つてゐる。近來外人客の參詣者の來たり禮拜するもの殊に多く之を見て取つた寺僧は之が幕を外し御開帳を希望せずやなど催促してその御本體の和合の極致を拜せしめようと努むるのである。今や北京に遊ぶ者此の和合佛を拜せざる者は北京を見たとは云はれない位に觀覽客の間に喧傳さるゝに至つたの

である。

五(上) 上海租界地に於ける民國人並に外人の生命財産を護る爲

め戦時に設けられたる鐵條網の光景

南方の革命軍が上海龍華方面に押寄せて來た時分は上海租界内の華商外商はすべて一様にその掠奪暴行を恐れ極度の恐怖心に驅られ共同租界と云はず佛租界と云はず嚴重な鐵條網を支那さかひに面して施したのである。城内に面した所でその二間三間の厚みの鐵條網を急造した所は少なくない。かくして暴民と兵隊の暴行掠奪に對し嚴重に備へたものであるが、今から之を考へると夢のやうな心地がするのである。

五(下) 鐵條網の未だ取拂はれざる以前、上海租界外に屯せる民

國陸軍正規軍の出動準備

支那兵と云へば外人や民國良民だちから鬼か惡魔のやうに嫌はれてゐるが、すべての兵隊が皆さう云ふ譯のものではない。中には圖に見る如く十四五歳の少年兵もゐて頗る陽氣な無邪氣

な氣分に満ちてゐるものもある。かれらは總べて傭兵で月に平時が八弗、戦時が十二弗のところであるが四川省方面に行つて見ると月二三弗から始まつてゐる。兵隊の掠奪さわぎは主に給料の不渡りから來る場合が多いが、然かし又兵隊の役得だから構ふことはないと云ふ傳統的のあたかも手傳つてゐるやうである。

六(上) 南京城内總司令部を訪へる著者の平服姿

總司令部の衙門を這入る時の氣分と云つたら近衛兵の堵列の間を行くのであるから、かなり威儀堂々と形式を整へて行くべきであるが、自分は先年四川の歸途旅装のまま、南京に孫傳芳を訪ねて見たのであつた。圖は總司令室にて向つて右の端が、著者それから岡村寧治君、孫傳芳大人、高山長幸翁。

六(下) 北支那の郊外山手に稼ぐ農夫の休息振り、時に馬賊と見

間違へらるゝことあり

北支那で高粱の熟する盛夏の頃農村に三三五五と群がる色の黒い手合ひどもは迂かりすると

百姓でないことがある。しかし心配しても際限のないことであるから自分たち田舎旅行のときは平氣で之に話しかけて見たりする。掠奪される資格のない人間と見られてゐるせいか未た一度も自分は不意打を食らつた事はない。又滅多に泥棒や馬賊がその邊に耕作してゐるとは考へられないのだから安心して田舎に這入つて然るべしである。田舎の人の人情は都會や船着き場のそれよりも美しくて可愛い情味のある百姓だちが多いのである。

七(上) 四川省重慶朝天門とチャンペイ江北全市を大觀せる長江

上流の水郷

四川省は嘉陵江と長江の本流の合したるところに向つて右が江北の町で左が重慶の町となつてゐる。上海から遡江千三百六十哩の奥地にかくも活氣を呈せる大都會が成都、打箭爐、雲南の各要路の衝に當たり繁榮振りを見せてゐるかと思ふと驚くの外はない。尙四川の土豪は多く城外の山寨に住居を定めてゐるのである。

七(中) 四川の三峡を遡江して高縣に向かふ輪船の英姿 (雲陽丸より外國船を寫す)

たまに兩岸の土匪から發砲を食らひながら三峡を上下する場合のあることは宜渝線航路の船のすべて覺悟せるところである。激流巨渦、暗礁、土匪と、その遡江の困難なることは言語に絶す。殊に浪沈事件が頻發したり、土匪、兵匪の襲撃を受けたりするは最も苦痛とする所、無電の架設の許されない商船のことゝ一層雲煙萬里狐獨の寂しさを禁じ得ないのである。吾人はかうした第一線に立てる四川在留の日本人に滿腔の同情を表したいと思ふのである。

七(下) 海賊の出沒多き長江の下流を何等心配もなく行く民船歸

帆の光景

千哩からかみの長江の上流を見て下流に下つて來るときは同じ揚子江とは思へぬぐらゐる様子が變つて來る。その江幅に於いて兩岸の地形に於いて又水勢に於いて又その去來する江上の船の形に於いて著しい違ひのあることを見るのであるが、唯變らぬものはその江水の濁流である

ことこの一點である。自分は長江を遡ること千五百餘哩、今の汽船にて達し得る終點叙州と云ふ處まで遡江して見た。峨眉の下、岷江の合流地點であるその邊の長江は之を金沙江と土民は稱してゐるが水は金泥色で益々濃厚な濁流を見せてゐるのである。

八(上) 支那の奥地甘肅省蘭州に見る黃河鐵橋と山上廟宇の光景

黃河は長江と異なり鐵橋が下流では山東の濟南に、上流ではこの甘肅にと唯二個所だけ架けられてゐる。幾千里の奥地の山郷は海岸寄りの省のそれとは趣がすべて違つてゐて河南山西以西は多くかうした涸渴したやうな潤ひの乏しい景色を見せてゐる。そして圖にも見ゆる如く山には窟に似た住まひが多く廟宇とか富豪とかは大抵かうした山の頂に近い處に位置を占めてゐるのである。尙その山相はすべて朔北氣分を以つてすべて蔽はれてゐるの感がある。

八(下) 蔣介石軍の南京入城當時孫傳芳軍の渡江退却を見送る江

岸の群衆

灰色の軍服に武装解除まではしてゐなかつたが勢の抜けた北軍は最早や南軍の破竹の勢に抗

しがたく長江を渡つて江北に向ふことになつた。しかし比較的人望をつないでゐた孫軍のことゝて江蘇土民だけは感慨無量なるものがあつたと見えて江邊に來たりその退却の光景を見送つてゐるのである。支那の兵隊はいつでも掠奪をさへ差控へ、徵發をすることをしなければ人望があるにきまつてゐるのである。

九(上) 民國十六年漢口日本租界が掠奪の懸運を見たる當時の遊

難民の光景

五月三日に起つた五三事件の當時、日本租界は土囊を築き家財を持ち出し歸國せんとするもの、からだ一つで逃れ出てたるもの、掠奪にあひて無一物となりたるもの等様々であつたが、かうした不祥事は目に一丁字なき暴民のしわざであつた。吾人は一日も早く列國が支那に對し同情ある理解を持つと共に民國自體の國民並に官憲が新興民國の建設に誠意ある努力を惜しまざらんことを希望してやまないものである。



九(下) 共産黨に惱める支那官憲が支那町の壁に貼れる宣傳ピラ  
の一例

靴を脱ぎ抜き足差し足にて他人の家に今も忍び入らうとしてゐる不逞の徒を見かけ巡査がピストルを以て狙つてゐるところを現はし、又その隣室には裸體の女性を描出してその良心に反らしむるところを示すの圖。共産黨に關する極端なるポスターも色々貼付せられてゐたが、今はすべてこゝに之を略することとした。

十(上) 江蘇省蘇州城外農村に見る灌溉用の龍骨小舎と牧童の優姿

牧童遙かに指す杏花村の句で聯想せらるゝに江南の田舎の情趣と云ふものは、蘇州城外と云はず杭州の田舎と云はず何處にでも見出さるゝのである。日本人は支那の田舎と云へばすぐ土匪の馬賊のと恐れる病氣があるが、かうした長閑な農村の情趣をよくく味つて見るときは忽ち考へが變はつて來ることゝ信ずる。お隣の支那の人情は都城よりも却つて田舎の農夫たちの間の方に在ると斷じてもよろしいのである。

十(下) 北支那白河河畔に見る苦力連の小鳥愛。王侯の樂しみを  
超越せるに似たり

日本人はやゝもすると支那の苦力と云へば一概に泥棒と相去ること遠くないやうに考へてゐるが、日本人にして一日の勞を忘れる爲め或は忙中閑ありの氣分で以つて事務所の窓に小鳥の籠でも掛けて樂しまうとするくらゐ心のゆとりのあるものが果してどれ位あるであらう。唯營々として少しのゆとりもなく齷齪してゐるものばかりではないであらうか。どうかしたら支那苦力の方が王侯貴族のゆとりのない暮らしをしてゐるものよりもどれ位よいかも知れぬのである。

十一(上)(下) 將頭案一名木人頭戲とも稱せらるゝ大道あやつり  
の樂屋うちと大道傀儡の外装(玩具)

内に閻魔の聲して原被兩造の裁きをなし唯立つる者を懸せるもの。こは路傍に女子供どもを集め巧みに一人で以つてその大將や小役人どもの聲高を使ひ分け、そして同時に舞臺面の人形

をあやつてゐるのである。一幕の芝居がはねると取り巻いてゐた見物人たちは必ず一個銅子兒か兩銅子兒位のかねを投げてやるのである。こは上海北京天津あたりの路傍によく見る催しであるが最近、自分は又塘沽の碼頭で之を目撃したのであつた。

十二(上) 浙江省杭州西湖孤山に見る上海唯一の富豪ハアンドン哈

同別荘の水郷

西湖三潭印月、湖心亭から孤山に舟游するものは必ず湖上その窓の數多き白堊の別荘と主人哈同の豪華振りとを認めないものはあるまい。こは西湖無二の水郷として清趣を咬つてゐるところではあるが革命軍の入城と共に今や兵隊の之に闖入し吾が物顔にのさばり返つてゐる様子は勿論主人を目して土豪劣紳視してゐる爲めであらう。然し湖上の勝地保存の目から見て何だかむざ／＼穢させたくないやうな氣持ちもするのである。

十二(下) 江蘇省蘇州城外に游士の心を牽く留園綠蔭の蓮池と園

亭の幽徑

姑蘇城外寒山寺に車を走らせるものは必ず車夫が先づ蘇州の車站からこの留園の綠蔭に車を入るのである。西園、寒山寺、楓橋、滄浪亭、虎邱天平山と巡游する名所舊蹟のうちその一番よく纏つてゐて手の行届いてゐるのはこの留園である。少しくこゝとこちやついてゐる感じのして南京吳愁湖あたりのやうな鏽びた滋味は出て來ないが、しかし文人墨客の半日の清游には持つて來いの名園であると云へる。

十三(上) 最新上海の流行界を代表するモガの清裝振り。時々演

壇に立ち滔々懸河の辯を弄する女史

新しい女性にして最も輕快な服裝をなしたる時の姿を示す。之に黒のスカートを穿つときは一層美的に見ゆるが、その上衣の袖口と云ひ、頸飾りと云ひ、又白の洋靴と云ひ、上海でなくては見られぬモガ振りである。この頃の清秀の姿が北京や武漢、南京方面にも傳はつて來たやうである。今日女性の服裝として唯古い型にのみ囚はれ口に衛生と經濟とを唱へながら、少しも新しきに就く英斷を有せざる日本の女流界の爲めにこゝに之を参考に示しておきたいので

ある。

十三(下) 今は時代の迷惘と世をかくつ當年の滿洲八旗の貴婦人

振り。女性に反映する時代の歴史を物語るか

今はその跡を絶ちたれどもツイ十年前頃まで北京の城内胡同の舊家の門前にはかうした滿洲貴婦人の着飾つた麗姿があらばら見えてゐたのである。見るからにあたまの重もさうな、しかし何となくなまめかしい濃艶な情緒を漾はせてゐるのである。今日その姿の全然亡びないうちに午門歴史博物館にでもその模型を保存しておきたい氣持ちがしてならぬのである。

十四(上) 腰に十萬貫を纏ひ騎つて揚州に遊ぶとの富豪の擧

語を如實に物語る吉祥の畫圖

三民主義の國家の建設のと八釜しい立派なことを口に唱へても同じく人間だもの、昔し人の標語としてゐた吉祥招福の氣持ちは之を取り去ることは出来ない。主義手段としては理窟も並べるであらう。しかし結局は歡樂生活に這入り不老長壽の生活慾に立返ると云ふが本當の

人間味のあるところであらう。戦争だの掠奪だの密輸入だのと云つて見たところで、つまりは人間はこゝに落つくべきものと信ぜらるゝのである。

十四(下) 刀筆の吏の如く事務を執るは大人に非ずとて永年 長爪  
に苦心せし支那富豪の自慢の左手

今では南京政府の要人だちでも晝夜兼行の努力で以つて國家の建設に急いでゐるが、以前の役所氣分と云つたら餘りビジネスのことには長官局長は關係してはならないくらゐに考へられてゐた。富豪にしても矢張り同じ心理であつた。その爲め用事をする必要のないことを證せんとて十年二十年と左手の爪を自然に伸ばし又棒を當て、眞直に延ばしたりしてゐた。寝る時は之を折らないやうにとて大きな手袋を被ぶせ、夜具の外に出して寝ると云ふ位に大切にしておたことである。圖は南方福建、富豪の手の寫眞であるが、聊か人に之が宣傳せらるゝことを得意となしてゐる様子である。世界で富豪の心理にして奥底の知れぬもの、支那のそれの如きところはあるまいと思ふ。今日南洋華僑に巨萬の富を積む者の多きが、その中には銀の自

一 惡 魔

動車を驅りて愛嬢を同伴せしむるものさへあるやに聞く。

## 一 惡魔を嘗め盡す支那の大衆

世界何れの國にも惡魔鬼神の居ない處はあるまいが、惡魔が天下を横行し人心を年が年中惑はし道を敗れる、お隣の支那の如きところはあるまい。然らば一體支那の惡魔の正體とはどんなものであらうか、自分の見る所を左に少しく述べて見よう。

世に惡魔と云ひ、妖魔と云ひ又惡鬼と云ふ、何れも皆つまりは同じやうなものであつて、その怪異の魔力を以つて人を惑はし魔道に陥れ、結局は社會をも毒するに至るものである。時には單に惡魔と云つても唯自らその度を過ごしその道に淫せしむる酒魔、詩魔など云ふものもあれどその魔の字のつくものには殊なものはない。而かも支那の民衆生活には古來怪賊亂臣を語るもの多く、孔子が二千餘年の昔既に之を戒しめてはゐるが毫もその甲斐なく、滔々たる世俗は市虎三傳の譬に漏れず、大衆の無智識と人心の不安とからして、とかく益々よからぬ流言蜚語のみの廣がり行く傾のあ

るは事實である。中にはさうした不安や悩みから脱却して明るみに出でようと悪魔を戸外に追拂ふことに懸命になり、萬家悉く之が禁厭呪咀、加持祈禱、に熱狂せるものも珍らしくない。

江南地方の民家では門戸に、

一、姜太公在此、百無禁忌

(村民姜太公は太公望なりと云ひ傳ふ)

二、北斗(北斗七星の圖章を描く)

三、勅令□□□□、又雷□□魔□□

四、呪紙文

五、呪筆文

六、呪墨文(以下略之)

などと所謂魔除けを黄紙や紅紙に手書して之を掲げ以つてほんの氣休めだけの事をなしてゐるのを見る。この事は「増補秘傳、萬法歸宗」を始め支那流布本にも色々見えてゐる故こゝには省いて

おく。

もともと支那はその民族生活の實際に觸れてその水村山郭を遍歴して見ると、到るところ實にその愚や及ぶべからざる低級な宣傳のよく利いてゐるのを見る。わけても不安を唆る悪宣傳は電光石火の勢で傳播して行く。其あること、ないことすべて之を尤もらしく説き立つるならば、民衆運動として効を奏するは請合ひである。さうした民衆向きの宣傳をポスターに作つたり無知の大衆を惑はす言動を出したりすることが必ずしも悪魔と云ふのでもないが、しかしそれがかなり魔力のある手段となるのである。

南京の國民政府は蔣介石の名に於いて學生がそのあまりに分を忘れて政治的社會運動に夢中になつてゐたのを本年から嚴禁はしてゐるやうである。併し事實、一學生、二農民、三労働者と三者の民衆運動はかなり強くそのうちでも學生のが最も根強い底力を有してゐる。たしかに民國の國民革命軍を今日のところまで進展せしめた偉勳中にも學生の功績は矢張り特筆せなければならぬのである。しかし世相と云ふものは面白いもので尙その偉い學生のうは手を行く妖魔なるものが又別に

どつさりゐる。所謂百鬼の老女と云はるゝ魔媼の手合ひやどことなく艶つばい妖精なるものなどが隨所に澤山ゐるのである。しかし支那には日本に云ふやうな幽霊そつくりのものはない。例の行燈からどろんと脚のない姿で現はれて出て来たり又月夜に柳絮の影から双手を垂らし蒼ざめた顔して薄氣味わるく出て来たりと云ふやうなのは全く見ない。支那の幽霊(妖精)は毎夜湖濱に寄居する男の小廬へ通つて愉快な佳話を交はすとか、或はその死後棺柩に納めらるゝ迄は美妖の姿をなせるにいざ出棺と云ふ刹那、棺は不思議に軽くなり内部は精氣のみとなり唯その簪の一本を俤に残し遺骸は見えなくなると云つたやうな剪燈新話に見る流儀の陽氣な化神が多いやうである。従つて日本流の冷めたい氣味の悪いたちのものは支那の説話中には見出さないのである。

總體、支那の怪女神には誘惑性のものが多くどちらかと云ふと、艶つばい方であつて所謂妖魔そのものを描出せるものが多いのである。青年に限らず一般民衆はこの妖魔に警戒する丈の用心が必要である事は云ふまでもないことである。ところが支那人はかうした妖魔に警戒したり之を拒んだりするどころか寧ろ進んで琴瑟相和する所までも行つてゐる。日本の幽霊の如く之を薄氣味悪く感

じたり物凄く恐ろしく見ると云ふやうな氣持ちは更にないのである。

流言蜚語に至つては一種摺む事の出来ぬフウワリした悪魔の如きものである。固よりこれは物凄しい氣分を伴ひ又大いに警戒すべきたねを數限りなく含んでゐることもある故、心配すれば際限のないことでもある。ところがその割りに大衆全體は之を怖がつてはゐないのである。むしろ之をいかに利用すべきか如何に我れ自らが之に應じて行くべきかを呑氣に考へてゐる位である。日本の震災當時の鮮人騒ぎ見たやうな沒常識な態度をとるものとは雲壤の差がある。勿論その暗黒面を物語れる流言蜚語のことゝ一應之が對策を講ずる事は講ずる。けれども大體の處は之を大きく包容し理解し又利用し消化し遂には之と融和し合ふと云ふ處までも行く。かくの如く百鬼夜行の暗黒面に對し之を恐れず優に之を取り容れんとするゆとりを有してゐる。ここが清濁ばかりでなく濁濁併せ呑む支那社會の大きい所である。

法理論や理屈を云はないで支那の大衆と云ふものがすべて包容主義で行き、大海は細流を擇ばず式でどこ迄も行く。そのつかみどころのない流言蜚語の世界は正にこれ絶大の惡魔見たやうなもの

であると見らるゝがそれに對してかれらが能く之を嘗めつくし之を消化するところに支那社會の偉大性があり、大陸的なところがあると云へる。所謂文明國だの、文化國だのと云つたところでは一滴の水も漏らさぬやうにと唯窮屈にのみ行きたがる傾があり、さう云つた氣分に囚はれてゐる。そして遂にその囚はれ負けがして了つて却つて惡魔の爲めに亡ぼされる恐れもあるのである。ところが始めから惡魔と妥協し惡魔を味方に入れてゐるものはこれより強いところはないのである。支那は社會が社會だけに惡魔であらうが何であらうがすべて之を呑んで自分の身に取り入れてしまふと云ふ大きな所を保持してゐる。従つて極端に云へば支那全體が一團の大きな惡魔そのものゝ實體ともなり兼ねまじき様子を呈しないでもない。而かもその惡魔の正體が何であるかは永久に突き止めさせないやうな魔術を心得てゐるやうにも見えるのである。

## 二 前途遼遠な惡魔退治

支那の國士全體をつかまへて今日之を魔の國なりなどと斷ずるは甚だ穩かでないかも知れぬ。謎

の國と云ふ程度でおくならまだしも惡魔の國などとは失禮な言葉であると中央執行委員や政府關係の諸君から抗議があるかも知れぬ。民族民權民生の三民主義を叫べる青天白日旗の下には百鬼惡魔は居らせない。若しゐれば之を退治してしまはなくてはならぬと意氣込んでゐるであらう。しかしその意味から云ふと馬賊なり土匪なり海賊なりはすべて皆これ魔ならざるはなしであるから、先づ之が根絶に所請青龍刀の切れ味を見せなくてはならぬのである。土匪、兵匪、學匪、その他の陰謀團、共產黨系などはすべて之を絶滅せんことを期しなくてはなるまいと思ふ。

青龍刀に對する支那の民族的聯想は決してこれまで快感を呼び起してゐるものではなく、むしろ沈痛悲壯な一種の凄味を感じしめてゐるものである。今日銃殺でやらるゝものも相當にあるが、尙青龍刀の露と消え果てる犯人は南北各地に夥しくあるのである。青龍刀に關する千百の聯想は優に支那全體の社會の反面を物語りその暗黒面を叙述する唯一の關鍵ともなつてゐるのである。されば青龍刀はつまり支那のジゴマ的舞臺の表裏を明かにする上に最も有力なものとなるのである。ところが又た面白いことに支那人の無智の徒にしたつてその有罪なると否とに拘らず愈々その死の宣



告を與へられたる最後の日、斷頭臺上にて自分の首を落とす青龍刀そのものに對してきつと恐れを抱いてでもゐるか云ふと、これは又案外にもさながら平氣の平左でゐるやうである。別に當人に聞いて見たわけでもないが、従容として死に就くと云つた覺悟でゐる以上今更落膽もせず青龍刀に對して物凄氣持ちもしてゐないのだと云つた様な顔付をしてゐるのを目撃するのである。

當局者の方では勿論惡惡の見せしめにやつてゐることはあつても見物人は之を芝居氣分で見てもゐる場合が多く、殺ろさるゝ當人でさへもメイフアーツ没法子で仕方がないと悟り切つてゐる。罪なくして人ま違ひでやらるゝものであつてもメイフアーツをきめ込んでゐる。昔しから云ふ通り全く死を見ること鴻毛よりも輕しである。臨死の心理状態がそこまで行けるとは悟道に入つた哲人か大禪師でなくてはできぬわさかと思はるゝが支那人中にはさうした悟道の域に達した禪師、哲人の多きに少々感心させられるのである。

ところで支那の良民だちの氣持ちからすれば平生かれらの生業を營んでゐる時に當たりかれらの最も忌み嫌へるものと云へば匪賊の害に姦吏の苛斂誅求の二者である。これが何よりの降魔であ

ると目されてゐるのである。世人はやゝもすると土匪馬賊海賊のみを以つて惡魔視してゐるかも知れぬが姦吏の非道なるはそれ以上のものがある。更に兵匪に至つては言語に絶するものがある。兵匪の襲來に就いての豫告、或は流言蜚語が惡魔視せらるゝは上にも述べた通り當然のことである。然るに兵匪馬賊そのものに對しても時には之と款を通じておかなくては役人が政治をうまくやつて行けぬことがあり又良民の方でも平素、馬賊と自分だちとの間にゐるブローカーのやうなものを手なづけうまく巧みに取り込んでおかなくては生命と財産の安固を計り得ないことがあるのである。して見ると世の中は青龍刀を振りあげる計りが能でなく之を用ひずして濟めばそれに越したことはないのである。

又人は支那の内地をあたまたごなしに評して云ふに、内地に踏み込めば土匪馬賊が到る處に横行してゐて、たとへ良民の村の如く見えてゐても外人をさへ見ればそれがすぐ土匪化するに非ずや云々と云ふのである。けれどもこはあまりに良民に同情のない見方である。支那の人民に對してかくまで理解がなさ過ぎて困る。實は近年良民の資産家は苛斂誅求に辛棒が出來ずして上海なり大連な

りに逃げ走りあとに残れるものは貧民が多い。これらがやゝもするとやるかも知れぬがそれにして  
も大體土匪村、馬賊村と云ふものはきまつてゐる。支那内地を指してどこを歩いても百鬼夜行のや  
うなところであると斷ずるは兎も角もよろしくないのである。

尙俗間低級の細民どもの間では悪魔、悪鬼などと云へば亡者の靈魂の祟り死靈の祟りを指して云  
へるものとなせるもあり、又佛家の間ではすべて佛道を亂し人心を誘惑するの邪心を指してかく云  
つてゐると見てゐるものもあるが、事實すべての民衆氣分からするとかれらの生命財産を狙つてゐ  
るものはすべて皆これ悪魔と云つてもよいと云ふ位に暗く考へてゐるのである。けれどもこれは  
昨今やゝ明るく考へられるやうになつたと云はれてゐる。しかし國民政府の、政府當局のと云つて  
はゐるがまだまだ各省各地の警察權が確立したわけでもなく、馬賊討伐の名で出かけて行つた官憲  
ですらもその自分で運んで行つた銃器彈藥を馬賊に賣り飛ばし申譯的に數發を村で射撃し罪なき百  
姓の首を撈ぎ取つて來つては元兇の首でもかち得たなどよい加減の嘘八百を並べ自分の腹を肥やし  
てゐるやうな手合ひがゐるもそれで結構事が済むと云つた實況であることを知つてゐる吾人には警

察權云々など云ふことはとても前途遠遠なるかの感じがしてならぬのである。

自分たちは今日の青年學生や國民政府あたりのものにも海上陸上の悪魔たる匪賊のことや各地に  
行はるゝ陰謀のたねの除かれ得る見込があるならば、一日も早く除いてもらひたいとの望みを述べ  
たいのであるが、しかしこれは急いでも仕方のない話である。要は大勢の上から時機の熟して來る  
のを待つの外ない。それまでは政府當局がいかに騒いだつて又努力されたつて大衆の向上とその實  
力の改善せらるゝ處まで來なければ物にはならぬのである。況んやまとまりのむづかしい國民黨の  
黨部や政府部内の現狀並に各省各地の情勢を多少見てゐる自分共には唯之をゆつくり考へてゐると  
云ふの外に仕方なく別に之を悲觀も樂觀もしてゐないわけである。

つまり支那のことはすべて大勢で移り行くの外ないわけでその海賊や馬賊、共産、陰謀、暗殺と  
云つた局部的の魔の現象のみが除かれたとしても全體が民衆の力、大衆の自覺によつてよくなつて  
來る見込の立たない以上どうともならぬのである。たゞその間よくもあまして連年の魔障に耐へ忍  
び支那の農民どもが不平も訴へず無限の曠野に出で、四時耕穡のことに従つてゐらるゝものである

かと思心せらるゝばかりであるのである。

尙支那俗間民家の建築に東北に當たる方角を鬼門として喜ばざる習慣のあるは、元來中原に於いて古來滿家の北狄外民族の襲撃を受けてゐた史實が基となつて、遂に之を一般化したものと解せらるべく、以つていかに民衆にとつて塞外北方族がひどく怖がられてゐたかは、かの萬里長城の一大防禦工事と共に大いに特筆すべきものであると信するのである。

## 二 馬賊生活

### 三 綠林馬賊の日常生活

支那では俗語で紅鬃子と云へば馬賊即ち綠林のことを意味し、支那名物の一つとして誰れしも薄氣味悪く考へてゐるものである。その南北滿洲から山東直隸河南の邊りを股に掛け、北支那の大部分を横行濶歩し目醒ましく活躍してゐることは周知のことである。南支那には又馬賊に相當する匪公即ち土匪と呼ばれてゐるものがあつて、これがその良民に朝夕強度の危険を感じしめてゐる。それ故馬賊と云ひ、土匪と云ふも唯言葉の上の區別に過ぎず、殆んど支那全土に亘つてこれが擴がつてゐるものと見ておいて差支ないのである。

本來馬賊は悪徒、遊民などと選ぶところなくその平素の行動よりして日本人は滿洲に馬賊と云へば附き物と見て聯想が甚だ香ばしくなく、常にその脅威を感じてゐるのである。滿洲の馬賊と云へば不斷集團を作り公々然と富豪の住宅に侵入したり、又街路に行人を擁したりして金品の掠奪を恣

にしてゐるのであるが、しかしかうした泥棒を働くことを副業にしてゐて本業は百姓を働いてゐるものがある。これはやさしい方の種類の馬賊である。次には更に滿洲の奥地に進んで行つて見るとどうかと云ふと随分恐ろしいものがある。かれらは大々的に全村擧つて本業として馬賊を稼ぎ、其の勢猖獗を極め、その餌じきとなつてゐる良民は常に休まる時がないのである。でもまだかう云つた馬賊は罪の軽い方の部類であつて、あの滿洲の廣い天地には更に其の規模の大きくて、七、八十名から數百名に達する團體を組織し馬上で山野を跋渉し、銃器を携へ横行濶歩してゐるものがあるのである。これが本當の意味の馬賊であつて、世の中に恐ろしいと云ふものはないのであるから始末が悪るい。その官憲であらうが兵隊であらうが眼中にないのである。

馬賊は日常の生活振りをいかにしてやつてゐるか云ふと彼れ等馬賊は綠林に根據を置き、又山寨に住宅を構へそしてその仕事を稼ぐには毎年春の終りから初夏にかけて、數人乃至二、三十人の集團を作り、之に頭目を立てるのを手始めとして、行き當りばつたり野に山に行人を襲ひ、或は土豪を狙ひ撃ちする。さうして農家から馬や銃器を奪ひ取り、活動の準備にかゝるのである。準備が略

ば出来れば今度は集團の協議を開く。そしてかれら相互間の合同が成立する。其のうち見渡す限り野に高粱が人馬の姿を隠す位に高く成長して來る時候になる。すると馬賊を稼ぐに最も都合な背景を得るわけであるから此處でそろ／＼大仕掛な仕事に取り掛かるのである。

彼れ等は先づ斥候を放つて四方に潛行させ、民家の實況を調査せしめ、金品の有無、其の額、警戒の程度などと種々な點を詳細に亘つて調べさせるのである。若しそこで成算が立てば愈々襲撃の準備に取り掛かるのである。固より其の目的物は官廳であらうと、土豪であらうと眼中にない。片田舎の官衙や稅務局等は最も其の襲撃の目標になる場合が多く、官金其の他の物品は掠奪され、知事を始め局長役人共一人残らず殺害されるなど珍しくないものである。若し其の土豪の金品を強要せられおとなしく應ずればよし、萬一にも隠して白ばくれるとか、拒絶するとか、或は其の額が思つた程出さないと云つた時には、家の子弟等を慘殺し主人をきめつけて威嚇する。或は、時には主人や老人子供等を人質として擄つ攫へて行く。さうして向ふ何日間どこそこへと一定の期日と場所を申渡し、大抵金の五萬ドル、十萬ドルのと大きい額を吹つ掛けて來るばかりでなく、秘藏せるビ

ストル、銃器を出せると来る。それを出せば人質と交換してやるなどと物凄く出るのである。罪なき良民はかゝる宣告を浴びせかけらる時は、死の宣告以上に怯えてしまふのである。

時には又土豪の主人が行列を作つて田舎を行つてゐる所でも見付けると馬賊は畑の中から斥候を放ち、其の主人の乗つてゐる馬車や轎子を襲ひ之を拉致し去り、緑林に連れ込み峻厳な取扱をなすのである。若し従者が来たつて主人の爲めに哀を求むれば、例の物凄いの宣告で威かすのである。良民ども其の要求に對して、唯命是れ從ふの態度をとり要求通り金品調達云ふがまゝにしておくのであるが、若しその金額が少ないやうな場合には子供や主人の指を一本宛切つて行つて更に残額を要求するなど辛辣を極めるのである。もし期日に合はさないとか、要求を聞流しにして沙汰をしなかつたとか、或は又官憲の處へ密告したとか云ふやうな場合、畢り多少でも馬賊の意に逆つた行動に出た場合には人質は無條件に慘殺される外尙ほ必ずそのうちは襲撃を受け一家鬻殺の不幸を見なくてはならないことになるのである。それ故若し斯くの如き不幸な目に遭遇した場合には、早速使者を馬賊團に派し、其の金額を多少でも値切つて、安く済ませてもらふ様な工風をするのである。

る。

南方の土匪は高粱島で之を稼ぐと云ふよりも、普通山寨又は河邊の緑林に平素耕農の事を本職にしてゐながら、時期を狙ひ、折を見て行きなり大々的の匪業を始めるのである。揚子江上流地方では江邊の竹林又は柳の蔭などに之を見出すのである。

會つて四川旅行の際江岸羊吐溪の土匪村を過ぎ行くときのことであつた。頭目の住まひの前を通つたことがあるが、邊りの觀音堂には窓近く數人の土匪の集まつてゐるのを見た。そこら邊りの島で百姓をしてゐる者と一緒にあるのである。竹林の側には三三、五五と子供なども戯れ遊んでゐるのである。頭目の住宅は東京大學の赤門に見る唐門式の建築で堂々たるものであつたが、何だかそばを通りながら物恐ろしく思はれたのである。雨天の時は南方の匪賊は仕事を休む習慣になつてゐると噂されてゐるが、自分の通つた日は丁度小雨の降つてゐる日であつた爲め、幸ひにも虎口を免れることが出来たのであつた。天氣になれば早速土匪村の百姓達ども仕事に取掛かり、行人の影だに見れば或は樹上に登り或は緑蔭の間にかくれて旗を振り合圖をしあつて之が狙撃の用意をするの

であると聞いてゐる。何れにしても薄気味の悪いことは夥しいのである。しかし支那の田舎は萬事運を天にまかして旅行するのである。心配してゐては際限のないものである。存外呑ん氣な氣分であればこれ亦案外何事もなくして済むのである。

#### 四 山東臨城馬賊の夜汽車襲撃

北支那の馬賊村の中で古來最も評判の高い所は略々きまつてゐる。丁度山東、直隸、江蘇三省の交叉してゐる所あたりがその巢窟となつてゐてその邊の馬賊は天然の形勝の地を利用し若し官憲から追撃でも食らふ恐れのある場合は巧みに遁げを張り、山東からやられれば直隸省の省さかひに逃げかくれ、或は若し直隸からやられるときには江蘇の省さかひに這入つて姿を隠し、安徽省から附狙はるれば、山東の山寨か、又は直隸の綠林に隠れると云つた風にその時の形勢次第でどちらへでも跡をくらすと云ふやうに融通の利く好都合の地點に根城を有してゐるのである。

ひとりかうした三省の交叉點許りでなく、山東の南部で鐵道沿線から遠からざる山手、或は又海

州を中心とした海岸寄りの地方などにも、馬賊の巢窟として有名な所が澤山ある。これら山東の馬賊のうちで世界的に知られてゐるのは例の臨城縣の馬賊である。臨城と云へば山東の南部に位し、津浦鐵道が其の縣を南北に貫いてゐるので便利のよい所である。

民國十二年の五月五日端午の節句の夜半二時頃の出來事である。上海を出て北京に向かつた津浦線の乗客は江を渡り、浦口驛から北上、何と云ふこともなく平常の通りの氣持で列車内に納まつてゐたのである。所が列車が徐州を過ぎいよいよ山東臨城驛に着かうとする少し前、兼ねて馬賊の頭目と其の急行列車の運轉手共との間に立派な計畫的の連絡が取れてゐたものと見えて、五日の夜、豫定通り馬賊團は來たつて之を襲撃し始めたのである。固より列車の主腦部の方とは了解が出來てゐたので適當の地點に來ると畑の中へ汽車を脱線させたのである。幸ひ此の列車には日本人は一人も乗合はせず、アメリカの有名な貴顯紳士達と共に某大官の夫人令嬢達が數名乗合せて居つたのであつた。これ等の乗客は列車の臨城々外に脱線し停頓するや宛かも待つてゐたとばかり夜陰に乘じ非常な發砲を受け恐ろしい襲撃を喰らつた次第である。

鬼の如き馬賊どもは列車を留めるなりいきなりドアを破つて突入し或は窓硝子を破壊して部屋に蹣入して来た。さうして荷物と云ふ荷物は手あたり次第全部掠め去る。續いて侵入して来る百鬼は限なく寢臺車室内の手廻はりを荒しめかすめるのである。寢臺のベットには細かい寶石類や手廻りの物、又壁にはボンネットなどの掛かつてゐるのは見えるが貴婦人連の姿は一向に見えないのである。見えない筈である。或は化粧室に身を潜め、或はベッドの下の窮屈な空間に鼠のやうに身を縮かめて、殆んど生きた氣持ちはなく正氣を失つたまゝ這入つてゐるのである。そして刻々迫つて来る危険に唯々ふるえてゐるのである。馬賊は床上に落ちてゐるきらびやかな寶石が電氣の光りに光つてゐるのに視線を注ぎ、鬼の如き手で以つて之を掻き攫へてゐる。そしてあたりを探り乍らどう思つたか外へ出て行つた。婦人連はやれこれで生き返つたと安心をしてゐると、運の拙いときは仕方のないものでやがて次にドヤドヤと這入つて来た馬賊はベットの下方から貴婦人の靴の影を見付けたのである。そして柔らかな婦人連の脚は悪魔の手に握られ物凄くも引摺り出されたのである。斯くして一等乗客の紳士淑女たちは燈火一つ見えない薄氣味の悪い山東馬賊村の夜路を引摺り廻はさ

れ全然拉致された形で極度の不安に襲はれつゝ遠く山寨指して連れ行かれたのである。

明けて六日の朝になつて見ると彼等白人共は、人質の身となつて百鬼の悪魔殿に連れて來られてゐることに氣がついたのであるが何とも仕方がない。刻一刻と非常な恐怖の深みに陥つて行く丈の事である。貴婦人達も其の前夜道中に於て如何なることがあつたか、何れも其の點に就いては口を緘して云はない。唯胸に深く口惜しがつてゐたのである。

やがて天津に着くべき筈の汽車が豫定通りに着かない。出迎へをしようと待つてゐるに北上して來ないものだから、領事團、公使團の間にこれが大問題となり、次第に情報が傳はる。そのうちそれぞれ本國にも電報が飛ぶと云ふ様な騒ぎで、結局北京の公使團から現場へ人を派し、支那當局に非常なる抗議をなすに至つた。かくて之が鼎の如く國際的衝動を湧き起したのであつた。日本の新聞記者の方からは時事の小山特派を始めとして、現場の詳細なニュースが續々飛んで來る。當時この事件が滿天下の人心を寒からしめたことは讀者の尙記憶に新たなところであらうと思ふ。

爾來數ヶ月に亘つてこの事件は問題が問題だけに國際的に一大波紋を描き摺つた揉んだの騒ぎを



續けてゐたが、結局裏れ果てた歐米の紳士淑女は、漸く他の土匪や山東兵、其の他官憲の力などに頼んで臨城の山寨から救ひ出され、やつと久しぶりに娑婆世界に姿を現すことが出来た。魔の國を脱出してからは歸途日本の港にも立寄りそれぞれ大使館方面との折衝も遂げ歸國の出来る運びになつた次第である。事頗る重大な國際關係を惹起した爲め米國の如きは其の屈辱を受けた犠牲の一等多かつただけ、それだけ全國的に輿論を激發し、其の前年ワシントン會議で取決められた好意的の對支協定の如きも、俄然支那に對する同情の念を減ぜしむるに至つたのである。吾人をして云はしむれば寧ろワシントン會議の以前に、支那馬賊の現状、否寧ろ支那社會全體がかくの如き魔の國たるを全米人に知らして置きたかつた位である。が、遲蒔き乍らも此の臨城事件に依つて、米國はよい學問をした譯である。他の列國の犠牲も夫々本國へ安着するに至つた後、正式に各國から支那當局に合同的抗議を提出し、夫々損害賠償を要求せるは固より、臨城の馬賊頭目孫美瑤を銃殺すべき事など當然なる要求が持出されたのであつた。

支那當局は否應なしに夫々犠牲に對する損害を賠償した。外、頭目孫美瑤の希望せる通り山東の正規軍に之を編入し、其の名目上、孫の面目を立てゝゐた様であつたが、其の後探知する所に依ると手際よく之を銃殺して、列國側の面目を立てるに至つたとは頗る公明な片付けかたであると評されてゐるのである。

いま此の臨城事件に關し馬賊達の間傳へられてゐる動機に就いてこゝに一二を紹介して見ると白人の乗客に對する襲撃、並に金品の掠奪は勿論かれらの目的とする所ではあつたけれども、更にその根本の原因は、歐洲大戰の際支那が聯合國の一加盟國として、あまたの人夫を佛蘭西の戦線に送つた當時、彼等が戦争の暇々に佛蘭西で行つた活動寫眞の列車襲撃の場面が頗る痛快であり興味深く感じたこと、これが原因となつて、五月五日、夜汽車襲撃を敢行するに至つたわけであつたと云ふことである。して見れば元來白人の本舞臺で教はつた事をたゞ其の通り白人に對して實行して見せたに過ぎないのであつて、今から見れば馬賊生活の一つの華やかな舞臺面を國際的によく演じて見せたと云ふに過ぎないのである。

## 五 馬賊可愛いや

支那の土匪馬賊と云ふと一概にこれを恐れ、又之をけなしてかゝる者がある。けれども、見様に依つては馬賊などとは云つても随分其の特徴長所があり、必ずしも蛇蝎視すべきものでないと思はるゝ點が多々あるのである。自分は馬賊や土匪と親戚でも何んでもないが、寧ろ馬賊に對して好意を持つてゐる。支那民族に對してかれらは高所大所から盡してゐるところがある様な氣がしてならぬのである。固より馬賊は國の文化を破壊し、世界の文明を荒らし廻り、列國人の間にも殆んど野獸に等しいものとされてゐる。文明人は之を評して馬賊はひとり支那の敵であるのみならず、文明人共同の敵であると豪語してゐる。しばらく其の批評は批評とし冷靜に之を歴史の上から通觀して見るに、支那の文明は古來幾度かの波瀾を見、一張一弛の間馬賊連中の手をかりること頗る多く時には所謂王侯貴族の民族的無氣力なる連中よりも、更にもつと數倍數十倍の努力を民族復興の爲めに致してゐることさへあるのである。

馬賊は其の始め綠林に身を起し匪業を稼いでゐるのであるが、いつしか官憲と妥協が付き、其の頭目は部下諸共に其の儘正規軍に編入されて了ふものがある。永年養ひ鍛たへてゐた武斷的手腕はその大將王軍の間に認められ、事有る毎に勳功を立て、遂には風雲に乘じ青雲の志を抱き、又事實其志の實現せられ天晴れ好機會を贏ち得た者さへ少くないのである。其の初め如何に馬賊呼ばはりされて侮蔑されてゐても、最後に其の位を贏ち得るに至れば、最早やこれを蔑視するどころか、天下の者は仰いで皇帝と稱して頌徳表を奉るものも現はるゝに至るのである。古來歴史上に見る英雄豪傑の中にも、漢の高祖であるとか項羽であるとか、近くは清朝の鼻祖親愛覺羅氏であるとかは皆その雄なるものである。

漢の高祖は世人も知る如くもと泗上の亭長と云はれ、つまり無賴漢の仲間で、木賃宿の亭主風情であつたのであるし、項羽の如きも少年時代は不良性を帯び、書を學んでも物にならず、劍を學んでも又完成しない。所謂眼に一丁字の無き遊民の出であつたことは周知のことである。其の他揚子江沿岸今の武穴からは、秦の末年に陳勝吳廣と云つた如き機敏なる親分肌の人物が出てゐるが、今

でも二千年の昔と同じ様に苦力仲間くろいなかまの間に推されてゐる親分は多くこの武穴ぶけつから輩出はいしゅつしてゐる。其の程度に差こそあれ、南北各地からその底力のある人物が各時代を通じ現はれよく萬里ばんりの風雲を起し、又よく其の志を達し得ると云ふものも多くは此の馬賊者流の間から出てゐるのである。殊に彼れ等の間に親分子分おやぶんぶんといふ主従關係のしつくり結合けつごふされてゐるのはかの形式にのみ馳せた君臣の義の比ではないのである。歴代の帝王英傑がこれ等遊民馬賊階級の間から出て、支那歴史の舞臺面を力強く色付けてゐることの明白めいはくであるといふことは興味深い話である。

史を案ずるに、歴代の王朝といふものはその王位が五代十代と続く中に、太平の弊に慣れ、いつしか衣食住には奢り、兵馬の實權は名許りとなり、滔々たうたう文弱に流れるといふがおきまりである。それ故とかく王朝の末路は尾大振はずかの漢民族として文化の最高潮に達し、史上最も隆々たる威勢を發揮してゐた唐朝でさへもその末期の如きは、邊防の力衰へ、藩鎮の抑へも利かず、李唐の末路くらゐ衰れた滅び方をしたものはないのである。

斯くの如くして漢民族の文化といふものは長く續けば續く程、その王朝の影は薄くなり、必ずそ

の潜勢力は失はれて來るに極つてゐる。明の王朝の末路の如きも、滿洲の山中より奮起した愛親覺羅氏の爲めに一蹶をくらひ、脆くも打倒れてしまつた。取つて代つた滿洲王朝も康熙乾隆の全盛時代を経た後は次第に下り坂となり、哀れ宣統廢帝の北京の王城脱出の幕となり僅かにその腕時計をした儘の姿で以て、蒙塵せざるを得ざるに至つた。今では天津に落ち延び氣息奄々たるの慘めさを見せてゐるのである。漢族がかく文弱に流れて潜勢力を失ひ、丸で去勢された状態になりさがつた時、その漢族勃興の使命を帯びその衰へたる體質に鋭きカンフル注射をやり、ピリツと之を奮起せしめるものは誰れあらう。たゞこの馬賊の雄徒あるのみである。固よりその綠林、遊民の出ではあり、眼に一丁字のあらう譯はなく、全くそは無頼漢同様の身である。けれどもその馬上無人の境を駆け廻り、天下生色を失へる四百餘州の舞臺面に一大荒療治を施し、之に一大活力を與へて兎も角も生々した復興の大業を起し、漸次國家の秩序確立と共に學者専門家の類を膝下に集め、又股肱の適才を適所に配置すると云つたやうにして、こゝに天下統一の計畫を實行し百年の計を樹立するのである。文物制度、美術工藝の如きは、世治り太平の氣漲るに従ひ、上之を奨勵すれば下自ら之に

従ふの結果を見るのである。

以上の如く見るときは國民政府の三民主義の形式とやゝ趣を異にする處があるかも知れぬが、此れはギリシヤ、ローマの末期に於ける例を求むるまでもなく、古今東西その軌を一にして其の文弱の極點に達したるものは、武辨一點張の荒武者の爲めに一たまりもなく取つて代らるのである。漢族自身の文化を發揚せしむる所以から云つてもその民族文化の底力の衰微して來た時代には、かゝる馬賊可愛いやの説をなすこと必ずしも無益ではあるまいと思ふ。勿論時代遅れの感なき能はずではあるけれども、しかし最近の國民政府の巨人連中と雖もその餘りに三民主義の一方にのみ走り過ぎて、裁兵の美名に酔ひその軍備を怠り、思想文弱の弊に陥つてしまふ時は必ずや殷鑑遠からず、同じ様な運命になることであらうと思ふのである。

こゝに述べた卑見は北京で芳澤公使の午餐會の席上かつて語りあひ、一座の批判を求めた次第であつたが、公使始め「君は何だか馬賊にでも連絡がありさうだねえ」などの笑談も出たのであつたしかしこの私見は古今の歴史を通じて見て誤らないだけの事實であると深く信ずる次第である。

## 六 北滿の馬賊

支那の馬賊は北支那や南滿洲よりも寧ろ北滿洲を活動の本舞臺となしてゐる。元來馬上で大規模の活躍を試みてゐる馬賊に在つては、餘りに官憲と交渉の多い直隸や山東、或は南滿洲などと云つた所よりも、北滿の地の方が驚天動地の仕事を遂行する上に有利なのである。馬賊は日常富豪の邸宅或は官廳其の他目覚ましいものであれば、相當な調査を遂げた上で、之に對つて集團的の襲撃を試むるのであるが、其の場合、時には人情を盡し、豫告的に豫め避難すべきものには避難するやう又密告すべき所へは密告して來ることもある。併し馬賊團の反感を買つてゐる土豪とか外人宣教師の邸宅とか又は官廳等に對しては、殆んど豫告なしに之に襲撃を加へるのである。

北滿の地は山中森林多く、又河流には眞珠貝に似た頗る貴重な産物の見出さるゝ所があり、或は虎皮其の他の美しい毛皮の獲物も少くない。馬賊團は數十人乃至數百人の隊伍を組んでこれらの地

方に組織的に活躍し、山郷を跋渉するのであるがその地域内には毎年出勤してゐることゝて大體の通路方向などはよく定められてゐるのである。固より全然人間のゐない山里に深入するの必要はないのであるが、從來布教の爲め山間僻地の形勝の地を求め米國宣教師等が輪奐の美を現はしてゐるやうな所でもあれば早速偵察隊を派遣し豫め其の在住者並に金品、銃砲その他兇器の數等を一々調査せしめ日を定めて之が襲撃に取掛かるのである。かれらは久しく北滿の山郷に布教に従事し、山林を伐採し、開墾に力を致し、道路を開き、食糧を貯へると云つた風に既に獨立した立派な山中の自治を行ひ宛然一種土豪化した生活状態を見せてゐるのである。

曾つて西人が北滿の地に其の邸宅の屋根の瓦も紅に、萬綠叢中紅一點といふ雅趣を見せてゐたのであつたのが、不幸馬賊團の目に觸れ反感と興味を咬り、何日かは之を狙つて物にせんとの對象物となり遂に豫定の如く之を襲撃した。一溜りもなくやられ、壁は破壊され窓は破られ宣教師はいきなり拉致され馬背に縛り付けられ菰をかぶせて山寨のバラツクへと引づられて行つた。そして二三の馬賊を付けて嶺を越え谷を渡り、結局吉林省の某國領事館M領事の處に引渡されたのであつた。

此の事件に就いて自分は馬賊の頭目から直接その實話を聞いたのであるが、その言ひ分によると北滿東部に於ける山郷は、元來吾れ／＼が永年苦心して手に入れ、吾々仲間の根據地と定められてゐるところであるのみならず、更に根本は某國の勢力範圍の内に當然這入つてゐるのである。然るを宣教師風情が一體何處の官憲に了解を得て、此の地點にそのやうな邸宅を造つたり、山林を我が物顔に伐採したり、人の地面に道路を作つたりするか。不届千萬の奴輩である。其の罪赦すべからず、由つて一言も云はせず今即座に片付けて了ふ考であるが、一應そちらの申分もあらうから、兎に角命だけは助けることゝして、山越しして某國領事館迄送り届けてやらう。しかし絶對に再び此の山境に踏み込む如きことは罷りならぬ。若し左様なことを今後再びした場合は、何等容赦なく此方の考を行ふからその了見で居ろ云々とのことであつた。かやうにその物凄いや葉の中にも多少の人情味をほめかされ、宣教師は馬賊の案内で吉林まで送り出されたのであつた。

馬賊の犠牲を押し付けられた吉林のM領事は、其の後北滿から榮轉して、南支那廣東の總領事に赴任した。自分は古くからその領事とは知己の間で、久し振りに廣東で出會つたのであつたが、廣

東行は不老不死の思想研究やら、蛇酒の視察で時間を取られ、北滿馬賊の曲折と其の善後の處置に就いて執つた興味ある話は詳しく聞くの機會を得なかつた次第である。

話は元へ戻つてさて北滿馬賊の本據地たる山間山寨内はどんなにしてゐるのであるかといふと、偵察隊、襲撃隊、兵站部、秘書役等の各部が有り、これ等の面々を宿泊せしむべき、可なり廣い住居を有してゐるのである。又馬賊團にとつてこれらの命と頼んでゐる馬匹、ピストル、銃器彈藥の類は、特に格納庫を作つて之に收めてゐる。若しそれ襲撃の遠征に出掛けるといふ場合には、一日に支那里數の二百里や三百里の山野を跋涉するくらゐは殆んど物とも思つてゐない。全然無人の境を馳け廻る氣持ちでゐるのである。無論兵糧を得る爲めには山家に隊を留め、徵發に出掛くるのであるが、全然山家の無い秘境では連年用ひ來つた一寸板や二寸板に引割つた荒削りの材木が崖下にそのまゝ擲り放しになつてゐるので馬賊隊は自分共の夜營に便する様之を用ひるのである。いつ何時でも組立られ、又解體される様な仕組になつてゐる。これ等の厚板は無論一々跋涉をするとき持ち歩く譯ではなく、常に其の場所へ置き放しにしておくのであつて、彼等の通過する隨所隨所に之

が用意されてゐるのである。

尙かれらが尙奥深き山中に長い歲月を送るにしても、北滿の山寨には家族といふものを一切有してゐないのである。しかし彼等は其の出先き出先きに於て、若い者も老いたる者も銘々不自由をしない様になつてゐるやうである。北滿の秘境では時に淋しさを感じ、春情やる瀬なき場合は百方法を講ずると云ふことである。某頭目の直話に依れば、北滿の山中洞穴内に棲まつてゐる牝熊を生捕つて之を拉致して來る。毛深き四足動物とは云へ之がその頭目にとつては無聊の心を慰める唯一の相手であつたと云ふことである。頭目がもし吉林や奉天へ出掛ける別離のときなどその情は愛すべきものがある。後に残る牝熊は目尻に一種涙ぐんだ氣持ちを見せて、其の間云ふに云はれない慈愛の情に羈されると云ふことを漏らしてゐた。實際北滿の月夜、秋の虫の音の外四方山郷に犬の遠吠さへも聞かず、唯その日夜考へてゐるものは掠奪金品の外何物も無いわけであるから、馬賊生活の境涯は一掬の涙に値するものがあるのである。

併し若しそのあたまのある馬賊頭目連であると、其の森林の大なる點や又その材木を流すに足る

べき水運の便、或は山邑、都會地に至る間の交通、其の他金銀、寶石等その土地産物の見本を蒐集し又北滿の山水を背景に馬賊活躍のフィルムを製作せんとするなど色々の計畫を胸中に收め、之を娑婆世界に出し出来れば死出の旅路の思ひ出にもせんなどと、可愛い希望を熱烈に主張してゐる者などもあるのである。

或は某國の軍人の古手とか、或は大學卒業生にて身を落した連中とか、其の他僧侶上りの古狸また世の荒浪に揉まれ通した海千山千連中なども、斯うした北滿の馬賊生活に入つて行くものがあるらしい。かくして全くの自由の天地に人生の温き希望を眺めつゝ身を落としてゆく變り者も少くない様子である。

### 七 河南土豪の建築を見る

北支那の田舎で山東と相並び馬賊の巢窟の多い地點は河南である。河南は大平野が續き見渡す限り一望千里の高梁畠。若し春さき土豪邸内の望樓にでも登り四方を眺めて見ると、高樓萬里の春と

云はれてゐる言葉の通り、實に果てしのないどちらを向いても廣い天地を見出すのである。一體河南の平野は斯くの如く眼を遮る物もない位の殺風景のところであるが、斯かる天地によくも昔し洛陽の文明が發達したものであるかと思議に感ぜらるゝのである。河南地方の大平野に身をおいて見る時は古代の大仕掛の出来事など豫想が出来ない。事件の無い時には全然何事もないが、事の勃發した時といふと恐ろしい徹底的の騒ぎが始まるのである。これは自然の地理上から見ても、容易に頷かれることである。が河南の田舎は所々に樹林のある外、あとはすべて耕作地のみである。其の樹林のある所には多く村落がある。そして村落と村落のある間は何十里と離れてゐる。殆んど平沙萬里、人煙を絶つと云つた感じのする廣いところでその土地に、時たま農夫の影を一二見ることがあるぐらゐのものである。

斯くの如き廣漠無邊の大平野に單調味を破つてゐるものと云へば僅かに唯樹林の間に見る村落のみである。がその村落に取つて其の樹林は風火林となつてゐる外、又泥棒除けの防禦林としても役に立てられてゐるのである。南方支那に於ても見る如く楊樹の林とか或は竹林とかで村落の圍まれて

ゐると云ふことは田舎ではすべて大事な意味を有してゐるものであつて、村を取り圍める林には必ず二重三重の意味があり、必要缺くべからざる塙壁の用をなしてゐるのである。先づ其の村落の中央部には大抵巍然たる土豪の邸宅を見るのである。土豪の邸宅といふと天日燒きの大きな煉瓦で築かれた堂々たる城壁を周圍にめぐらし、中に棟数の多い住宅が青葉の蔭の間から聳えて見える。中に烽火臺として又望樓として一段高く聳えてゐる高樓が指顧さるゝのであるがその屋敷のうちには大きな豪族のうちになると兵舎を有し、幾百千人の手兵を貯へてゐるものもある。ところがその土豪のうちの高壁が十間二十間に亘り破壊された跡を示しひどくやられた儘になつてゐる光景なども見出されることがある。

また大地主にして永年付け狙らはれてゐた者とか或は官憲にしても地方の紅槍會とうまく渡りの付いてゐなかつた者とかは、時折かうした襲撃を喰らふのである。或は遠距離の處から襲ひ來る馬賊の爲めに破壊される家もある。されば土豪の邸内では常に望樓に見張を置き、不祥事の突發を未然に豫知する方法を講ぜんとしてゐる。殊に土豪は財産を有するも省内の銀行を信じない故、金

銀財寶は止むなく邸宅の一部に秘藏し、容易に他から發見し得ない方法を講じてゐるのである。土豪のうちでも特別の大きな土豪になると都會一流の豪族のうちと同じ様に邸内に劇場、池亭、藥園寺院等を有し、一見王城の觀をなしてゐる。唯土地が大平野續きの山なき畝畝の郷であるが故に四川其の他の奥地の山郷の如く、山寨に據つて輪奐の美を表現すると云つた眺めは得られない。けれども樹林の間に隠せる望樓を中心に其の居を構へてゐるところは、河南獨特の野景と見られるのである。

河南土豪の邸宅はさながらヨーロッパの中世紀に見る小城廓の觀を呈し、その高塔の聳え立つ所が特色として眺められるのである。その河南平野の乾燥し切つた無限の大陸美を背景に、斯うした特色ある豪家の建築物を見ると云ふことは、一種悲壯な感に打たれるのである。同じ河南のうちでも直隸、山東寄りの地方は涸渴落漠の情趣に富んだところを見るが、南部鄭城、信陽以南の地方になると、幾分湖北の氣持を交へ潤ひある住宅美を感じるのである。又鄭州から黃河北站の地方は河流の爲め幾分の潤ひを見せてゐるが此の地方は海賊の隠顯出沒する者多く、土民は多く山窩の



穴居に據り、難を避けんことに努めてゐる様子が見えるのである。

要するに河南の田舎は大體北支那系統の風土を示し、其の名物たる馬賊の舞臺となつてゐることは顯著な事實である。漢口より河南經由北京に通ずる京漢鐵路の如きもその馬賊襲撃の頻々たる爲め夜間の運轉を中止してその安全地點に停車するの止むなきことさへ珍らしくないのである。最近にはロシア共産黨系の廻し者が時折此の地方の田舎に入り込み、廟宇祠堂を根據に愚民農夫を籠絡し手を代へ品を換へて種々秘密裡に畫策してゐる者がある様子で、自分達も河南中部でまゝ斯う云つた髯蓬々の紅毛連と同車したことがあるのである。

### 八 土豪邸内に秘せられたる穴倉石室

支那都鄙に見る土豪の胸中には心配のたねが常に絶えないのである。が、殊に其の生命と家に藏する金品の危険に就いては、神經質にならざるを得ない事情がある。或る地方では豪家の貴婦人にして毎夜其の寢室をきめておくことが出来ず、一々室を變へて寢なければ心配でたまらぬといふ者

があり、或は又その毎日の晝寢の部屋でさへ是れ又一定しておくこの出来ないと云ふ悲哀を感じてゐるものもある。河南の如き馬賊蜂起の盛んな地方では、殊に土豪連中の秘密部屋を要することは當然なわけであると思ふ。

一體支那は警察權の微力なところであつて人民の生命財産の安固を計るなどいふことは事實行はれてゐないのである。人民は銘々各自之が自衛策を講ずるの他に道はなく、又極力之が設備の點にも腐心せざるを得ないのである。北京の如きあれだけの大都城の内部でさへも、其の掠奪に對する用意は極めて周到なものである。其の穴倉、石室の如き殊に意を用ひたものがあり、日本人の想像だにも及ばないものがある。穴倉には上の丸天井を残して、周圍は石壁で疊み之に又石の棚を幾重にも作り、金佛、古銅器、名硯、瓷壺、書畫と云つた寶物類を始め、其の他財寶を箱詰に、或は現品のまゝ現はして、處狭く秘藏してゐるのである。

穴倉と云つても僅か尺餘の小さい入口を有する穴で外部からは決してわからない。總べて石疊みで出来てゐるのであるが、之に這入らうとするには特に主人と親交のある友人、又は其の紹介のあ

る少数の人だけに限られ、其の秘密の嚴守され、絶対に之を漏らすことのないと云ふ安心な人でなくては這入らさないのである。それ故無論之が詳細な場所の話なども茲に記す譯にはゆかないのである。入るには燭を掲げて主人に案内せられるのであるが、稍々深く石段を辿つて降りて行くと薄氣味のわるい感じのする所があるのである。北支那の地方は一帶に空氣が乾燥してゐる爲め、密室内の空氣も比較的乾燥し、秘藏された寶物類も割合に保存されてゐるのである。時には千五六百年から三千年前くらゐの珍奇な重寶を見ることがある。固より之が寫眞に取つたり、スケッチしたりすることは主人に安心を與へる意味からしてやらない方がよいのである。支那では如何なる緒から頼でもない處へ渡りが付きいつ秘密の發覺するか分らないのである。又主人の死後果たしてよく斯うした秘庫の金銀財寶がどこ迄も保存され得るか、それとも何處からか足が付いて他人から嗅ぎ付けられるか、或は又どんな人の差しがねで偽物を以て本物とすり替へられることがあるか、全くその邊は不明なのである。

普通穴倉や秘庫の入口といふと厚い石の蓋が敷かれて、殆んど外のところと見境の付かない様に

してゐる。又某所の翡翠商人の秘庫の如きは、入口から數歩這入つた所に設けられその床の敷石一枚を剝いで見れば、其の下は無數の大洋銀貨がぎつしり詰め込まれてあるのである。兌換紙幣なんか絶對信用の置けない支那では、斯うした銀貨の本物の保存されると云ふことも、たしかに當然な譯である。自分は滿洲の撫順炭坑で、千二百尺からの深い地下坑道までエレヴェーターで降つて見た體驗があるが、北支那の某所に於てこの坑道の如き秘庫に、蠟燭を點けて這入ることの光榮を荷つたことがある。實に支那土豪連中の心理には同情に堪へないものがある。見かたによつてはさ乍ら千年後の博物館を今日の豪族が作つておくことに務めてゐてくれる様なものである。これ等の穴倉があつたらばこそ、始めて吾人は今日目の當たり夏殷周三代の金石、其の他の重寶を親ひ手に觸れて見ることも出来るのである。どうせ支那のことであるから、いざ動亂と云ふ際に持出し逃げ廻つて見た所で、何處かで早晚掠奪に遭ふとか、投げ出すとかする。決してそれを持つて逃げおぼせるものではないのである。されば寧ろ安心して支那將來の爲め文化の結晶物を秘藏して千年の後に傳へ後世の考古學者に之を提供せんとすると云つたやうなサーチャイト式の考で居る方が

氣が樂でもあり又その方が氣が利いてゐる位のものであると思ふのである。

## 九 馬賊の職業化

思ふに北支那に於ける馬賊であらうが、南支那に於ける土匪であらうが、すべて其の地方々々の土豪、官衙の襲撃を以つて日課と心得之を仕事の如く繰返してゐる者は、馬賊を神聖視し之を職業化して見てゐるのである。時にはその馬賊が馬賊業を營むに當たり、農業や伐採業を副業的に營んでゐる者もないではないが、多くは馬賊専門に之に當たり、常に其の集團的活躍を繰り返し、計畫的の襲撃に餘念なく明け暮れ之に従事してゐるのである。そして相當な收穫を常に得てゐるものが多いのである。元來法律や官憲などは眼中にないのであるから、何等世に憚る所なく、時には人質の身代金として大金を手に入れるとか、或は又ピストル、銃器、彈丸などを手に入れるとかその他巨財を得るとかして快哉を叫ばしむる好結果を上げる遣り口は全く手に入つたものである。さればこれらの仕事は純然たる職業的行動となつてゐるのである。

馬賊がその掠奪に出掛くるに最も都合の好い時刻は曉天か夕暮か何れかである。そして其の掠奪は僅か數分間といふつかの間到手際よく仕事をしてしふ。そこに電光石火の機敏さを見せ鮮かに引き揚げ姿を晦まして了ふのである。これ等の被害者たる犠牲は無論多くは支那人であるが、時には日本人其の他の外人の襲撃されることもある。滿洲方面に見るこれらの被害者は大抵その事件の後相當時を経てから日本の官憲のところに来て訴へるやうであるが、大抵は後の祭となつて了ふ。支那官憲は從來の例に依れば悪い習慣がある。といふのは馬賊討伐を表面の看板に少なからぬ豫算の金額を着服し、討伐に出掛けると稱して馬賊頭目の方と連絡をとり八百長を演ずるのである。さうして其の報告書には手柄顔に拵へた嘘八百の事項を書き立て、其の討伐費を誤魔かさうとする。のみならず馬賊の方からも相當な事をさせて、馬賊のうは前をはねるのである。それ故支那の官憲は良民からそのコツを看破されてゐるので餘り信用されてゐないのである。

若しかりに馬賊が萬一にも襲撃掠奪の仕事遣り遂げることが出来ずして、豫定に反した結果になつた場合は其の腹癒せに其の附近の村落或は隣接した支那街の豪家を襲撃するのである。それ故

かゝる暴ばれ者は無鐵砲に襲ひ來つて、街中を散々砲撃したり或は喇叭を吹き、三三、五五と荒し廻り、そしてその相當收穫を得るに至れば悠々引き揚げて行くのである。が、得ないときはいつまでも當たり散らすのである。かやうな際に二十人や三十人の支那巡警や又は商務總會あたりの傭兵共が出て行つたところで、到底手出しは出來た譯のものでない。巡警や兵隊共はその馬賊が城外に退去して行かうといふ際、唯申請的に少し許り鐵砲を上へ向けて發砲し、上官の命令なんか到底手が震へて行へるわけではないのである。全く放々の態で身を以て逃げて歸ると云ふ外ないのである。馬賊といふと滿洲では南滿の東部と、北滿の地方が殊に其の猖獗を極め、跋扈してゐるのである。田舎の小さな縣所在地などは度々襲撃せられてゐるのである。東支鐵道の沿線でロシア人の經營してゐる製材工場とかその外大きな建物は幾度馬賊團の脅威を受けたか分らない。しかし何時も其の要求に應じない爲め燒打の憂目を見て、非常な損害を蒙つてゐることは人のよく知れるところである。

要するに斯う云つた職業的の馬賊團が良民に脅威を與へる點は夥しいもので、その實況は又實に

慘酷を極めたものである。其の多大な金品を掠奪して行く許りでなく、主人公を人質に取り、其の身代金に巨萬の額を要求し、其の期日を違へでもする時には、人質の指を切つたり、耳を切つたりして先方へ送り付ける。のみならず人質を火炙りの刑に處したり、種々な斃り殺しにしたりするとは珍らしくないのである。しかし職業化せられたるその馬賊團の内部に這入つて之を見れば掠奪に依つて得た所の巨額の金額といふものは、其の團體内部に豫め協定されてゐる分配率に依り、不公平なく各員にそれぞれ分配されるといふことである。さうして秋の末最早一望千里の野に高粱の刈り取られる十月の頃になると、大抵は皆解散といふことになるのである。

解散後のかれらはどうするかといふと懷中にほく／＼物を藏してゐる彼れ等は先づ大抵市街地に這入つて行つて、冬季の間は賭博に耽るとか又酒色に溺れるとかするのが一般である。そのうちに流石の馬賊も官憲の手に捕縛され、處刑を受ける。これも、斯うして市街地に命の洗濯に出て來たりするからである。山藪に籠つてじつとしてゐればよいものを。飛んで火に入る夏の虫とは之を云ふのである。官憲に捕縛された馬賊は縣の衙門に送られ知事の面前で訊問に附せられ、さうしてそ

張作霖の経歴について世に傳ふる所に従へばかれはもと滿洲營口の片田舎に生れ、弱冠にして身を綠林に投じ、遼西地方隨所に隱顯して民心を相當寒からしめてゐたと云はれてゐる。併し彼の有する性來の奇才と膽力とは漸次頭角を現しいつしか仲間を壓して一方の馬賊頭目に出世した。日清戦争の時分は歸順して官軍に入り、旅順の戦には命からしく落ち延びて再び綠林に還つてゐた。然し日露戦争の時分には官憲と策應して活躍し、遂に又歸順して騎兵隊の營長に任ぜられ、新民屯に腰を据えて軍務に従事してゐた。其の後鄭家屯とか洮南あたりの田舎廻りをして巡防の役を勤めてゐる間に累進して終に奉天前路巡防隊の統領に進んだのである。

宣統の末年第一革命の起つた時には當時東三省に利けてゐた總督趙爾巽の命を奉じて奉天城に納つてゐた。やがて民國の成立するや、かれの巡防隊は陸軍第二十七師と改編され、其の師長の榮職に就いた。爾來張は師團長としての武力を背景に、奉天に於いて牢固として抜くべからざる勢力を扶殖し、其の勢力は歴代の將軍を凌駕し、滿洲の天地に隆々たる運命を開拓するに至つた。民國四年、袁世凱が帝世運動を起した際は之に賛同してゐたが袁の事志と違つて失墜するに乘じ、袁の

股肱であつた奉天將軍段芝貴を邪魔物扱ひに之を驅逐して、自ら省の大御所として納り返つてゐたのである。このやうな調子で張の地位はとん／＼拍子に上り、全く旭日の勢を見せてゐたのである。

民國七年の春になると彼は南征問題に加はり、かの安奉派の麒麟兒と云はれてゐた徐樹錚と結んで、山海關の天下第一關を潜り抜け、京津の地を過ぎ南京まで遠征をした。其の功に依つて張は東三省巡閱使の榮職を授かつたのである。之が彼が中央の舞臺へ乗り出し、武力を天下に公認せしめた第一歩であつた。其の翌年は黑龍江の督軍鮑貴卿を吉林の督軍に据ゑ、又其の腹臣孫烈臣を黑龍江に据ゑるなど、殆んど東三省は己が掌中に入れ之が統一を計つたのである。

東三省を統一し、政權と兵馬の實權を握つた張は翌九年の九月段祺瑞を首領とする安徽派と曹錕を總大將とする直隸派と軋轢抗争するの局面を見て取つて、彼れは第三者としてのキヤステイングポートを握り、巧みに兩方の間に入し、遂に直隸派と握手し、安徽派を倒し、曹錕を自ら大總統に推戴するに至つた。のみならず、自分の姻戚關係の靳雲朋を總理とする組閣に成功し、又自分の代表として幾多の主要人物を入閣せしめたといつたやうな工合に北京政府の實權を殆んど一人で以

の本當の馬賊であることが明かに證明せられた時には、知事はその省の長官に伺つて豫定通り死刑の宣告を下すのである。支那では馬賊に對する制裁は相手が相手丈けに、一面には良民に對する對面上、他面には遊民風情に對する深刻な見せしめのことゝて、慘忍な匪業を打ち懲らせる爲め、馬賊の今一つうは手を行き物凄しい處刑法を取るのである。蓋しては止むを得ないことであると思ふのである。

## 十 馬賊の成功者

馬賊から天下を取つた梟雄は、古來少くない。假令その天下を取らない迄も、其の地方の梟雄として覇を唱へるに至つた者は少くない。漢の天下を取つた劉邦、高祖の如き、又長白山下より起つて清朝の基を建てた愛親覺羅氏の如き、近くは滿洲王張作霖の如き、何れも其の亂國の梟雄として兎も角も成功者と稱することが出来る。梟雄連中は、自ら書を以て姓名を記すに足るなどと豪語してゐるが、元來遊民、馬賊、無賴漢といつたやうなものゝ出であるから教養などあらう譯もない。

恰かも項羽の如きは不良少年で、読み書きを學んでも物にならず、武藝も亦物にならず、而かも書は姓名を記するに足るなどと、自己擁護の言葉を吐いてゐるわけである。英雄の言もその反面を察すべきである。最近綠林出の名物にして、兎に角も大元帥の地位まで漕ぎ着けた張作霖その人の、成功徑路に就き左に今簡單ながら之を紹介して見やう。

張作霖の名は世界的に有名になつたがその生前に於ける當人の地位は事實上奉天軍閥の守り本尊であつた。又過ぐる北京政府の大元帥を勤めてゐたのであつた。たしかに一時彼は北支那の武力を代表する唯一の實力派でもあつた。事實又かれは一奉天軍閥の張作霖ではなくして、張作霖の奉天軍閥であつたことは世界の齊しく認むるところであつた。張は民國十七年六月四日列軍爆破の奇禍に墮れたが、その地位を贏ち得るまでには幾度か死の巷に出入し、凡庸でない徑路を潜り抜けて來てゐるのである。綠林の出で張作霖一代の如き成功を見るなどいふことは、支那でなくては得られない場面であり。又彼には他の馬賊上りの連中の追従を許さない奇才が備はつてゐたとは周知の事でもある。

張作霖の経歴について世に傳ふる所に従へばかれはもと滿洲營口の片田舎に生れ、弱冠にして身を綠林に投じ、遼西地方隨所に隱顯して民心を相當寒からしめてゐたと云はれてゐる。併し彼の有する性來の奇才と膽力とは漸次頭角を現しいつしか仲間を壓して一方の馬賊頭目に出世した。日清戦争の時分は歸順して官軍に入り、旅順の戦には命からく落ち延びて再び綠林に還つてゐた。然し日露戦争の時分には官憲と策應して活躍し、遂に又歸順して騎兵隊の營長に任ぜられ、新民屯に腰を据えて軍務に従事してゐた。其の後鄭家屯とか洮南あたりの田舎廻りをして巡防の役を勤めてゐる間に累進して終に奉天前路巡防隊の統領に進んだのである。

宣統の末年第一革命の起つた時には當時東三省に利けてゐた總督趙爾巽の命を奉じて奉天城に納つてゐた。やがて民國の成立するや、かれの巡防隊は陸軍第二十七師と改編され、其の師長の榮職に就いた。爾來張は師團長としての武力を背景に、奉天に於いて牢固として抜くべからざる勢力を扶殖し、其の勢力は歴代の將軍を凌駕し、滿洲の天地に隆々たる運命を開拓するに至つた。民國四年、袁世凱が帝世運動を起こした際は之に賛同してゐたが袁の事志と違つて失墜するに乘じ、袁の

股肱であつた奉天將軍段芝貴を邪魔物扱ひに之を驅逐して、自ら省の大御所として納り返つてゐたのである。このやうな調子で張の地位はとん／＼拍子に上り、全く旭日の勢を見せてゐたのである。

民國七年の春になると彼は南征問題に加はり、かの安奉派の麒麟兒と云はれてゐた徐樹錚と結んで、山海關の天下第一關を潜り抜け、京津の地を過ぎ南京まで遠征をした。其の功に依つて張は東三省巡閱使の榮職を授かつたのである。之が彼が中央の舞臺へ乗り出し、武力を天下に公認せしめた第一歩であつた。其の翌年は黑龍江の督軍鮑貴卿を吉林の督軍に据ゑ、又其の腹臣孫烈臣を黑龍江に据ゑるなど、殆んど東三省は己が掌中に入れ之が統一を計つたのである。

東三省を統一し、政權と兵馬の實權を握つた張は翌九年の九月段祺瑞を首領とする安徽派と曹錕を總大將とする直隸派と軋轢抗争するの局面を見て取つて、彼れは第三者としてのキヤステイングポートを握り、巧みに兩方の間に入出し、遂に直隸派と握手し、安徽派を倒し、曹錕を自ら大總統に推戴するに至つた。のみならず、自分の姻戚關係の靳雲朋を總理とする組閣に成功し、又自分の代表として幾多の主要人物を入閣せしめたといつたやうな工合に北京政府の實權を殆んど一人で以

つて握つてしまつたのである。

越えて十年の夏には、ロシアが蒙古に侵入して外蒙古の獨立宣言をした際、張作霖は蒙弼略略使の要職に就き、熱河、察哈爾、綏遠等の特別區域を新勢力の中に入れ、各特別區には自分の股肱を都統に据ゑるといふ風にきめて行き、茲に全く滿蒙の實權をば文字通りに掌握して了つた。

こゝで張作霖は氣驕り、意氣益々盛んで、支那の天下は最早俺が取つてしまつてもよい時期が來たのだと、滿心から野望を抱き、民國十一年の春には南方支那から、曹錕の大總統たることを喜ばず之を否認し且つ北伐軍を起して南北抗爭の騒ぎの起つたのを好機會に、こゝに張作霖は南北統一などといふ大旗を風に翻へし、旗鼓堂々十萬の總統を統率して關内に攻め寄せ、そして一舉にして直隸派を倒さんものとて天津、北京に肉薄したのであつた。ところが張は直隸派の驍將吳佩孚の爲めに脆くも一敗地に塗れ、張作霖は其の官職を剝奪せられ、一平民として滿洲から落ち延びなくてはならない次第となつた。そこで張は一策を案じ、是非共山海關の天險を死守して、直隸派の侵入を防止するが爲め、東三省は聯省獨立の旗を奉天城高く翻し、名を民選に借り、東三省保安總司

令と云へる官職を作り自ら之を僭稱したのである。

其の後張作霖は第二奉直戰爭の結果段執政政府の没落した後、北京王城を乗つ取り、文武百官と四十五萬の軍備を整へ、立派な大元帥と稱し紫禁城内雲深き所に納まるの身となつた。南方國民革命軍や其の別動隊たる閻錫山軍及び馮玉祥を撃退して、天晴れ四百餘州に皇帝の地位の復活せんことを夢見てゐたのであつた。

滿洲遼河の河岸に孤々の聲を擧げ、馬賊の間に出入してゐた張作霖が、一代にして將にその皇帝の位地を夢にまで見、兎も角も大元帥迄漕き着けたと云ふ彼の經歷は、最近袁世凱に次いで亂國の梟雄としてレコードに残さるべき名物であつたと思ふ。

しかし、今となつて之を考ふれば、寧ろかれは山海關以東に納り、東三省治世以外は野心を斷ち北方ロシアの共產黨を拒否して、内政に専ら努力することにしてゐたならば、細く長く其の徳を頌せられてゐたことであつたらう。出が出だけに全く張は柄にない野望を恣にして終に非業の最後をげらるゝに至つたのは、身から出た錆として諦めるの外、他に辯解の餘地もないであらう。しかし



遂彼はとも角も一種綠林出の成功者と稱することはたしかに出来るのである。

### 十一 北滿に活躍する日本女馬賊

腕に櫻の花の彫り物をした本年三十四歳の日本婦人が、露領沿海州と吉林省境ひの老黒山に立て籠り荒くれた支那馬賊を手下として日本女馬賊の名を界限に轟かしてゐるといふ話が此の程支那冒險旅行家藤間呑龍氏に依つて語られた。同氏は最近内外蒙古吉林省間島朝鮮方面の狀況から同氏が馬賊に捕へられ、九死に一生を得た興味ある物語をされてゐたが、女馬賊はその昔浦鹽で藪者をしてゐた頃彼の女の許へ繁々通つて來た支那の商人風の男があつた。氣前もよく商人であり乍ら豪快な所があるので彼の女も憎からず思ひ茲に日支親善の因縁が結ばるゝに至つた。その後絹商人だといふ男に身受けされて相共に故郷老黒山へ歸つて見ると絹商人とは眞赤な嘘、彼は實は此の老黒山に立籠つてゐた馬賊の頭目であつた。彼の女は仰天する迄に驚いたが今更らどうする事も出來ず名も一志花と支那名を用ひ山寨の姐御として其の日を送る外なかつた。後で聞いて見ると此の男は張

連と云ひ張作霖の舊部下の一人であつた。然るに其の後張連は半身不隨の身となり病床の中に朝夕を送る運命となつたので茲に一志花は厭應なしに病夫に代つて三百に上る部下を指揮する事となつた。その頃日本人二名の此の地に迷ひ込み張連の部下に捕へられ銃殺される事に決つてゐたのを彼の女は出動先きで聞きつけ驚いて歸り之を助けて浦鹽まで護送させた様な事もあつたといふ。この老黒山へ大正十年の秋西伯利探檢の途辿り着いたのが勝間氏で丘陵地帯の立派な村が全部馬賊の住ひだとも知らず入つて行つた。然し日本婦人一志花に逢つて幸ひ厄難にも逢はず三日間厚遇され、彼の女とも泌々いろ／＼な物語をした。一志花は長崎の女だといふ外、本名も親の名も言はず、今は病夫に代つて女馬賊の頭となり部下を指揮してはゐるが自らは其の所業を深く恥ぢてゐたと言つて今更ら逃げ出す事もできず、又た多年連れ添うて見ると人情に變りはなく病夫を見棄てる氣にもなれない。たゞ日本の爲めになる事なら何かして見たいと言つてゐる。所が日本人同志である勝間氏と一志花との懇ろな物語に病夫が稍々妬心を起し少々變なので氣味悪くなり、もつと滞在する所を三日で暇乞ひして去つた。遺憾な事には此の日本婦人を頭に戴く老黒山の馬賊と間島なる暉春の

馬賊生活

日本領事館とは今日でも反目を續けてゐる事だ。こは張連の部下が曾て酷く遣つ附けられたこと及び日本領事館が更に此の老黒山の馬賊を利用しない爲めで一志花も之には日本婦人として竊かに心を痛めてゐるといふことである。

三 土匪物語

## 十二 土匪馬賊を利用せる官憲

土匪といふは南方支那で唱へる言葉であつて、其の性質行動などは滿洲馬賊のそれと何等變りはない。支那は昨今でこそ國民政府が押へてゐるやうであるが、南北共に見方次第では、土匪萬能馬賊横行の天下であると云つても差支へない觀があるのである。國民革命軍が北京を乗り取つたとか三民主義の青天白日旗が滿天下に翻るの時代となつたとか云つてゐるけれども、其の果して土匪馬賊を鎮定し之を根絶し得るや否やは頗る疑問である。その之を討伐するは譯なき事のやうであるけれども、飯の上の蠅と同じで、永久に之を狩り盡す譯にはゆかぬのであるから大局からいふと之を利用の出来るだけ利用するに越したことはないといふことになるのである。

南方支那の實況を見ると各地の官憲は巧みに之を利用し、地方行政の上に好結果を見せてゐるところさへもある。元來支那の社會は、官憲の力だけで土豪の財産を捲き上げるとか、課税徵發等の

ことを思ふ儘にやり遂げやうとしても容易に出来るものではない。そこでうまく考へ土匪の利用を思ひ付き頭目をやつて膝詰談判をさせるのである。高壓的に無理にも事を断行しようとするには土匪の力に依つて解決するのが一番速い。官憲の力なんかでは埒があかないのである。それ故地方の秩序維持とか地方の財政問題とかは、すべからず土匪の勢力を利用すべしといふことになつてゐる。されば土匪なるものは地方行政の上には有害なるものと目されてゐるが同時に又少なからぬ助けともなつてゐるのである。南方支那では片田舎を遊歴する際の如き、土匪村を通過する時には豫め村の入口で税を拂つて置けばよろしい。すると村を通過する間は土匪の護衛が付いてゐて呉れる。土匪のお蔭で身體の危険を免かれると云ふことは事頗る矛盾の觀があるやうである。けれども、これ以上の名案、安全策はその土地では無いのである。斯くの如きは頗る顛倒せる話のやうであるが、理屈を超越せる支那のことであるから、すべて他を利することに依つて自分をも利すると云ふ有難味を見出すのである。

しかし時に自分達は月下、山郷の樵路を辿り行くに當たり會つて夏の夜遅く山中、支那宿を叩き

之に泊したことがあつた。ところが支那宿の親爺は自分に云つた。「今頃こゝへ來られるには、しも手の山上高塔の聳えた邊りを通つて來られたでせうね」と云ふ。自分は、

「さうです、つゝこの下の所で月下に白き高塔を眺めつゝ溪流の樵路を登つて來たのであるが、半勝たる小徑を辿つてゐるうち其の塔がいつまでも半天に照されてゐるのを見て、何だかよい氣持はしなかつたよ」。

と答へたところ、

「そりや、さうでせう。あの邊りは何時も土匪が待ち構へてゐて、追剽を稼いで居る所だが、何か出なかつたでせうか」。

と尋ねて居つたのであつた。幸に土匪の餌食に成る程の物も持ち合はしてゐなかつたし、別段自分は何の危険にも遭遇はしなかつたと答へたのである。併し時折かうして田舎をあるいてゐる際土匪頭目の門前などを過ぎ行く時分は、一種氣味の悪き思ひをするのである。

## 十三 土匪頭目を重用せる山寨の土豪

南北各地の片田舎に、城廓を構へ周圍に不釣合ひな豪奢な生活を營んでゐる土豪連中は内心反面に常に匪賊の害を氣に病んでゐる。これは滿洲地に羽振りよき豪農の胸の中と同じ譯である。何れの地方にしてもその數百丁歩の耕地を有し、或は又幾十里に渉る山林土地を有する土豪の附け狙はれてゐることは云ふまでもないが、その現金の手許に這入つた事が感づかれた場合は多く襲はれずにはゐられないのである。土豪の方ではかう云つた被害を豫防する爲め、平常自分の家に相應する丈の防備を怠りなくすると同時に、附近の有力な土匪頭目に澤山な金を贈つておいていざといふ時の保護を依頼する習慣になつてゐるのである。

そこで土匪の部下が家の門番をして呉れたり、又その附近にゐて警備のことに絶えず意を配つて呉れたり、或は又自家用の船の船頭を勤めて呉れたりなど、可なり土豪に取つて警備上の任務を盡

して呉れるやうになつてゐる。平常事の無い時は此の状態が続いてゐてくれるのであるが、一朝土匪社會にバランスが破れ勢力の均衡が失はれたとしたならば、平常信任してゐた頭目は勢力を失墜するとか、他の山郷に移つて行くとかいふことになる。そんな場合には忽ち他の土匪が侵入して來て襲撃を始むるの恐れがある。其の爲め山寨に據つてゐる土豪の間では三年に一度位は、天災同様に被害の來るものと考へて諦めてゐる様子である。

現に雲南の北部から四川に出で長江を下り、日本へ留學に來たものゝ間には、途中これら土匪襲撃の災厄に遭ひ、金品を残らずやられ命からく漢口に着き上海經由で日本へ來たのであると云つて身上を語つてゐたものもあつた。

世人はとかく土匪と云ふとあたまたごなしに猙獰そのものゝやうに考へてしまふが、山間に生活する土匪の中には比較的率直な性質を有し、信頼の出来る者もある。年來之と報酬の約束でも出来てゐて懇意になつてゐると宜しくこれこれのことを頼むからと云つて置けば、大體家思ひに警備の任でも何でも果たして呉れるのである。けれどもそれには平素が大事である。元來土匪は頭目が常に

部下を集め、他の土匪と抗争を始め、利害の衝突から戦ひを宣し或は分捕の争ひ或は人質の奪ひ合ひと云つた事に火花を散らす。従つて相當外交的訓練の機會も多くその外交取決め掛引き事に關してはかなり機敏なもので全く日本の昔の山賊雲助が箱根八里の道中客を襲つてゐた時分の話などの比べものにはならないのである。

土匪のうちでも取りわけ四川省方面のものになると實に機敏な行動をとる。その江流の急であり事を瞬間々に總べて利那的に片付けざるを得ないとの自然の必要も手傳つてゐるのである。又山嶽嶮々として聳え溪谷は無限の深刻味を帯びてゐるやうな大自然の背景がこれ亦自然に土匪の氣分を作つてゐると云へるであらう。土匪の心情の如何に率直味を帯び又その恐ろしい悲壯な氣分を伴つて來るといふのもこゝに原因が存してゐると云へるであらう。臺灣を遊歴されたことのある讀者は桃園の山中大料坎、角板山方面の大自然に接せられた事であらうが、あの大料坎の溪流はいかに眺められたか。中央山脈を背景に熱帶的の一種の物凄氣分を聯想させてゐるのである。そこには生蕃の群が會つて此の溪流に出沒して居つた状態も思ひ浮べられ、何となく悲壯な感に打たれるのである。

である。四川の天地は大料坎や、臺灣中央山脈の比でなく、全體が亞細亞の馬の背となつてゐる所だけに非常な大規模の山水に富んでゐる。それ丈に又土匪の氣分も物恐しい深刻味を見せてゐる。されば四川省の秘境山寨に據つてゐる土豪なども此の點をよく了解し承知の上で之を利用してゐる譯である。

四川から貴州方面に掛けてあの方面の山郷は罌粟の栽培が盛んである。阿片の産出の多いだけ夫だけ土匪の目的となつてゐる山郷も富んでゐるわけである。土匪が一稼ぎをしやうとするには最もよいお誂へ向きの舞臺となつてゐるのである。されば恐らく此れらの奥地の秘境は將來如何に善政が施かれる時が來ても、匪賊のたねは盡きないであらうと思はれる。國民政府の三民主義にしても果して四川貴州の匪賊の種を討伐し盡し得るや否や、百年の河清と一般であらうと想像されるのである。

## 十四 土匪山郷の千紫萬紅

世人は土匪の山郷に行つて見ると殺伐を極めた眺め許りが展開してゐる所であらうと云ふ風に聯想される。けれども、土匪村といへども、矢張り土匪の家族がゐて、女房もあれば幼い子供なども居る。薄萩といつた優しい花卉の眺めも見え、秋は蟋蟀の音を路傍に聞くと云つた風で、何等良民のゐる村里と變りはない。江上に漕出でて見ると流れの中心には外車で玉蜀黍を臼杵いてゐる音がコトンコトンと晝夜を分かつたず聞えてゐる。又江を隔てゝかなた土匪村の邊りにゐる犬であるか、野犬の遠吠えも何となく雲煙萬里月夜の趣を添へてゐるのである。

自分達は四川の奥地遠く分け入る度毎に、身は亞細亞の中心に來てゐるが、かうした秋の夜の幽情とその土匪村邊りの幽趣に接して見て、人知れず一種云ふに云はれない優しい感じに打たれるのである。

時には四川峡中一寒村の霧の間に見出される賤民の家には、思ひがけなくも曾つて難破せる孤舟の客で其の村に漂着して助けられたと云ふ美談さへもある。大變町嶺に藁を焚いて身體を温めて呉れたり、食事を作つて心から暖かくもてなしてもらつたと涙ぐましく語り出づる女があつた。段々その親切に浴し村民から心の限りをつくされたといふ珍らしい佳話を聞いてゐる中に、其の女といふは全くまがひもなき日本の女であることが分つて來た。話は興味深い挿話によつて又不思議にかゝる四川三界に落ち延びてゐたものであるかと云ふ因縁徑路をこまごま聞いてゐるのは小説以上に面白い。併し土匪村の近くにどうして日本の女がわけなく入り込む様になつたのであるか。その邊に就いてあまり立入つて之を突込むわけにもまゐらぬのであるけれども、日本人にして四川峡中の民船の曳子になり全くの裸體で土地の曳子の仲間に入りあの朝夕霧のかゝつた江岸の岩路を行つたり來たりして暮してゐる者などもあると云ふ事をも耳にしてゐる。日本の先驅者といふのもどうかとは思はるゝが、兎も角もかゝる手合ひが物凄秘郷に入り、土民達と一緒に打ち溶けた生活を營んでゐると云ふことは、これ又悲壯なる談柄となるのであるが、その間又一種の優さしみを感ぜざ

るを得ないのである。

又奥地に分け入つて土匪村の近くに男の居ない女人村のあるところがある。こゝは女のみしかゐない處であつてその體格は良い。精力絶倫の豪のものばかり全村を形成してゐる。若し男子にしてその變つた女人村へひとりで踏み込んで行かうとする場合には、毎日缺かさず米一升、豚肉十斤、酒三斤、卵幾十個其の他精力を付ける營養を充分に攝つて、六十日間たつぷりと身體の補壯を圖かり、然る後始めて其の村に這入れたい放題のことが許されるのであると云ふ、不思議な仙境的の女人村があるのである。こゝは南支湖南の洞庭湖から流れを廻り西の方、桃源から六十支里、剪家磯から程遠からぬ山峽の女人村であるが、此の地方を遊歴して來た楚客にして自分の知人横田君なども常に人さへ見れば之を自慢話のたねとして物語つてゐる位である。

もこの女人村は後家や娘の集まつてゐる仙境でうっかり不用意に這入つて行かうものならひどい目にあふと云はれてゐるところである。

かやうに支那の奥地土匪村及附近の秘境には、現實の山郷と思へないやうな一種不可思議な傳説

のある仙境を發達させてゐるのである。土匪村自身にあつても奥地に入つて見ると必ずしもその殺伐一方の所ではなく、矢張りそこには艶だねの談柄も可なり有つたり、人氣は必ずしも悪いとはきまつてゐないのである。かつて土匪の間に永く人質となつて養はれてゐた日本人高橋君等の實話に依つて見ても、時には血あり涙ある優し味を見せて四川の虎の肉を御馳走して呉れたことも有つたことである。尙土匪の間では人質を片付けやうとする際の如きその肥満してぼやつとしたやうに見えてゐる人質は之を慘殺するも、その生き靈となつて祟つて來る心配もないであらうが、そのからだの瘦せて神經質のものは之を殺戮すると後で、其の魂が鬼になつて祟るであらうなど云つて結局瘦せた人質は青龍刀の露となるの危害から免れたとの事である。

鬼にも角にも土匪山郷に見る彼れ等の間の人情と云ふものは一種特別なものである。吾人は臺灣に行つて、中央山脈の森影に動ける生蕃の女人を見、又その芋畑に働ける生蕃の娘を見て、萬綠叢中紅一點の感じを得たのであるが、之と同じ様な氣持ちが土匪村の谷間の薄、赤萩、虫の音などに接する毎に又聯想されて一種の幽情の咬らるゝものがあるのである。



土匪村だつてその村の人々本来の素質が、必ずしも殺人犯に出来てゐるわけのものではないからいつかその王化に浴し民國なら民國の徳化に靡びかせるやうに政治のやりかたを向けて行かなくてはなるまいと思ふ。今日のやうに國內の秩序維持が本當に整はず萬民に不安の念を抱かせ外人に恐れを抱かしてゐるといふのはそこに尙大きな缺陷が官民双方の間に在ると云はなくてはなるまいと思ふのである。

### 十五 四川峡中江上の夢を破る土匪の銃聲

楊子江を上り宜昌からかみの四川三峡方面に向ひ、人煙稀なる奥地の秘境に別け入つて見ると云ふと兩岸の高峰は四千尺五千尺から八千尺一萬尺と雲を衝いて碧空に聳え、山色天に連つて殆んど屏風でも立て廻はした如き、奇抜な景色の展開して行くのを見るのである。江岸には黃陵廟であるとか、屈原公祠であるとか、巫山女神祠であるとか云つたやうな繪の如き樓閣山水を見せてゐるのである。

四川の風景と云へば即ち三峡の絶景であつて、これは流石天下の三峡としての定評を辱かしたくないだけの物ではあるが、時には此處に山神が楚客越客に對し、又山郷の良民だちに對して悪戯を演じてゐるのである。その悪戯とは江上に大きな渦巻を起すとか或は急流激湍或は旋風大風などを起して爲めに毎年少なくとも一千人以上の犠牲者を出してゐるのである。殊にその夏の夜の峡中の旋風と來たら、秋の落葉の天空に巻き上げらるゝが如く、我々の乗つてゐる舟を弄びつゝ見るまに天に向つて巻き上げ去るのではないかと思はれた程前後左右に揺られ吹き付けられたのである。

斯う云つた四川峡中の危険な體驗は山間の峡中とか或は沙漠、又は大洋の眞ん中あたりでなくては起らない現象であつて、全く上帝の悪戯の一つとして數へらるゝものである。ところが峡中には尙それ以上の人間の悪戯が行はれてゐるのである。といふのは江岸に又山麓に、氣紛れに出て來る匪民の悪戯これである。いかに天下の絶景と云つてもその爲めに臺なしにされてしまふのである。天下の絶景に見とれ恍惚として良い氣持ちになつてゐたり、或は讚美の餘り疲れて居眠りを催してゐたりする際、峡中全谷に響き渡るやうな銃聲一發。こゝに午睡の夢は俄然破られ、びつくりして

起き上がった。續いて二三發ぼん／＼とやつて来る。

これは唯事ではないと見てとつて水先案内や船長のゐる鐵板張りのブリツヂに馳け込んで行く。すると流弾が船側に中つてばちんと弾き何處へかと外れて行く音も聞こえる。斯うして銃聲を聞いてゐる氣持と云つたら無いのである。水先のリンキャン領江翁に聲を秘め言葉を掛けて見ると、

「何日も土匪は此の邊で悪戯をします、今日はこれで少くない方です」

などと云ひ乍ら澄ましてゐるのである。時には此の土匪の發砲した銃弾は船のサイドに括り付けられた丸柱に一寸以上も深く命中して這入り込んでゐるのを見る。船の速力の速い爲め多くは命中しないのが普通であるが、時には煙突に的つて十四五個所もそれ以上も穴が明いたり又は凹んだりして痕跡を残してゐるのを見るのである。

斯様にして三峽を遡つてゐる際、楚客は土匪の發砲に目を醒まし若し船が狼狽して進路を誤まり坐礁でもしようものなら、其のどさくさ紛れに土匪は小舟を仕立て、激湍を横切り、船へ侵入しどやどやとなだれ込むのである。なだれ込まれたら最後、船室内の毛布、シート、鏡、コップ、食器

敷物と手当たり次第目ぼしい物は根こそぎ持つて行かれてしまふ。そのどさくさに土匪でない普通の村民土百姓迄もが紛れ込んで來て棒の付いた雑巾、箒、網、ワイヤ等一つもあまさを掠め去るのである。

これであるから揚子江の上流を航行する各國汽船は互にその船側に持つて行つて黒板を掲げ其の附近の状況を互に知らせ合ひ、或は事件の突發を簡單に記入する。中には支那に船籍を有する汽船なども其の危険を免れやうとする手段に外國の國旗例へば佛國の國旗なんかを掲げ、又船長も佛蘭西人を備うて來るなど頗る用意周到な手を盡してゐる。しかし近年土匪の方でも、佛國の國旗を掲げた船は偽の佛國船であることに感づき考へて來た。その爲め本當の佛國汽船まで信用がなくなり被害を蒙むることがあると云はれてゐる。併し何と云つても上流では汽船である。汽船は速力がい又鐵板を船の周圍に張つてゐるから、民船に比して危険率の少ない事は事實である。最近一二年この方、揚子江の上流では、其の重慶あたりから宜昌漢口あたりまで下つて來るものゝ外には幾百噸と云ふ大型の民船はゐなくなつた。船が小さいときは土匪の被害を受けることが頻々である。そ

の爲め今では民船は殆んど姿を消して、殆んど汽船萬能の時代となつたのは一奇である。

四川省當局は、これらの汽船に無線電信を備へると云ふ列國の提案に對して、未だ回答を與へない。その爲め宜昌、重慶間の三百五十二哩、又重慶、叙州間の二百五哩の航路は各國軍艦の護衛の下にあらざれば、人命と貨物の安全が期せられない状態にあると考へられてゐる。まさかそれ程でもないが、現在では何れの國も小型の軍艦を派遣してその船舶並に四川在留民に對して保護の任務に當たつてゐる。土匪側が爆彈投下で汽船を脅かさない限りは、今日の場合汽船で往復することは全く安全となつてゐると云つてもよろしいのである。

尤も船の二等三等客の所は設備がよくないので、土匪の打ち出す彈丸は遠慮なくこゝに這入つて来る。故に彈丸が雨霰と激しく打出される時に死傷するのは多く此の二、三等客即ち房艙統艙の客に限られてゐる。一等客の方には殆んど怪我人さへもないのである。自分は時折り前方のデッキに出で、巫山十二峰の絶景を眺めたり、白帝城下の武陵桃源に視線を投すべく、席を占めたりなどしてゐる。或は食後の午睡をデッキに出てとつたりなどしてゐる。すると、匪賊の發砲が思ひ出され

て物凄いやうな感に打たれることもあるのである。土匪村のそばを船で過ぎ行くときはたとへその發砲を受けることはなくとも決して心持ちのよいものではない。慣れると平氣にはなつて来るが、それにもまさかの時を思ひ出し矢張り薄氣味がわるいのは事實である。でもさうした不安のある航行を續けて四川の三峽を越え、萬縣、涪州、長壽、重慶、瀘州、叙州へと遡江することが何となく四川航路らしい氣持ちがするのである。謂はゞ下流の航行とちがつて大いに氣味の悪い張り合ひはたつぷりあるのである。

## 十六 四川涪州の露と消えし亡友細川船長 を弔ふ

四川や貴州の兵隊は土匪馬賊と選ぶところがない。時には其の或は兵となり、又土匪となるなど定まつた所がない。されば四川兵と云へば殆んど土匪の代名詞の如く見ても差支へないからである。支那の兵隊は御都合次第で傭兵にもなるが、又都合に依つては何時土匪に變ずるかも分らない。

それ故四川長江の上流に於て、その警備の手薄く、危険な場合の起つた際何處へ訴へて行つて好いやら、山中のことゝて全く方法がなく、進退谷まり唯虎牙の犠牲となるの外ないといふが常である。

如何に列國の軍艦が派遣されてあるとは云へ、其の航行區域の五百數十哩といふ、廣い範圍に亘つてゐては、假令汽笛を擧げて死の叫びを傳へて見たところで、山彦に響く反響位のもので、殆んどたいした役には立たないのである。況んやその匪賊の害は急流激湍とで殆んど寧日なく、如何に使命を帯びてゐる帝國の兵船がやつて來たとしても多勢に小勢で四面楚歌の聲になる場合が多い。一挺や二挺のピストルもたいした役に立たない。雲霞の如く押し寄する匪兵の襲撃を受けるときには、一溜りもなく四川峽中の露と果てるのである。上流を上る船でその乗組員は銘々毎朝出帆に先立ち頭を垂れ、心の神に默禮して祈を捧げ其の日の安全なる航行を人知れず念じてゐるのである。が、しかし如何に神佛に頼んであつても、いざ匪兵が眼の邊りに迫つて來た時には、最早や神も佛もなくなつてしまふ。全く乗組員は狙上の魚となる運命に直面するのである。

亡友細川新吉君は、もと日本讃岐の産で、明治十五年生れ、人となり豪放快活、よく清濁併せ呑

むの氣宇を有し、夙に日清汽船に入り、大福丸其の他長江下流を航行する汽船の船長として令名を馳せてゐた。自分は其の頃から細川君と知り合ひ十年の知己として長江往復の際には、成るべく君と會ふ様に都合して君の船に乗るやうにしてゐた。其の後四川航路の開くるに至つて、君は宜陽丸の船長に簡拔せられ、宜倫線（宜昌、重慶間航路）に従事すること幾回自分が四川入を決行すると二回に及んだのも、一は同君の懇懇に待つことが多かつた次第である。

民國十二年は秋九月上旬の出來事であつた。四川航路の日本船宜陽丸は宜昌を發し、萬縣經由、重慶に向けて出た途中一大事件が突發して哀れ我が船長細川君は涪州荔枝の江上で、暴戾な匪兵の毒手に掛かりピストル數發、遂にその儘雲煙萬里の異郷の露と消え果てた次第である。

荔枝と云へば、唐の玄宗皇帝が、寵妃楊貴妃の爲めに態々使者を發して、珍果荔枝をこゝまで求めにやつた所であると云ふ。一説には又嶺南廣東まで荔枝を取りにやつて途中今の涪州郊外に立寄つた。其處を荔枝と名付けたのであるとも云ふ。今は其の上の總門關と云へる渡しの江上電線に群がれる幽鳥の姿が獨り優しく當時の物語を聯想させてゐるやうな感じがするのである。

斯う云つた優しい氣持を啖る涪州の地に又どう云ふ因果で友人細川船長が不幸、慘酷な最後を演じなければならなかつたかと思へば思ふ程、涪州の山容水趣は自分に取つて沈痛悲壯な感じを伴つて來るのである。又涪州の陸上に見える兵服の姿も何となく自分には聯想が香しくない。荔枝に碇泊せる軍艦が、紅白青色の三旗を掲げてゐるのは佛蘭西の軍艦だらうと眺められるが、これは同國の宣教師警備の意味で此處にああして碇泊し、萬一を慮つてゐるものかと思はれるのである。涪州の江上を過ぎる事前後四回、自分はいつも此處を通る度毎に何物をも打棄て獨りデツキに立ちて亡友細川君の爲めに哀悼の意を捧げてゐるのである。

同君の遭難當時の狀況に就いては、其の土地の者から詳細な話を聞き、又會社側からも情報を取り集め親しく其の時の君の心を明かにすることがせめてもの自分の慰めとなるのである。

當時四川南部の形勢は、貴州の土匪村から乗り出してゐたタンツモ(湯子謨)を總司令とする匪軍が、袁祖銘の軍に破られ、江を渡つて涪州から貴州に向かつて逃げ歸らうと云ふ時であつた。其の湯子謨軍に依つて宜陽丸は襲撃掠奪の悲運を見、船長は銃殺され、機關長と一等運轉士は人質とし

て山野溪谷の間を曳すり廻されたのである。その起りは元來宜陽丸が萬縣を出帆して重慶に向はんとする往航の際であつた。夜半萬縣で軍隊から無理やりに武装した兵をして仰山な荷物を積ませやうとする。船では百方之を拒み抗爭したが遂に肯かないで、夜隱に乗じて積込んでしまつたと云ふ事實がある。いかによくその非法行爲であると云ふ事を楯に取りシヤット・アウトして拒んで見ても肯き分けがなく次の航行に銃口を向けて射撃すると云つたやうなことをする。そして曰く、四川の江上を航行する以上は當然云ふことをきくの義務があるなどと云ひこちらの言に耳を藉さず、唯無茶な態度に出るのみである。それも多勢でやつて來るときは方法がつかないのである。あとで判つて見るとそれは〇〇であつたことが判明したのであるが、仕方なく萬縣を早朝立ち途中いつもの如く江上ピンスイバ平緩場の鳥影に夜泊し、其翌涪州に着く計畫であつた。船は止むなく出したことは出したが船長の考へでは萬縣の軍隊と涪州の軍隊とは味方同志の間柄であることを確かめ、又他からのニュースによつて見ても涪州の地は従前の通り袁祖銘系の同じ軍隊が守備してゐとの情報も得てゐたのであつた。

かくて宜陽丸は萬縣を船出してから江を遡り、途中平緩場の例の島影に錨をおろし、こゝに江上夜泊をしたのであつた。思ふに此の時、或は敵軍の匪兵が探偵でも出してゐて、同船の夜泊を好機會に夜中乗り込んで来て積荷の内容など隈なく探知したのではあるまいか。或はそれとも始めから同船に忍び乗込んでゐた反對の方のスパイのゐて積荷の内容などを探知し、この島からおりてそこから秘密裡に涪州へ急報でもしたものかも知れないのである。反對同志密偵は双方共に乗込んでゐるのは常のことである。これらは江上を行く船に無賃乗船を極め込み平氣な顔して乗つてゐるのである。その銃剣を持てるは勿論船内事ある毎に之が嘴を入れおせつ介な仲裁役を勤めて双方から幾らかづつ稼がうと云ふのである。或は又陸の仲間へ暗號で以て通信をし、船に對して不益利なことを計畫するものもあると云つた様なことが頻々ある。全く油斷も隙もならないのである。時折り各港で見付かり次第片づけしから彼等を摘み出すやうにしてゐるが、船の乗組は買辦と共に此の間題では少からず頭を痛めてゐるのである。しかしあとで仇をされることがあるから随分その處置には閉口させられるのである。

扱て宜陽丸は同じ島影に絃々相摩して夜泊をしてゐた同じ會社の雲陽丸と共に翌朝出帆の汽笛も威勢よく、兩船、前後して霧立ちのぼる朝の江上を勇しく出帆したのであつた。

此の時四川の形勢は運悪くも僅か一日の中に一變し、かみの方殊に涪州は袁軍敗れ敵の湯子謀軍に依つて占領せられ、例に依つて掠奪強姦などの非行も盛んに行はれてゐたのである。

しかし船ではさうした情報を知るに由もなく、平常の如く遡江していよいよその左岸長江の本流と涪陵江の合流地點へ差し掛かるところあたりから、そろそろ速力をゆるめそして涪州のかみ例の荔枝の江上に錨を下したのである。途中で會つた外國船の示してくれた黒板のニュースも見てゐることだし何等疑の氣持ちもなく安心をして寄港したのである。すると思ひがけなくそこへ湯謀子の匪軍が武装したまよどやどや數多の小船に分乗して漕ぎ寄せて来る。あわやと思ふ間もあらせず船内につつか侵入して来るのである。船では突然の騒動に上を下への大騒ぎとなり、銃砲の音は山に響いて物凄く、船内は忽ちに一大修羅場と化したのである。

いくらか遅れて這入つて来た雲陽丸は、錨をおろすことはおろしたが、どうも様子がをかしく、

怪しげな小舟が押寄せて來ると見た。そして船側の梯子に今も手を掛けて登らんとする其の刹那、事重大と見て乗組の高山君は、錨鎖のつなぎ目を機敏にはづし碇を棄て、一目散に、千里の江上を一日にして下り命からがら逃げ了せたので運陽丸の方は船體、乗組諸共に全く虎口を免れ事無きを得たのであつた。

ところで哀れ宜陽丸の方はすつかり匪軍の餌食となり、船長はエンジンテレグラフに手を掛けた際ピストルで殺され、そこへ制服姿のまま打倒れたのである。機關長宮崎竹治君と一等運轉士高橋久司君の二人は縛られて陸に拉致されて行つた。其の他の日本人の乗組嘉村君は、顔に鉛墨を塗り火夫の茶つ葉服を着たまゝ、釜焚きの間に混じつて純支那人に成り澄まし辛くも支那人乗組みと共に新蜀通號に助けられ命を拾ふことが出来たものである。

陸に拉致された一等運轉士高橋君は船長が如何になつたか氣掛かりでたまらぬので、湯子謀の兵の眼を盗んで小舟で宜陽丸にも歸つても見たかつたが如何とも出来ぬ。そのとき見るも哀れに細川船長は既にやられてゐるのである。そしてあの肥満した遺骸は、廊下に曳すり出され、何とも云ひ

様のない慘狀を呈してゐる。船内は一物をあまさず大抵目星しいものは皆掠奪されてしまつてゐる。最早や遺骸に掛けるべき毛布もなければシーツもない。船長についてゐた支那ボーイは感心なボーイでよく責任を守り戸棚の鍵もよくちやんと始末し、船長の血しほに染めるからだには已むなく菰を探し出して靜かに之に打掛け、心恭しく南無阿彌陀佛を唱へつゝ其の英靈を慰さめてゐたのであつた。そして愈々例の二人は匪兵の囚となり人質として奥知れぬ秘境三界へ連れられて奥深く難行苦行の身となつた。ボーイは最後の思ひ出にと再び宜陽丸へ出つたところ、細川船長の屍骸は江中へ投ぜられたものか、船内何處にも見出されなかつたのである。やがてそのボーイも丸に當たつてやられた。そして機關長と一等運轉士の二人は生命だけ助けられたといふ丈で一年有餘といふ長い間人夫同様ひどい人質にとられ、人知れぬ憂き目を見る身となつたのであつた。

宜陽丸の船體は其の後土匪村の悪魔の手にゆだねられ殆んどなすがまゝに提供された譯であるから取れるものはすつかり掠奪されてしまつて全く輪廓だけの形骸ばかりとなり、約四十餘日荔枝の江上に淋しく浮んでゐたのである。日清汽船會社としても社有の船ではあるが全く當時手の付け様

がなく、その儘に打つちやつておく外なかつた。しかし何とかしなくてはならぬと云ふので其の後社内から竹下監督が出かけ、涪州に宜陽丸の遺骸を視察に行くことになつた。會社では種々な條件を出して勇士を募つても見たが始め應じ手がない。如何に國家の第一線に立つ榮譽ある使命など自覺してゐる者も、自分で土匪の犠牲になりに行くと言つた恐れの明白に判つてゐる仕事だもの。好んで引き受けませうと云つて出る者のあらう筈はない。假令その虎口を恐れなまい勇士が現はれ出ても、その細君、子供、老母から見れば死地に出かけてもらふやうなわけであるからとて、猛烈に之に反対し離縁問題まで起ると云ふ騒ぎもあつた。又そこまでなくともさう迄して四川まで這入る仕事を續けなくともなど云つて内々諫止して愚痴をこぼすものもあつたとき。併し結局西尾君其他勇ましい乗組のメンバーが纏まり、目出度く宜陽丸も航行の用意が出来江を下つて上海に回航され、修繕の施されるまでになつたのである。

### 十七 人質の苦楚を嘗め盡したる高橋一等 運轉士の來訪

四川の上流涪州に突發した宜陽丸事件は、長江の上流航路にとつて最も重大視さるべき問題であつた。けれども支那舞臺の出來事としては、此の程度の慘虐な事件は茶飯事に屬すること、殆んど取り立てゝ人の口にも上らなかつた位のものである。興國の日本としては、支那の第一線に立つ勇士の意氣を見てやらなくてはならず、又朝野輿論を大いに起すべき性質のものであつた。ところが折悪しくも其の事件の起つた時は、日本の暦で大正十二年九月七日の出來事のことゝて、關東の震災直後一週間に當たつて居つた故、東京の大新聞に於てすらも震災記事のみで忙殺され、四川の奥の宜陽丸事件なんかほんの僅か一度掲載されたに過ぎなかつた位である。

細川船長が氣の毒な犠牲に墮れた美談に次ぎ、人質として引廻はされた方面の珍らしい奇談もあるからそれをこゝに述べておかう。前にも述べたやうにその間四川貴州の天地を匪軍に曳すり廻さ



れた二人の乗組員は宮崎機關長と高橋一等運轉士とであつたが、支那里數の四千五百里と云ふ長の旅路をば死出の旅路でこそはなかつたが十三ヶ月からの長い間、時には或は一層殺して貰つた方がましだと思ひ詰めさせられたやうな苦しい體驗もあつた。天外の祕境に人質の身となつた兩君の心事は察しても餘りあることである。兩君は大正十二年の九月四日に宜昌の港を船出し五日の朝は萬縣を出帆し、翌日途中の孤島に夜泊し七日といふ日は、聞くも恐ろしいこの匪軍の人質となる運命になつてゐたのである。人間の一寸先きは神ならぬ身の計り知るべからざるものであることなど今更痛切に感ずる次第である。

その人質として一年有餘苦しみを嘗め盡くされた兩君の心を慰むべく、自分は親しく當時四川の上流にあつて、或は涪州に、或は重慶のかみの江津に、又ホウキヤン(合江)にと一々懐かしく訪ねて見たのであつた。或は又その城内、城外の綠林、ホワンコウス黄葛樹の下に現出さるゝ牢屋然たる民屋、又その胡瓜や絲瓜のからめる匪軍の宿舍などを一々訪ねて見た。人質は斯う云つたひどい乞食部屋同様の藁の中にごろ寝をさせられたのであらう。食べるものと云つても牛馬同様ひどい物

をあてがはれたものであつたらうなど、人知れず自分はその現場に踏み込んでみて同情の念を深めたのである。

十三ヶ月の苦しみから脱して十三年の秋十月、兩君は貴州の銅仁に配所の月を眺めてゐたが、湯子謨から百萬弗との振れ込みを〇〇弗に値切り之を身の代金として日清汽船の横田君が持つて行つた。湯子謨の本陣に手交すべく漢口から水路洞庭湖に廻り、常德に至りその人質釋放の交渉に當つたのである。交渉は〇〇弗といふ話にまつまり代金の授受と同時に人質の兩君はこゝに目出度く釋放の身となり、銅仁から湖南に出で、辰州常德を経て洞庭を渡り漢口に出で、上海から一空日本へと向かつたのであつた。自分は豫め此の行程を重慶に居るとき聞いてゐたので、何とかして一行に追付き、せめて漢口からでも一緒に兩君と同船し、其の勞を慰めたいものと考へ、急遽千里の江陵を一日にして下つたのであるが、一船違ひで同船することが出来なかつた。

然かし自分はその事を一日も忘れることが出来ず日本へ歸朝した後、兩君のうち高橋君を親しく小石川小日向臺町の小宅に迎へて、こゝに細川船長遭難以來兩君の釋放せらるゝに至る迄、曳すり

廻された四川貴州の地理並に土匪頭目日常生活の状況或は土匪村一帯の産業自治交通等に關する觀察を始め兩君に對する十三ヶ月間の匪軍の待遇振り、又其の裏面に潜む物凄き思ひ出など各方面に亘つての地圖と寫眞を材料に詳細に物語つてもらつたのである。

大體支那奥地の山郷から土匪村の状態、又かれ等の辛辣なる行動振りなどに就いては、兼ねて人一倍興味を感じ、又多少共體驗を有してゐる自分共に取つては、少なからず同君の實話に共鳴するところがあり其の話は全部悉く微細な點まで了解された氣持がして、時の經つのも覺えず夜に入つてまでも語り合つた次第である。

四川各地を人質となつて曳づられて行く間の物語の中に、宮崎君の方は瘦せて神經質の容貌を持つてゐる爲め、此の方は殺せば屹度死靈が取り付くであらう、併し高橋君の方は肥満してゐるばかりでなくぼやつとして居て神經も鈍ぶさうであるから、殺しても後の祟りが來ないだらうなどと云ふ様な事を土匪仲間話し合つてゐて薄氣味の悪いこと夥しいと云ふ様な實話もあつた。高橋君はこの話になんか苦笑してゐたのであつた。併し同君の體驗談に依ると、十三ヶ月間匪軍と行を

共にしてゐる間、殆んど湯子謀の傍らの室に寝かされ、いつも監視付である。そして人夫の寝る部屋の片隅に藁をひろげその中にころ寝をするなど可なり虐待を受けた。先づ殆んど猛獸のやうに山や谷を跋渉するこの平氣な匪兵と共に歩かせられるのであるから到底船から上がった兩君には無理なわけである。一層このやうに虐待されるのならば、一思ひに殺して呉れた方が好いと心の中で祈つて見た事も一度や二度でなかつたとの事である。

又時には牢屋同然のがらんとした天井の高い部屋に、手枷、足枷を嵌められたまゝ押込まれた事もあり、又それを解かれて部屋に監禁せられたこともある。時々監視人の中の上役が聲高らかに

「厄介だから一層のこと今夜の中に二人共片付けてしまはうかなあ」

などと一方の人間に話してゐる言葉が耳に聞えて來ることもある。人質の一人は支那語が分かるものだから、急いで其の事を一方の者に告げ知らせ様とすると、兇器を持つた監視人が出て來て、「オイコラ、話をしては不可ないぞ」

と之を遮るので、已むなく監視の眼を盗み指を以て壁に大きく、

「決心しろ、今夜は最後の日だ、やられるのだけ、今そんな話が向ふで持ち上つてゐるよ」と云ふことを書いて知らせると、一方は顔の色を變へて一種云ふべからざる表情を見せ、土の如く青ざめたのであるなど、随分悲劇が繰り返へされて居つたやうである。

併し四千五百里と云ふ長い道程である。其の間揚子江の對岸を渡つて四川の隆昌、榮昌等の各地から南下し、再び江を渡り省を越え思南銅仁へと曳づられたのである。同君がその過ぎ行いた地名を一々細かく記憶されてゐたのには、少からず敬服し、又驚嘆したのがある。尙其の徑路は地圖に依りて里數まで細かく明示された。今参考の爲めこゝに主なる地名を記して置かう。

その徑路は始め涪州から出て綦江江津に至り、貴州さかひを過ぎて柏林に出で、西の方中興場から瀘州の側に出で、西岡場から一路北方に向ひ、隆昌、榮昌、來蘇へと東又は南に向ひ、次で楊子江を再び渡り、白沙街から川添ひを行つて合江に出で、再び又柏林に歸り南銅辛に出で、板橋から綏陽に向かひ、東して思南銅仁に留まり貴州さかひから南洞庭湖に出たといふが、その大體の足跡となつてゐるのである。

これ等の各地點の中にはかなり景色のよいところもある。人質ならぬ自分共旅客の眼からすると長江沿岸の白沙街はうしろの方が次第に上り加減になつてゐる山中の町であつて、溪間に沿ひ白壁紅壁の美しい家が立ち並びそのうちにも特に高く洋風の樓閣の聳ゆるは一際目立つて鮮かに眺められたのである。又合江には城壁に接して古い寺廟がありその門前には佛手柑の露店などあつて匂香ばしくそのよく熟してゐるのを一山安く賣つてゐるのを見たり、又其の地方の卑俗な赤本黄表紙類を露店に列べて客を呼べるなどいかにも田舎らしくてよろしいのである。城内の目星しい寺に到り門を潜つて中に這入つて見ると、僧房は一人の坊主も影を見せず堂房と云ふ堂房は悉く匪兵の爲めに占領せられ、御本尊の祭壇には蠟燭の一本も手向けられてゐるでなく、誠に淋しく眺められたのであつた。

又奥地の山境に就いて機關長の話を見て見ると、四川さかひを越えて貴州の山境に這入つて見ると野に山に見渡す限り一帯に罌粟の栽培が盛んに行はれ、各村何れも阿片の製造に餘念がなく、その罌粟畑の景色と云つたらないのである。實際又綦江にしても涪陵江にしても、その江水の碧く

風光明媚なること賞讃に値するものがあるのであるとの事である。

尙人情話のうちには人質を釋放する前晚のことであつた。湯子謨自身が送別會の意味で、兩君の爲めに宴を張り、部下を山寨に招き集め離別の情を惜しみ行を盛にしてくれたさうである。其の時湯子謨の言に、

「俺も一度は日本へ行つて見たいが、日本と云ふ所は大變好い所だと聞いてゐる」

などとお世辭半分の愛嬌を振り撒いてゐたと云ふことである。前にも云つたやうに最初湯子謨の方では人質の身代金は百萬弗と大きく吹つ掛けて居つたのであるが、重慶の領事貴布根氏、町田書記生邊りが中心となり色々樽俎折衝の任に當たり骨を折つた結果こちらはいきなり八萬弗に値切つてゐたが、結局〇〇弗といふ事で話を付けたのである。そこで現金は日本から湯子謨の腹心某に手交せられ、其の情報の内容が委細銅仁にゐる湯子謨の山寨に達するなりすぐさまこゝに二人の人質は長の人質生活から釋放されて、漸く籠の外の鳥となり一路湖南洞庭の湖上を渡り、目出度く此の世の人となりて歸朝の出来る身となつたのである。

## 十八 臺灣土匪の思ひ出

今日臺灣には四百萬近い支那民族が、日本籍民として現代的日常生活を営み、之が殆んど水も漏らさぬ完全な警察行政の下に統制せられ、今日では最早や何等申分のない植民政治を遂げてゐる。否むしろ臺灣文化の向上發展を計り各方面の種々な意見も徴せられる位までに進んで來た。臺灣が日本の新領土となる前の、各地の社會情態を古老から聞いて見ると臺中の田舎タンシ嶺からコロトシ(豊原)あたりにかけては夜路が危険で子供を戸外で遊ばせて置くやうなことでもあれば、人攫ひが來て連れて行つて了ふと云ふやうな情態であつた。それ故夕方限り子供は戸外に出さない事にしてゐたと云ふことである。その他臺灣島内各所に土匪の蜂起してゐたことは申す迄もないことで、それが爲め良民は年々少なからぬ被害に悩まされてゐたのであると云つてゐる。

領臺以來といへどもかなり永い間土匪討伐の事業は廢止の出來ないのみか、随分物凄い場面を演

じてゐたこともあつた。その中でも有名なのは例の大正四年の夏自分が丁度臺灣南部に遊び、臺南の田舎麻荳から灣里地方を廻つてゐた時であつた。時も時、眞夏のあの暑い八月の土用の頃であつた。臺灣に有名なタバコは噍吧呢事件と云つて、土匪の活躍した大騒動があつたのである。臺灣に起つた土匪事件の中でもこれは空前絶後のものであつたかも知れぬ。實際此の時位その大規模に又巧妙に行はれたことはなかつたのである。

當時恰かも臺灣は全島を擧げて施政二十年の記念事業が各所に計畫されてゐたときで、その好時期に乗じて臺灣本島人の不良性を帯びてゐた者共は、種々な流言蜚語を放ち、飛んでもない事を云ふのである。日本政府はこたひの二十年記念をさかひに臺灣の行政權を臺灣人に委ねられるに至るであらうとか、若し日本の官憲にして本島人の間に抗争を開く様な場合があつたとしたならば、アメリカの飛行機隊が對岸の福建省地方にまでも来て吾人を助けてくれるであらうなどと勝手な流言を吐いて愚民をまどはすのである。そして今後の臺灣は當然我々の手に歸すべきものであるなどと架空の宣傳をなし羅俊始め數多の頭目なども之を力説しその氣勢を擧げてゐたのである。

又當時文字の讀める不良性を帯びたものは、黄色い一枚紙の御札を作り、それぞれ魔除けの文字を之に書き、一枚を大枚五圓と云ふ高い値段で民衆に賣り付け、又リボン代りに之を胸に藏すれば日本人の彈丸は決して當たらぬ必ず彈き飛ばされて了ふのであると云ふやうな出鱈目の効能を述べ立て盛んにお札を賣り擴めやうとしてゐるのである。

かやうな空氣であつたものだから臺灣島内には不安の氣に満ち、當時なんとなく人心が動搖し、何事か變事でも起りはしないであらうかと云ふ氣持が高められて居た。ところが宛かもその時分に臺南の市中に西來庵と云ふお寺の新築落成祝賀が催されることになつてゐた。此の庵寺は素菜と云つて精進料理のみをとる所謂菜食主義の信者を持つてゐるのである。臺南の知事を始め、各方面の官民はこゝに招待を受け賀筵の席が開かれてしばらくすると、其の日の御馳走の中に恐ろしい仕掛のしてあることが分つたのである。若しうっかり其の時の山海の珍味に箸を付けたならば、満座の賓客は其の儘參つて了ふと云ふ譯になつてゐた。これはよくあることでその御馳走に毒が盛られてあつたことは想像されるであらう。宴酬なるところにまゐる前、早くもその事が探知せられ、直ぐ

さま料理番の方の取調べを嚴重にやり、且つそのうしろに糸を引張つてゐるものが何れの方面と聯絡を取つてゐるかを更に深刻に探査した。ところがどうも噍吧呢村其の他近村のものが全部之と相呼應してゐるらしいと云ふことが判つたのである。

そこで噍吧呢村に對する徹底的討伐が始まつた。事實村の百姓たち女房達までが、人の通る時には何事も無さげに農事に従つてゐるやうに見せかけてゐるが直ぐ後で綠蔭に隠れて、懐ろにしてゐる紅の旗を取出し遙か同ふの村のものと暗合で合圖をするなど、頗る穩かならぬ空氣が漂うてゐたのである。

當時自分は臺灣出身の青年にして、東京に遊學してゐる學生幾百の人達の監督事務をとつてゐた關係上、親しく灣里麻荳方面に行つて家庭を訪ね、恰度楊丙炎と云ふ學生の家庭にしばらく滞在してゐたのであつた。ところで臺南の街に出て見ると非常な騒ぎが始まつてゐるので少々驚いた。灣里ではソワヤ、ナバット等の果樹林に鳴く鳩の聲を聞き、或は月を賞したりなどして臺灣南部の氣分に打たれて居つたのであつたが、急轉直下、臺南の空氣の緊張味を見せてゐる有様を見て、意外

な感に打たれたのである。當時或る村の如きは土匪の蜂起猖獗を極め、事態容易ならず兵を用ひて之を鏖殺するの已むなき形勢に至つた所もあつた。そして其の遺骸の河水を流れ行く者など、慘たるものがあつた。一ヶ村を片付け、次の村を屠り最後に残つたのが此の噍吧呢村であつた。村の土匪共は自分達の所だけは特に庇つて呉れて、命だけは助けて呉れるものと見たのか、討伐隊の營舎へ非常な御馳走をして、持つて來るとか懸命に愛嬌を振り撒いて居たのである。翌日村民全部を二列に並ばしめ、之に對して一齊〇〇を試みんとした時、中には銃口を覗かせて呉れるのであらうなどと、呑ん氣な氣持で之を打眺めてゐた者もあつたといふ。無論何等之を許すべき理由もなく餘地も無いのであるから、卽座に彼等を處刑し終つたのである。其の時頭目の目星しいものは羅俊を始め何れも山手の方面に逃亡し、姿を消してしまつた。以來未だに其の消息を聞かないと云ふことである。斯くの如くして臺灣の土匪も一時は随分猖獗を極めて居つた者であるが、その後は全く見ちがへるやうに其根を絶つに至つたのである。

尙臺灣は高山地帯に入り、奥地の生蕃部落の方に這入つて見てもその被害は漸次薄らいで來て、

今日では當局の力も力だが嘉義の奥の吳鳳の廟に祀られてゐる首狩根絶に有名な神靈の餘光が普及されたものであらう。山手の方面にも其の危険を見ることは全くなくなつたと云つてもよろしい。實に領臺當時の有様を考へて見ると當時の臺北地方に於ける土匪討伐の如き、又山中に於けるガオガン、タルコ等の骨の折れた討伐隊も其の終りを告げて、今や全く蕃界其のものは普通の行政區域内に編入せられ、彼の首狩の奇習の如きも昔の夢物語と化するに至つた次第である。

今日自分たちは冷靜に臺灣行政の跡を見て、支那對岸地方に於ける物凄く土匪の被害、馬賊の横行、動亂の苦惱などの實現を見、その慘たる破壊掠奪の光景を見て來る時は、臺灣の治績が今日の如き成績を擧ぐるまでの苦心に就いては流石は世界植民史上第一等地を抜けるところだけあつて容易でなかつたことを察するのである。唯今後は物質文明の點よりも深刻なる精神文化の發揚、民族的氣分の發揚と云ふことが一層重大視さるべきものとなつて來たのであるから、この邊の圓滿なる融和を期することに着眼することが將來の問題となる點であると信するのである。

512638

## 十九 匪賊の末路

土匪馬賊を商賣に稼いでゐた者の身の上を眺めてゐるに、どうせ仕事の仕事だけに最後を完うし得る者と云ふは少ない。こは身から出た錆で朽ち果てるのであるが、しかし一度其の味を占めると生涯忘れられなくなつて、益々その仕事は大きく、益々深みに陥るのである。さうして其の得た金を持つて、秋の末土匪の仕事の出來なくなる頃になると街へ出て酒色に耽つてたりなどする。すると官憲に臆くも捕へられ、拉致されて行くやうなことになるのである。

或は又他の匪賊と戦を交へ、其の結果暗殺されるとか云つたやうな風に普通の死に方はしないのである。貴州で有名であつた匪軍の巨頭湯子謨の如きも其の例に洩れず、遂に部下の爲めに毒を盛られてやられたのである。一生を匪賊に捧げ、之に身を投じて、十萬弗からの臨時收入を得たとて、どうせ部下も部下である。勇將の下に弱卒なしであるから、譯なくやられて了ふ。されば巨

頭などの生命と云つたところで累卵の上に居る以上に危険なのである。元來が命を棄て、掛かつてゐる仕事とは云へ、彼等の末路は悲惨を極めたものに相場がきまつてゐる。

曾つて北滿の山中で稼いでゐた某馬賊頭目の如きは、吉林に出で、奉天を経て大連に來り、大連より日本に渡り、捲土重來の再舉を計つてゐたのであつた。が日本に來て浮世の風に吹かれ、日本と滿洲を股に掛けて鬼行を恣にし、關東の野狹しと馳け廻つてゐたのであつた。その間諸方面に數多の子分を作つてもゐたが同時に、又怨を買つた向きも少くなかつたと見えて、遂に東京市外高圓寺の村外れで暗殺の悲運に倒れたのであつた。

斯様な次第で、土匪馬賊の最後と云ふものは自ら求めて悲惨な死方をしてゐるのである。が、支那では又特に其の官憲の手に掛かつて、見るも物凄しい死刑の悲劇を演ずる者が、隨所々に頻々として見出されるのである。揚子江筋には殊に夏の晝の日中、或は月夜に乗じて荷物船を襲ひ、海賊を稼ぐ手合ひが遂に身にたたつて、結局舟は瓜二つに挽き切られ、堤防柳の並木のかげに見せしめに打立てられそして匪賊自身は多く銃殺に處せられると云ふがおきまりである。

福建、廣東の如き南部はこれ亦土匪の本場で、官憲の處刑は實に其の酷を極め、或は磔殺、或は銃殺を行つた上に斜十字に突き刺すなど大慘狀を見せてゐるのである。さうして死刑場の兵隊の射つた弾丸は、美事心臓を貫けば半身の筋肉はびり／＼と痙攣を起し始めるのである。又その弾丸が心臓を外れて腦袋にでもあたれば、頭蓋骨は二つに割れて腦味噌が鼻柱に傳はり、又左右の兩頬に流れ血と混じつて來る其の慘狀は又筆紙に盡されなくらゐである。而かも之を見てゐる多くの民衆はお花見氣分で之を眺めてゐて、何等顔をしめ様ともしないのである。が官憲の方では見せしめの爲め出來る限りの慘狀を演ずるべく種々苦心をしてゐるのである。



四 支那兵と巡警

## 二十 便衣隊

風雲暗澹たる支那の動亂期に乘じ、或は何か一騷動起るのではあるまいかと云つた豫言がどことなく傳はつて來る場合には、支那各地に惡魔の横行を見るであらうと云ふ考への漲つて來るのは當然である。誰れ云ふともなく道行く人々は惡魔に就いての恐れを懷き、毎夜九時過ぎては往來に人影を見ないと云ふ物々しいこともある。上海邊りで間々その非常時に戒嚴令の施かれた時なんかは十時以後或は十二時を過ぎると市中の往來を嚴禁してしまふと云つた物々しい場面を見せたことも少くないのである。

最近支那が國民黨の天下となつて以來、上海を始め各地に共產黨系の便衣隊なる者を見るに至つたが、これは從來の所謂惡魔の横行にも似たる恐ろしい感じを、老若男女を問はず市民一般に與へてゐる。便衣隊と云ふ言葉の響きを耳にする丈でも非常に物凄氣持を聯想せしめるのである。便

衣隊の手合は普通の服装をなし一見たゞ道を歩いてゐる行人と變りのない姿をしてゐるのであるが然かし其の任務とかその組織に就いては、頗る極秘的であつて、他人に感づかれないやうにし而かもよく要領を得て行くやうに聯絡がとれてゐるのである。

最近國民革命軍が使役してゐた便衣隊にしても素晴らしい活躍振りを示し、その仕事のあとを見ても巧妙な効果を擧げてゐる。既に世人も知れる如く近來は大軍を動かすよりも要領のよい處を便衣隊で以つて狙撃せしむるに限るのである。その直接行動に就いては滿天下の者は悉く惡魔以上の驚異を感じてゐるのである。國民革命軍は此の便衣隊に依つて、戦局を左右し又いかやうにとも戦略を有力に展開することも出来たのであるから、其の便衣隊の功績は非常なものであつた。吾人が所謂南軍の便衣隊に就いて知れる所の最近の知識ではその組織並に其の活躍振りに次の如き興味ある事項が発見されたのである。之により便衣隊の正體はほと突止められるし又その隊内部の部署とその要領、活躍振りと云つた方面は手にとる如く知らるゝのである。

一、便衣隊の組織は六人乃至十人を以て一分隊となし、之を一排と云ふ。そしてその三排を以て

一、便衣隊の單位となしてゐる。

二、隊長には軍隊の中隊長に相當する待遇を與へ、之を聯長と稱してゐる。そして隊員の待遇は陸軍の軍人に準ずるものとなしてゐる。

三、排長並に隊長は各地の縣知事に於て、之を任命するを得となしてゐる。

四、便衣隊の經費は省庫から之を支辨すること。

五、便衣隊の任務

イ、北軍の各團體長を暗殺すること。

ロ、北軍の各司令部及び本部を襲撃し、之に依つて攪亂を引き起すこと。

ハ、北軍の進路を妨げ遮斷すること。

ニ、北軍の兵糧並に軍需品を爆破焼失せしむること。

ホ、北軍の電信を切斷し、鐵道を爆破すること。

六、北軍の各團體長を生擒り拉致し來たりたる者には左の如き賞金を與へること。

師長	一萬元
旅長	五千元
團長	二千元
衛長	二千元
聯長	一千元

但し密告せしものに對しても右金額の三分の一見當を與へるものとす

七、便衣隊の各員にはそれぞれ手榴彈三箇づつを支給し、ピストルを携帶せしむること。

以上の如き組織を整然と立て、それぞれ其の賞金を目的に秘密の活躍に従事せしめ、盛に北方軍閥を悩ましめてゐたものである。

更に又南京に國民革命軍の政府の設けられた當初、其の司令部は上海の龍華に置かれてあつたが其の當時上海の市中には所謂共產黨の手足となつてゐる便衣隊が、租界内の各方面に跋扈しピストルを懐ろにして横行濶歩してゐたものであつた。上海の各市中では辻々に増員せられたる各國の警

備隊員や巡警等が見張りを嚴にし、夜十時過ぎて後若しうろついてでもゐるものを見るときはその便衣隊がいきなり一々身體検査をやつたものである。其の當時の上海市中は實に死の街を歩いてゐる様な感じがして、街頭を照らす夜の電光も冷やかに薄氣味が悪るかつた。又時折四辻に吹く呼子の響も物凄く、警備隊や機關銃を軍用自動車で運んで行く光景等も全く心膽を寒からしめたものである。實に惡魔の横行する際の市中と云ふものは斯くの如くたゞ唯悲壯な感に蔽れてゐたものである。

尙上海がイデンブリツチの橋畔には便衣隊が人目につかぬやう身をひそめてゐて、目星を付けた自動車のドライブして來るものがあると、見るよりも早く即座に呼子を吹き自動車を止めさせてしまふ。そしていきなりドアを開け否應なしにピストルを突付けるのである。何事かあらんと見てゐる。道行く人に對しても嚇かしのピストルを向けるのである。橋の手前に赤旗を翻へしてゐたロシアの領事館は今閉鎖されてゐるが當時その筋の警備隊に依つて劍突鐵砲で警戒されてゐた。そこから邊りの冷めたい光景と云つたら自分は現場を見てゐただけに實に何とも云へぬ凄味を感じたの